THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第九號

第二百四十六號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

國史研究上唯一參考書

參考

日本大歷史

文學博士 星野恒校閲
文學士 青木武助著

上製脊皮美本
菊判形全壹册
總頁壹千二百六拾餘

本書の目的

國史の書行はるゝ者少なからず而未中等教育に於て教授の參考に資し同教員檢定受驗用に充て兼て中等上級學生初等教育從事者の研究に最適切なる者なし本書は如上の目的に添はん爲編著されたり

本書の組織

本書の目的上述の如し故に其組織は文部省中學校教授要目日本歷史科第一、二、五各學年分に準據し之を適宜配合し編章の區分を立てたり又要目外の著名なる史實をも彩錄せり故に直ちに教授資料を得且研究上にも利便此上なし

本書の記述

著者は國史專攻の學士なり而從來此種の史書が妄りに新說奇論を載せて往々初學者を誤まるを慨して記述されたる者なれば最記事の著實にして所說の正確ならんことを期せられたり即史中の疑點に遭逢する每に必古今大家の所論を考覈し奇矯なる者を捨て最穩健なる者をとり猶決し難き者は具さに事由を錄して疑を存せり

本書の校閲

本書の記述に就いて著者は尚一層忠ならむことを期し斯界の泰斗星野博士の校閲を經たり博士の校閲亦嚴密懇切を極め草稿成るに從ひ親しく之を檢閲し手つから雌黃を加へて一字一句も忽にせず加之意に充たざる所あれば著者に命じて之を改作せしめ更に檢閲を加へられたり以て所載の事實最も正確なるを證するに足らん

本書の價値

如上の方針と用意とを以て本書は公にされたり即本書は中等初等教育に從事せる國史研究の人士其他苟も開闢以來現代に至る迄の正確なる國史の知識を得んと欲する者の良師友たるべし

定價金貳圓八拾錢（小包送料金拾六錢）

發兌 東京本石町 大阪備後町 （振替口座）東京二八〇 大阪四三 **寶文館**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

◎身長法の發明

◎如何なる矮小なる人にても如何なる老人にても身丈を延長し得る

凡そ科學界の注意を惹きたる新發見も少からざる中に米國ニューヨーク州ロチエスター市のケー、レヲ、ミンジス氏が爲せし發見より大なる注意を惹きたるはあらざるべし。氏が矮小なる男女に於けるは猶沒大發明者エジソン氏が電氣に於けるが如くなるべし。氏は格骨、筋肉、健肉等に就いて深く研究したる結果得たる智識は恐らくは現今の學者中比する者なかるべく、即ち此智識を以て、矮小なる人を延長せしむるに就き過去數年間獨特の技能を示し其收め得たる功果は驚くべき程なり。此術に依れば年齒五十以內の男女は二吋乃至五吋の身長を增し、又五十年以上の者と雖も多少身長を增すを得べし、氏の延身法は醫術大家の紹介に依つて今は著名なる學校にて生徒の體育法の一として採用するに至れり。身長を增さんと欲する者は此異常なる發見の成れる歷史及び延身の秘術を示したる書を一讀すべし。希望者へ此方法に依り二吋乃至五吋の身長を增し得たる數百の人よりの證言を無代價にて送るべし。此方法は迅速なる結果を現はし、多くは二ケ月間に三吋を延し得、又此方法は最も衛生的に且無害的にして科學的原理を應用したれば決して不便を與ふる事なく、賣藥、醫藥等を要せざるは勿論又毫も手術の如きをも施す事なし。されば親友としても之を應用しつゝある事を決して氣付るゝ憂なく、尚本社は其上にも秘密を保たんが爲に總ての交通に白封筒を使用すれば他人に悟らるゝが如き事はあらざるべし。本社は『延身の秘術』と題し、圖解を以て説明し、何人にも趣味と利益を與ふる書物を發行したり、此書は今回一千部を限り、無代價を以て萬國聯合端書若くは端書に貳錢五厘の印紙を貼用して左記米

◎人體を革新すべき驚くべき發見

◎短小者の福音!!!



名宛
CARTILAGE COMPANY,
DEPT.
ROCHESTER, N. Y.
U. S. A.

米國ニューヨーク州ロチエスター府カーチレーヂ會社

通信は總て日本文にて名宛は可成歐文にて認められたし

（英語を知らぬ人は英語の宛名を切抜き）

赤手空拳以て巨萬の富を積むは實業家也。本社が奮然起つて

● 如何にせば少資本にて成功し得べきか？との大問題を去

に掲げ懸賞募集せし結果本書は出版せらるゝに至れり、この奇抜なる

四月中の諸新聞

事實と左の目次とは如何に實業界に奮闘せんとする者の必讀書たるかを知るに足らん。

少額資本 實業成功法

▲四六版全一冊送料共金卅二錢（振替二錢増）郵券代用卅六錢▼

大好評

活眼を開いて出版界近來の活書を讀め
賣切又賣切！忽ち第六版發行製本出來

● 本社の懸賞募集の結果は資本金五圓乃至百圓にて研究と成功し得る左の職業を選定し得たり。

▲人の氣づかぬ最新職業　▲高尚利益多き營業
▲外見惡くも大利ある業務　▲地方田舍の有望事業

右合計五十餘種何れも其營業法に至る迄詳細に記述し、調査確實、何人にも一讀直ちに實行を期し、更に參考として左の數項を加ふ。

▲何故に東京に出て失敗するか▲如何なる實業が大成功を得るか▲最速に大成功を得べき四大事業▲資本金を得る法▲借金償却法▲不景氣利用法▲四個の商略▲驚くべき計算表▲最有望なる實業學校▲全國財產一覽等皆一字千金何人も急讀すべき良書也

小學卒業 立身案内

第十七版

發行父兄及青年必讀せよ
一冊送料共廿七錢　切手代用三十錢

▲目次▲如何にせば小學卒業にて最多くの月俸を得べきか▲少額の學資にて卒業する有望學校▲官費學校案內▲最良き苦學方法其他

來る九月廿日限り中央公論の廣告を見し旨申添の方に利息早見一部宛を進呈す

● 發行所　東京神田錦町三ノ八　振替東京一六一八番　學友社

自園製茶定價表

▲濃茶十匁ニ付

綾の白	六拾錢
一の白	五拾錢
子日の友	四拾錢
以久昔	参拾錢

▲薄茶十匁ニ付

大園	拾八錢
上別儀	拾五錢
別儀	拾参錢
廣葉	拾錢

▲玉露二百目ニ付

綾洞	拾圓
雲脚	七圓五拾錢
龍鳳	五圓
碧雲	参圓五拾錢
双鶴	貳圓五拾錢
眠鶴	貳圓五拾錢
栂の尾	貳圓
綾の玉	壹圓八拾錢
岡の露	壹圓六十錢
衣笠	壹圓五拾錢
室の花	壹圓四拾錢
雲の錦	壹圓貳拾錢
玉露	壹圓

▲折物二百目ニ付

白鷹	壹圓八拾錢
友白髪	壹圓五拾錢
白雲	壹圓貳拾錢
白折	壹圓
明石	八拾錢
舞鶴	七拾錢
鶯か音	六拾錢
若杉	五拾錢

▲眞粉二百目ニ付

上玉眞	壹圓貳拾錢
玉眞	壹圓
上玉粉	六拾錢
玉露粉	参拾錢
喜撰粉	貳拾四錢
煎粉	拾八錢

▲煎茶二百目ニ付

三丘	壹圓五拾錢
無双	壹圓貳拾錢
双ケ岡	壹圓
岡の花	九拾錢
正喜撰	八拾錢
喜撰	七拾錢
朝日	六拾錢
常磐	五拾錢

登録商標

本店　京都市綾小路西洞院東（電話八八五番）
支店　大阪市高麗町四丁目（電話東四四二五番）
出張店　東京市日本橋區田所町（電話浪花四〇三三番）
出張店　名古屋市玉置町四丁目

杉本三丘園茶舖

（定價表御入用の方は御申越次第送呈）

米國インディアナ大學敎授 ワーナー・ファイト著
文學博士 中島力造先生校閲
文學士 大島直治先生譯

倫理學原論

（好評再版）

總クロース全一冊
紙數七百頁餘
定價金貳圓
郵稅金貳拾錢

本書は斯界の泰斗たる著者が現時歐米の學界に於て其勢力を縦にしつゝある所の諸種の倫理學說を網羅し、そが希臘以來三千載を通ずる史的發展の跡を繹ねて、是れを最近に於ける諸科學及び哲學の歸結に照らし、一々細緻綿密なる批評を加へ、かくて公平穩健なる立脚地より之が圓滿なる調和を企てたるもの也其識見の該博にして卓拔なる、其論理の嚴正にして精致なる、其所說の深遠にして而かも實際を離れざる將た又其流麗にして暢達せる本書を措いて他に其比を求むべからず。これ眞に倫理學界を飾る所の完璧にして又人生の行路を燭らす所の燈明臺なりといふべし。されば本書は敎育家や哲學及倫理學の研鑽に志すものや、多岐なる人生問題の巷路に迷へるものは勿論、苟も社會の風敎に關心するものゝ一讀すべき絕好の良書にして殊に文部省中等敎員檢定試驗に應ぜんとするの士に取りては無比の寶典たるべし

文學博士 中島力造先生講述

德育と倫理

（好評再版）

洋裝全壹冊　定價金壹圓　郵稅八錢

本書は中島博士が近時德育及倫理に關して、發表せられし論文を蒐集せしもの也。其の特色とする所は、博士が該博深遠の學識を以て最も通俗的に、我國道德の實際問題を說明せられし點に在り、議論の中正穩健なる敍述の明快流暢なる何人も一讀せば直に會得すべきの所、今敢て贅せず、實に本書は天下の敎育家たる者は勿論苟も風敎に志あるの士は必讀すべき良書なりといふべし

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目（振替貯金口座第二八〇九番）　目黑書店

理學博士　横山又次郎著

新刊　地史學講話

總洋布製全一冊　紙數五百卆頁
正價壹圓六十錢　郵税十二錢
（鮮明木版圖三百五十餘箇入）

地史學は地球創始以來の變遷發達と地上に於ける動植物の變遷進化とを討究する一新化學なり學者之に依て地層の新古を知るべく又之に依て生物進化の實跡を明にすべし故に一たび之を繙くときは今や全く絕滅して其隻影をも留めざる巨獸猛蛇怪樹等の跋扈せし時代あるを知り得ると共に其化石の存在せる地層に照して其時代を確むることを得べし其學の珍奇多趣なる今茲に之を贅するを要せず特に本書は博士の多年の討究に基き全部口語文を用ひて最も懇切に講述したるものなれば一見卷を掩ふ能はざるの妙あらん

横山博士著

五版　**天文講話**　特製全一冊　價一圓十錢　郵税十錢

三版　**地學概論**　特製全一冊　價九十錢　郵税十錢

新刊　天文學講話

總洋布製全一冊　紙數三百𠦜頁
正價壹圓三十錢　郵税十二錢
（鮮明木版圖百二十餘箇入）

天文學者の見地に立ちて地球上の諸現象を講明するもの是即ち天文地學なり故に地球の形狀、自轉、公轉、晝夜、四季、日蝕、月蝕、磁氣、極光等の生ずる所以を研究するは言ふに及ばず凡そ地球の天體に對する一切の關係を講明して遺漏なからんことを期するものなり本書は横山博士が深邃の學識を傾ける百廿餘個の圖書を加へ極て明快なる講述を試みたるものなり斯學に於ける近來出色の好著たる又何ぞ疑はん

發行所　東京早稻田牛込　早稻田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

此廣告により御申込の方は中央公論による旨御附記を乞ふ

版發行

- 林甕臣先生・棚橋一郎先生共編 ●日本新辭林（第卅四版）定價金八拾五錢 郵税不要
- チ、エン、バー氏 ●英語辭書附補遺（全二冊）定價金壹圓六拾錢 郵税十貳錢
- エフ、ブリンクリー先生著 ●新語學獨案內（新版）特價金貳圓八拾錢 郵税十六錢
- 井上十吉先生著 ●新譯和英辭典（第二版）定價金壹圓六拾錢 郵税八錢
- 南條博士・前田博士共編 ●佛教聖典（第七版）定價金六拾五錢 郵税八錢
- 高桑駒吉先生譯 ●中等東洋歷史詳解（第三版）定價金壹圓六拾錢 郵税拾貳錢
- 高桑駒吉先生著 ●中等西洋歷史詳解（再版）定價金壹圓四拾錢 郵税拾貳錢
- 三省堂編纂 ●新版最新世界年表 定價金六拾錢 郵税六錢
- 山田內通敏先生著 ●趣味の地理歐羅巴 定價金八拾五錢 郵税八錢
- 天文學會編輯 ●星座早見（第五版）定價金五拾錢 郵税二錢
- 日本歷史地理學會編 ●鎌倉文明史論（再版）定價金壹圓 郵税十二錢

東京神田 三省堂書店發行 振替口座東京一五九七番

信用なき店舖及猥卑なる賣品の廣告掲載は謝絶す

九月號の大躍進

毎月一回

文藝倶楽部

一日發行

第拾五巻第拾貳號九月一日發行正價貳拾五錢（郵稅貳錢）

▲小説 **美**（義徳書） 廣津柳浪

これ百頁に亘る長篇の傑作にて、明治文壇の巨匠が苦心慘憺の筆の跡、讀者はこの小説を一繙きて如何なる美をや獲得せん、實に近來稀に見る一大雄篇也、敢て讀者の淸賞を希ふ。

▲小説 **生死**（春汀書） 大倉桃郎

筆を劔に代へて彼の日露戰役に從軍し、文備あるものは必ず武備ありの言を實行せる作家が、實驗より感受し得たる此篇の詩趣に富める蓋し一讀寒さを覺ゆるなるべし。

▲小説 **エトナの雪**（古洞書） 佐野天聲

ひとたび脚本『大農』を出して、文名忽ち都鄙に嘩かりし天聲氏の作、其の如何に面白きかは、一讀の後知られたし。

▲小説 **ぬけがら**（春帆書） 森曉紅

新進作家中の白眉たる曉紅子が處女作なり、其の洒脫輕快なる筆致は必ずや讀者の喝采を博すべく、漱石氏の『猫』を歡迎せし人々には、此の篇を閑却し能はざる珍篇なり。

◎活社會◎講談◎百花園
◎演藝界◎落語◎紹介
◎長廣告◎新流行◎時報

等愈振ふ

東京 本町 博文館

（振替貯金二四〇番）

十月一日・

中央公論

秋期大附録號

發行

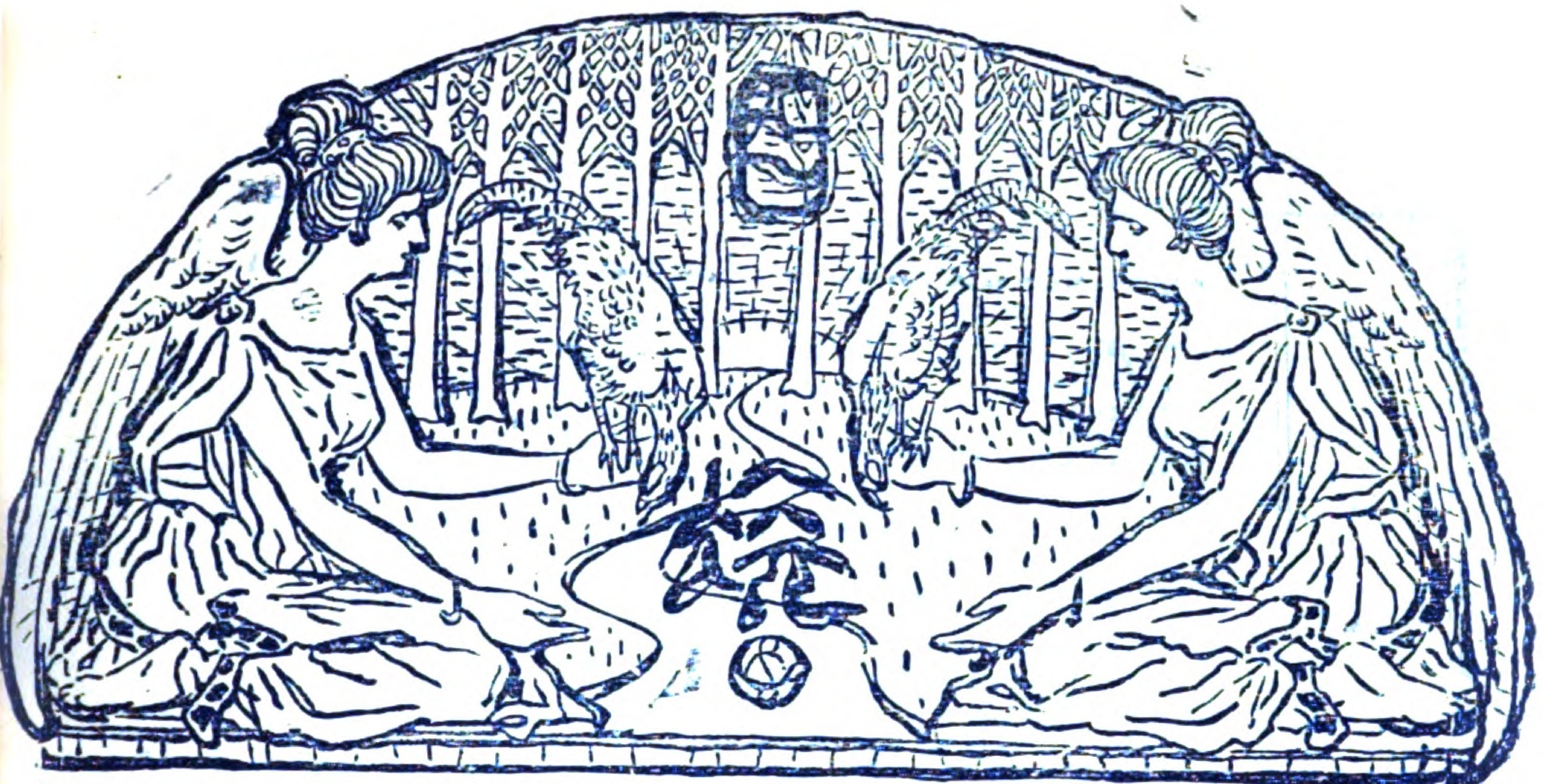
十月一日を以て發行すべき「中央公論」秋期大附録號に掲載せらるべき附録小説は

芽(めばゑ)(百枚内外の豫定)……島崎藤村

題未定(七十枚以上の豫定)……田山花袋

歸朝者の日記(百四枚)……永井荷風

の三篇にして、藤村氏は「春」以來、荷風氏は歸朝以來の最長篇小説にして、花袋氏のも氏が本年中雜誌に掲げたるものゝ最長篇也。乞ふ括目して本號の出づるを待て。



中央公論第二十四年第九號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨を御附記を乞ふ

松林伯知口演

徳川榮華物語

前篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
後篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
續編 椿の巻

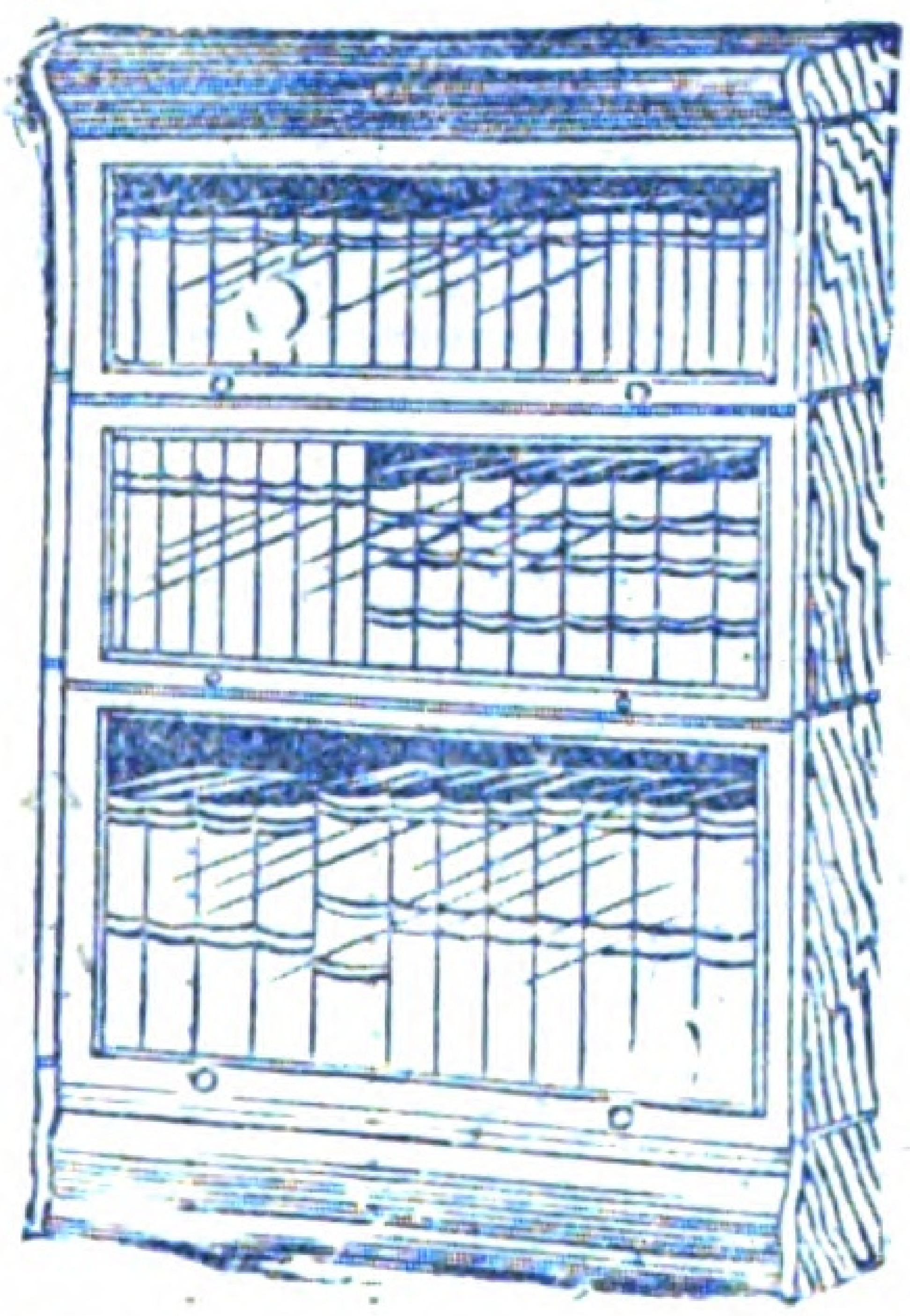
定價各冊金五拾錢〇郵税各冊六錢

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブツク、ケースよりも數等進歩したる者にて特徴は

●材料は上製には櫻並製にはナラ樫を精選し堅牢此上なし●形狀は優美にして色彩は上製は紫檀塗り並製はハイカラ塗●在來の函と異り硝子戸は上部へ隠沒する仕掛なれは書冊及帳簿の出入に便なり●一組の本箱は三個の段函を重ね之に別にトツフ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の増加に從ひ随意に段函の數を増加し得べく、如何なる室にも適應すべし

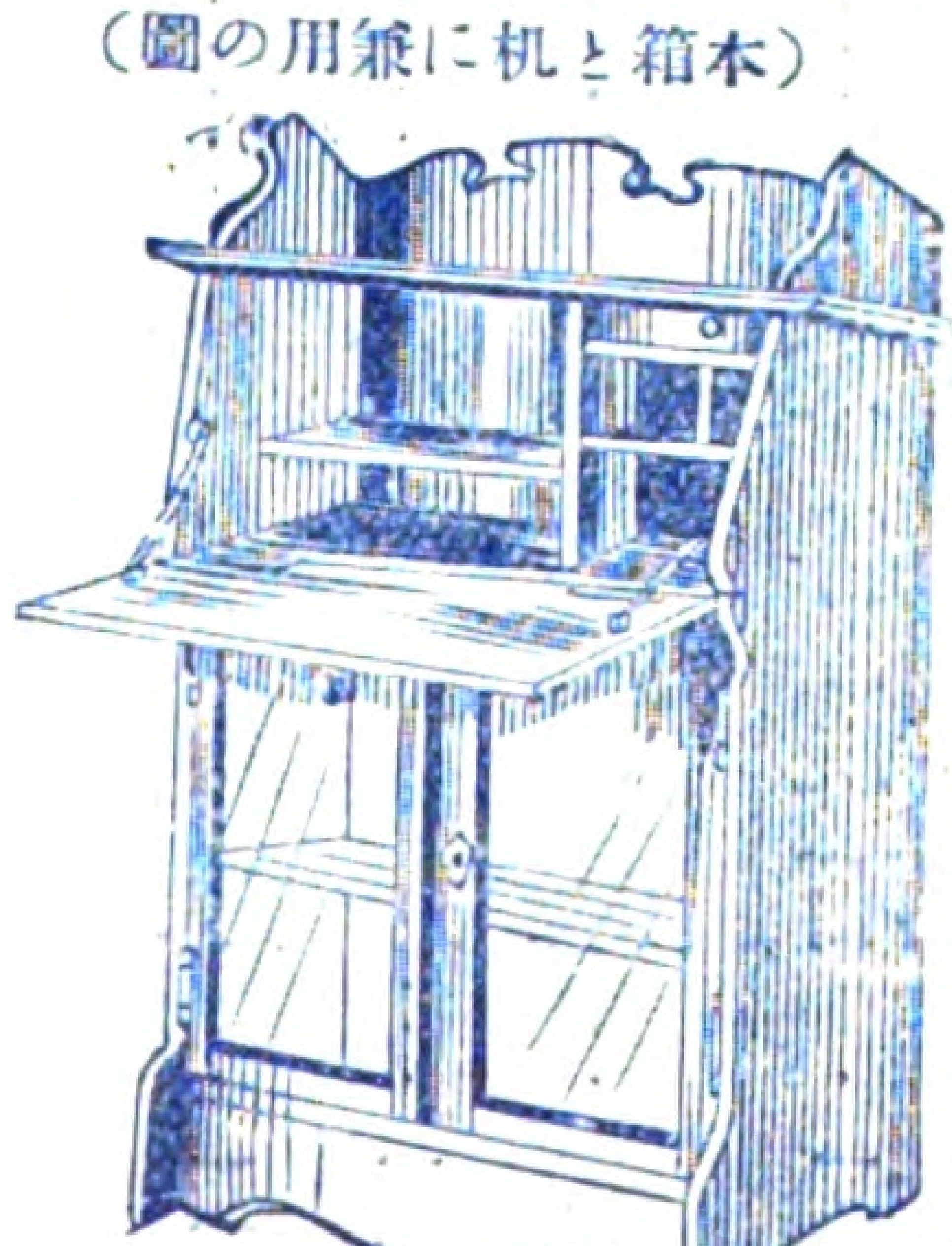
一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺上製金參拾圓（荷造費金壹圓）並製金貳拾七圓（荷造費不要）地方運賃御自辨



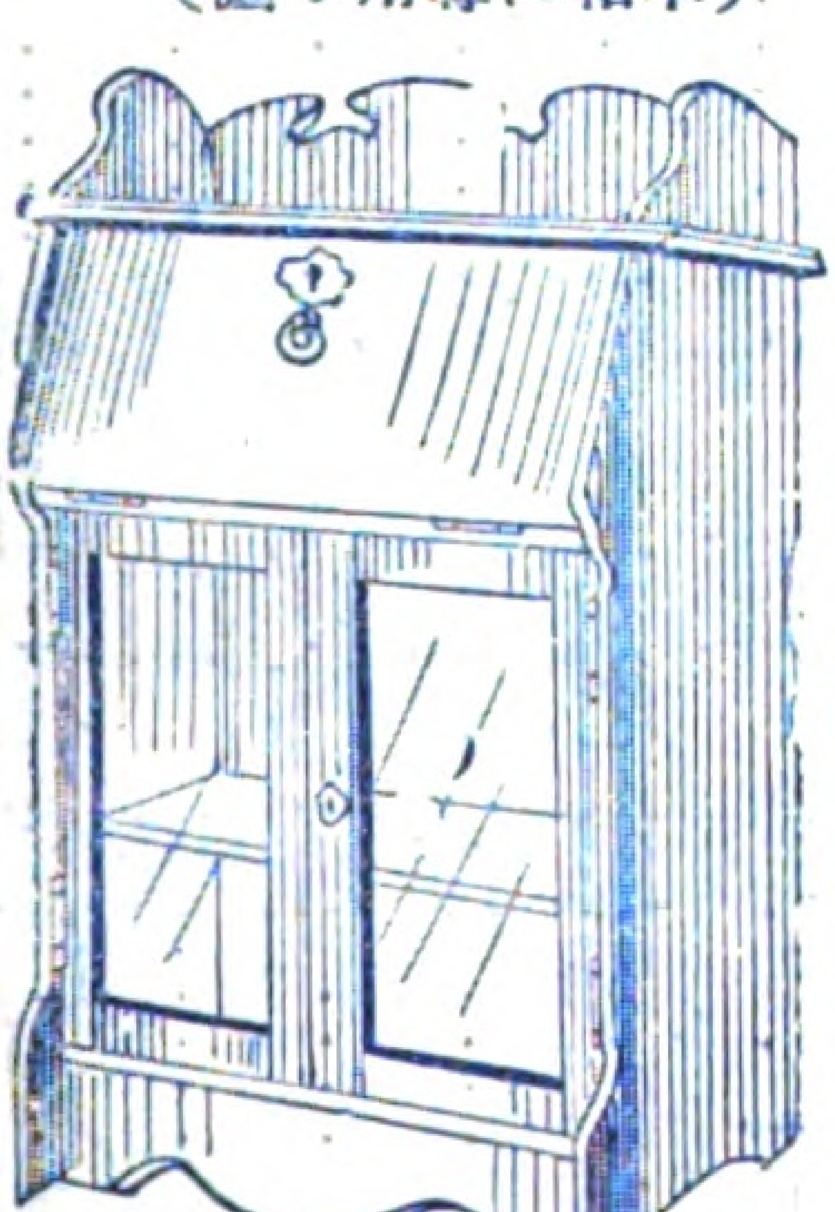
理想のデスク（本箱と机の兼用）

●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的也●上部本棚の戸は開閉自由にして開けば机板なり、用終りて閉づれば元の戸となる故、如何なる狭小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し●實用的なると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室内装飾たるに足る●一個高サ四尺四寸、奥行一尺、間口二尺二寸●上製（櫻製紫檀塗）金貳拾圓並製（ショーヂ製ハイカラ塗）金拾七圓荷造費壹圓參拾錢地方運賃自辨

（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に専用の圖）



各種本箱製作の御注文に應ず

東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七 振替貯金口座二百番）

發賣 新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Child with a Kid



BY SIR THOMAS LAWRENCE



第二十四年
第九號
第二百四十六號

日清兩國外交の醜態

（一）

所謂安奉線問題なるものは、近時の外交として最も醜態を呈露したるもの也、吾人は今之を指摘して以て日清兩國後來の外交を戒めんと欲す

清國傳統の外交の醜陋なる多く言說を須ひずして明か也、我が外交の同じく醜なるに至ては、吾人實に憮然たらざる能はず、之を嚴密にいへば、必らずしも今の內閣のみの罪にあらずして、寧ろ多く前內閣の責任なるも知れず、但だ今の內閣が外交刷新、殊に對淸外交の刷新を以て、財政整理と併せて二大旗幟と標榜したりしに似ず、端なくも斯る醜態を呈露したりしは何ぞや、假令前內閣の責任とすべき分

量多きにせよ、之を矯救して以て其の正しきに就くとをせず、却つて泥に塗るに泥を以てし、拙に重ぬるに拙を以てしたるは何ぞや、吾人は嚴格に之を批判して以て多く國民論議の外に立たんとする放縱なる外交家を彈劾せざる可らず

（二）

日淸の間外交問題の蟠屈するもの少からざる間に在て、殊に世人を危惧せしめたるは所謂安奉線問題なりとす

此の問題は本年一月以降奉天に於て交渉を開始せられ、東三省總督徐世昌、總領事小池張造の兩氏其の衝に當り、略々安東縣陳相屯間の協定を終りたる頃、徐氏は突如として前議を飜へし、沿線の警察權守備權を收むるにあらざれば淸國に於て同意するとを得ずといひ、且つ日淸協約第六條の所謂改良工事とは、單に鐵軌其の他の破損を改修するの謂にして、軌道を擴張し、又は線路を變更（迂回せるを直通する等）するが如きは改良に非ずと稱し、全く我が交渉に應ぜざる意向を示すに止まらず、其の更任を口實として頻りに談判を回避し、次の總督錫良氏亦就任以來多忙と稱して我が交渉に應ぜず、故らに北滿州視察の途に上りて、全然妥協の意思なき態度を執れり、而して我が政府が更に北京政府に對して再三切偲を致せるも、亦毫も要領を得ざりしを以て、政府は八月六日一種の最後通牒を北京政府に贈り、安奉鐵道の改築は協約に依る我が既得權なるを以て、自由行動を執るべきとを聲明し、且つ即日南滿州鐵道會社に命ずるに、工事に着手すべきとを以てしたり

此の果斷なる措置は、頗ぶる清國を狼狽せしめたりき、錫良氏は攝政王の詰責に答ふるに、自家の日本に對する態度の必らずしも自身の發意に非ずして、主として外務部の内訓に基けることを辯疏して或は及ばざらんことを怖るゝ色あり、外務部尚書梁敦彥氏は囁嚅して多くいふ能はず、而して外交上の主席に在る慶親王は病と稱して出でず、曾てタイムス通信員モリソン氏の指摘したりしが如く、全く無能無識の異狀を暴露するに至れるが如し、然かも清國政府は內自から紛擾して徒らに醜態をのみ演ずべきに非ざれば、先づ自から駐外の公使をして、列國政府に陳疏せしむるに、第一安奉線交涉の期限は既に昨年冬期を以て斷絕したるも、清國多く異言を唱へず、日本が今年一月始めて交涉を開けるに對して快く之に應ぜしは、清國に妥協の誠意ある例證なる事、第二交涉の遷延したるは、日本が警察權守備權を清國に還附するを好まず、之に同意せざるの致す結果なる事、第三此の沿線の警察權守備權を日本に與ふるは、滿州に於ける日本の武力をのみ增長せしむる所以にして、列國の利益にあらざる事等を以てせしめたるも、列國の同情は寸毫も清國に集中せざるを視て、更らに日本に交涉すること再三の後、八月十三日を以て日本の工事着手には異議なき事、工事に關する土地買收其の他の細目は、奉天に於て錫總督、小池總領事をして協定せしむべき事、沿線の守備權警察權問題は、他の間島問題等と併せて北京に於て交涉を開き、那桐氏をして專ら其の任に當らしむる事等を申出て、竟に日本政府の同意を得て、八月十九日左の覺書を交換したり

大日本帝國奉天駐在總領事小池と大清國東三省總督錫及大清國奉天巡撫程は茲に各本國政府の命に依り安奉鐵道の件に關し左の各項

を議定す

一　軌道は京奉鐵道と同樣と爲すこと

二　兩國は大體に於て兩國委員既に踏査決定せる線路を承諾すること、尤も陳相屯より奉天に至る線路は兩國に於て、追つて之を協議決定すること

三　覺書調印の當日より直に土地購買其の他一切の細目に付協議を開始すべきこと

四　覺書調印の翌日即ち前項協議の翌日より工事を進捗せしむべきこと

五　清國は沿道地方官をして工事の施行に關し諸般の便宜を與へしむること

依て茲に日漢文各二通を作製し互に調印の上各日漢文一通を持し以て證據と爲す

明治四十二年八月十九日　於奉天　小池張造

宣統元年七月初四日　錫良　程德全

安奉線問題に關する今日までの經過は大要斯の如し、吾人は更らに進んで本問題の眞相を研究せんと欲す

（三）

安奉線なるものは、日露戰役中、即ち明治三十七年五月より日本軍が其の應急用として速成したりしものにして、延長百八十五哩六十四鎖なるも、軌道の幅員二呎六吋に過ぎざる輕便鐵道也、速成を主としたるがために、線路の屈曲甚だしく、峻坂をも避けず、多く天然のまゝに由れるが故に、左なきだに

運緩なる速力一層遲緩となり、最もはやき處も一時間十哩を出づる能はずして、坂路の如きは僅々四哩に過ぎず、爲めに奉天安東間の通行には、草河口に一泊せざる可らずして（夜間は運轉せず）三十六時間以上を費すを常とす、汽關車の如きも小にして輕く、其の重量十三噸半に過ぎざるを以て、其の牽引力も、平坦の地に於て三十噸のみ、坂路に在ては其の三分一を運搬し得るのみ、殆んど鐵道の名ありて實なきが故に、我が政府は、ポーツマスに於て締結せられたる日露媾和條約の決定中、清國に關するものを彼の政府と協約すると同時に、滿州に於ける諸問題を別約するに方り、其の第六條を以て左の如く規定したりき。

一、清國政府は、安東縣奉天間に敷設せる軍用鐵道を日本國政府に於て、各國商工業の貨物運搬用に改め、引續き經營することを承諾す、該鐵道は、改良工事完成の日より起算し（但し軍隊送還のため遲延すべき期間十二箇月を除き、二箇年を以て、改良工事完成の期限とす）十五箇年を以て期限と爲し、即ち光緒四十九年に至て止む、右期限に至らば、双方に於て、他國の評價人一名を選み、該鐵道の各物件を評價せしめて、清國に賣渡すべし、其の賣渡前に在りて、清國政府の軍隊、並兵器粮食を輸送する場合には、東清鐵道條約に準據して取扱ふべく、又該鐵道改良の方法に至ては、日本國の經營擔當者に於て、清國より特派する委員と切實に商議すべきものとす、該鐵道に關する事務は、東清鐵道條約に準し、清國政府より委員を派し、査察經理せしむべく、又該鐵道に由り、清國公私貨物を運搬する運賃に關しては、別に詳細なる規定を設くべきものとす。

此の條約は我が全權なる外務大臣小村男、公使内田康哉の兩氏と、彼の全權たる軍機大臣總理外務部

事務慶親王、軍機大臣外務部尙書會辨大臣瞿鴻機、北洋大臣直隷總督袁世凱との間に協定せられ、明治三十八年十二月廿二日、即ち光緒三十一年十一月廿六日北京に於て調印せられたるもの也

斯くて日本政府は、南滿州鐵道會社を明治三十九年十一月に成立せしめ、安奉鐵道をも會社の所管に移し、其の移すと同時に向ふ三ヶ年に四呎八吋に改築完成すべきとを命令し、而して會社は四十年三月を以て、安奉鐵道を軍政署の手より引取りたりき、蓋し安奉線は初めより我が陸軍の手にて築造せられ管理されしが、玆に至て始めて南滿州鐵道所有管理に歸せし也

（四）

此の事實を基礎として審判するに、卅八年十二月廿二日の北京條約に由て、安奉線の改築は明治四十一年中に完成すべき筈のもの也、此の條約の批準が三十九年一月中なりしより打算しても、四十二年一月中には正さしく改築工事を完成せざる可らず

政府が明治卅九年八月南滿州鐵道會社の創立委員に命令するに、會社一切の線路を向ふ三ヶ年間に四呎八吋に改築すべきとを以てしたるに徵すれば、安奉線も亦之に由て會社成立の同年十一月以降三ヶ年間に改築工事を終るべく、其の期限は實に明治四十二年十一月なりとす、此の一事は思ふに政府必らず淸國政府の同意を得置きたるなるべし、更らに會社の側よりいふも、四十年三月軍政署より安奉線を受領したる以上、其の改築工事は正さしく四十三年三月中に完成せしめざる可らず、然らずんば三ヶ年間に改築完成を期したる政府の命令は空文徒法に終らざる可らず、然れども本線の改築工事は、兩金[illegible]

冠山等の難工事あるを以て、少くも二ヶ年間を要すべしといひ、現に會社は此の豫定を以て計畫したるもの丶如し、去れば遲くも四十三年三月中に改築を完成せんと欲せば、當然四十一年三四月中に工事を起さゞるを得ざる筈也

然るに我が政府は本年一月に至て始めて改築工事に關する交渉を清國に試みたりき。假令即時に一切の協定を終りて、直ちに工事に着手したりしとするも、四十三年々末に至らざれば完成せざる理也、是れ豈啻だに北京條約の規定に反するのみならんや、實に政府の南滿州鐵道會社に對する命令にも反する也、西園寺内閣の外交當局は何故に斯く緩慢なりしや、會社も亦何故に斯く甚だしく悠々たりしや、吾人は先づ第一に之を詰責せざる可らず、己れ緩怠なるや斯の如くにして、單り清國政府の緩慢を責むるは、理に於て甚だ非也、而して斷じて義に非ざる也。

有體にいへば、南滿州鐵道會社は、最初に安奉線を厄介視したりしに似たり、會社が全力を擧げて其の繁榮を期待したるは實に大連に在り、南北滿州に出入する貨物をして、多く大連を經由せしめ、由て以て其の幹線(長春大連間)の收入を豐かならしむると共に、大連の繁榮を計畫して、海陸共に施設する所少からざりき、隨つて安奉線を改築せば、滿韓の聯絡新たに成りて、幹線却つて玆に移り、大連線と大連港とは、勢ひ其の繁昌を減殺せらるべしと做せしに似たり、蓋し安奉線の改築成らん乎、東京より奉天に至るものは、馬關釜山間を渡る外、總て鐵道に由るを得べく、延きて哈爾賓より西伯利亞線を採て露獨佛の諸都會に出づるにも、僅かに一衣帶水の對馬水道を渡るに過ぎず、之を大連經由に比すれば、

時間に於て凡そ三十時間以上約四十時間を節約するを得、即ち日本歐洲間の交通幹線は、此の安奉線に移りて、大連線は唯だ上海香港方面との連絡線に止まるに至らんとす、會社側に於て多く安奉線を厄介視せる必らずしも理なきには非ず

我が陸軍部内に於ても、安奉線の改築を甚だ重要視せざるものありしや蔽ふ可らず、其の說によれば大連には多くの軍隊及び軍需物資を揚陸すべき一切の機關具はれるも、安奉線には此の便なし、韓國多獅島(日露戰役中我が陸軍の一上陸點なりき)に築港せば大約六七百萬圓を要するも、然かも到底大連と比肩すべくもあらず、若し軍隊及び軍需一切の物資を釜山より揚陸せん乎、釜山にも亦大連と一樣の設備を爲さゞる可らず、且つ釜山より奉天まで遠く軍隊及び一切の軍需品を輸送せんよりも、大連まで船舶に由るの簡にして且つ經濟的なるには如かず、海上の不安なる場合は格別、現在の如く制海權の確實に我が手に握らるゝ以上、何を苦んで安奉線改築の急要を認めんといへり、斯る主張を懷くものは、安奉線改築よりも、寧ろ京城又は平壤より元山津まで鐵道を布設するに如かずと做せり、是れ亦安奉線改築の忽諸に附せられたる一理由なるべし

要するに、安奉線の遲延したる主要の一因は、南滿洲鐵道會社が其の資本を得ざりし一事に在り、會社は政府の命令に從つて其の收支豫算を定むるに方り、安奉線改築費を二千二百萬圓と計上したりき、然かも當時外債募集の便を得ず、而して西園寺內閣の財政信用を以てしては、到底政府の手に由て之れを調達すること難かりしを以つて、會社は先づ長春大連間の幹線と、蘇家屯撫順間、大石橋營口間、雞關嶺旅

軌間を四呎八吋に改築したりしのみ、以つて安奉線に及ぶ能はざりき、假令安奉線改築の急要を認むるも、計算上之を實行する資力なかりき、況んや全く資力なかりしをや、然れども後藤男の斡旋に由り世界的に外債成れるも、會社は當時直ちに安奉線の改築に着手せず、僅かに世間の議論漸く其の急要を償ふるに至つて、始めて其の準備に着手せしのみ、緩慢の非難は、會社と政府と到底之を免かるゝ能はざる也

其の意思初めより一定せず、日清條約及び政府の命令を切實に遵行する誠意なく、幾んど機會を逸するに至つて漸く清國と交涉し、而して清國が數月の間交涉を避けたりとて、直ちに妥協の誠意なしと唱へ、竟に自由行動を執るといふが如きは、酷にあらずんば暴也、强を恃みて弱清に對す、明治三十七年以前に於ける露國の態度と果して何等の差異ありや、曾て露國の横暴を切齒して、口に正義を侃言せしもの、果して日本政府今回の措置を是認すべきや否や、咎めて而して其の尤に倣ふ、誰か之を難せざらんや

（五）

若し兒童の耳語する所を事實ならしめば、我が政府の措置は彌より出てゝ彌よ怪也、曰く、外交當局者は始めより清國と妥協を希望して弱を壓するが如きを欲せざりき、然るに南滿州鐵道會社は、安奉線改築の費用として三千萬圓近くの資本を用意し、且つ鐵軌其の他若干の物資を外國より注文して既に線路近くに貯ふるに至り、清國苦力の雇入内約をも締結したりき、故に日清の交涉遷延して更に數月に涉ら

んか、會社の損失擧げて數ふ可からず、前總裁たりし今の遞信大臣後藤男等と密議し、總裁中村是公氏をして頻りに外交當局に工事着手を迫らしめたりき、茲に於て小村外務大臣は桂首相と列坐の上、中村總裁を招き、口頭を以て告ぐるに、八月上旬まで交渉を俟つべし、其の期に至て尙ほ決了せずんば、自由に工事に着手して可なる所以を以てしたりしに、中村總裁は滿州に歸るや、直ちに命じて某隧道の開鑿工事に着手せしめんとし、小池總領事の抗議(?)に逢ひ、桂首相に外務大臣の口頭命令如何を問へるに、首相また外務大臣の言の如きを以てせしかば、中村總裁は一方に工事を差止むると共に、外交方針のまた或は一變せんとを掛念し、急遽東京に來り、未だ旅裝をも解かずして直ちに東奥巡行中の後藤遞相を訪へり、斯くして會社は熱烈なる運動を以て我が外交當局を壓迫し、竟に八月六日に發せられたるが如き一種の最後通牒を見るに至れる也と

果して然らば、我が外交の怯や益々甚だしといふべし、北京條約(卅八年十二月廿二日調印)に於ては、明治四十一年中に改築工事を完成すべきとを豫約し置きながら、會社には四十二年十一月乃至四十三年三月中に完成すべきを命令して、先づ自から北京條約に違ひ、剰つさへ會社をしても誠實に其の命令を實行せしめず、會社の都合に任せて勝手に工事着手を延期せしめ置きながら、會社が遲蒔きにも工事準備を爲し、其の準備に多少の損失ありといふに任せて、清國に迫るに迅速に交渉すべきを以てし、竟に穩當ならざる最後通牒を發し、恰かも開戰的態度に出づるが如きは、豈啻だ外交上の禮儀に反するのみならんや、曾て滿州に於ける露國の横暴を咎めて侃々諤々、正義を主張したりし我が國民は、今我が外

交當局の措置斯の如きに及んで、列國正義の指彈を受くるも、殆んど辯疏の辭を有せざるべし

（六）

清國の外交に至ては、更らに甚だ醜陋なるものあり

第一清國委員は、北京條約の所謂改良工事を目して、改築に非ずと稱せしも、明治卅九年八月我が政府が南滿州鐵道會社創立委員に命令し、且つ清國政府にも回示したりし草案第一條に於て、北京條約附屬協約により、安奉鐵道をも會社の營業とし、第二條に於て會社の營業開始の日より滿三ヶ年以內に四呎八吋の軌道に改築すべきとを明示したるに對し、明白に之を承認しながら、二呎六吋の舊型を主張するが如きは、事理を解せずといふよりも、寧ろ頑迷と做すを當然とす

第二交涉遲延の責任を以て、警察權守備權の回收に應ぜざりし日本に在りと稱するも、日本は警察守備の問題を分離し、先づ改築問題を議定すべしと主唱し、兩權回收には初めより同意不同意を表示せざりき、之を以て日本に責任ありとするは謬ゆる也

第三安奉沿線の警察守備は、東清鐵道の例に由り、原則として鐵道所有者之に當り、且つ戰時中よりの慣行に由て、日本現に之に當れり、清國が之を回收せんと欲すると、獨立國の分として當然なれども、然れども事實清國に於て此の鐵道の平安を保障すべき資力ありや否や是れ世界列國の總て疑問とする所なるべし　世界商工業のため、多大の資本を投じて鐵道を建設しながら、馬賊其の他幾多草賊の出沒するに由りて、鐵道の平安を保證し得ずとせば、旅客貨物の之に由るものなくして、鐵道全く其の用を

負はず、多大の損失に終るの外無かるべし、是れ日本の斷じて與みせざる所、啻だ日本のみならず、世界其れの國と雖も首肯するものなかるべし、清國政府は果して確實に安奉鐵道の平安を保證し得るや、保證して果して日本及び列國を安心せしむべき信用を有するや否や、吾人の見を以てすれば、先づ清國の面目を立てゝ、姑らく其の主張を容るゝと同時に、苟くも清國警察官にして聊かたりとも其の本分を缺き、若くば馬賊其の他の草賊の出沒するありて、線路に不安の掛念あらば、別に交渉を用ゆるとなくじて直ちに我が警察と軍隊とを之に代らしむるの條件を存立せしむるも可也、思ふに我が政府また必らずしも之を固執せざるべし

然るに清國之を思はず、徒らに交渉を遷延せしめて、曠日彌久の間に南滿州鐵道會社を苦惱せしめ、由て以て日本政府を屈せんとす、支那傳統の外交政策に外ならずと雖も、斯の如き不誠實不正直なる態度は、決して世界の信用を得る所以にあらず、現に日本の態度の甚だしく强猛に過ぎて、而して清國の列國に發せる辯疏甚だ力めたるに拘らず、其の同情の清國に集中せずして、却つて往々非難するものすらありしにあらずや

清國外交の醜態は、單に此の傳統的拙劣手段に止まらず、事體の大小如何に拘らず、攝政王が外國との交渉狀態に通ぜず、且つ政府の中心點なきと也、幼主上に在て顯官に偉材なく、利權回收の如き粗莽の說のみ民間に高くして、俗吏多く之に制せらる、然るに我の斷乎たる措置に出るや、蒼皇色を喪ふと俄に其の態容を更め、孜々として對手の意を迎ふ、清國今日の醜態は、恰かも我が幕末に似て酷だ相肖

なりと謂べし

（七）

日本の態度の非義强猛なるに拘らず、幸ひにして列國の非難の多く之に集中せざる所以は他なし、清國にも非曲多くして、其の醜狀日本よりも甚だしければ也

清國の外交官が言責を重んぜず、反覆常なくして然かも曠久彌日、徒らに對手を苦惱せしむるとは、列國の齊しく經驗して而して深く憎惡する所也、之に對しては、假令强猛に過ぐるも時に辛辣なる高壓を加ふるの必要なるは、列國の多く認むる所也、是れ日本の强に過ぐるを感じながら、尙ほ多少之に甘んずる所以ならずや

然れども誠實と謙讓とは、外交のみの妙に非ず、非義强猛なる或は一びは勝たん、然かも再びす可らず、再びし三びすれば、神人共に與みせずして敗亡忽ち至らん、殷鑑遠からず露國に在り、畏れて而して戒めざる可けんや、吾人我が對清外交に就き深く思ふ所あり、乃ち忌憚なく言說して玆に至る

如何にして食物を廉價ならしむべきや

（一）

近時我が國食品の高價なる、頗ぶる法外なるものあり、嘗て物價低廉の樂土として歐米人の悅びて居

留せる東京市は、食品の高價なるを以て名高き紐育倫敦にも過ぐとて、漸く其の本國に引揚ぐるもの多しといふ、居留外人すら斯の如し、況んや勞銀低廉にして收入の乏しき我が國民をや、今や生活難の嘆聲の一般に高き、洵に故ありと謂べし

犯罪には多く婦人の潛めるあり、露骨にいへば、人生の難問題は幾んど總てパンの問題也、乃ち國民の生活を安易ならしむるは、實に國家經濟の最大要議にして、食品を廉價ならしむることは、又實に國家經濟の大眼目也、濟世利民の最大要道は、全く食品を低廉ならしむるに在り

（二）

今日の如く食品の高價となれるには、國家の歲計急激に膨脹したるがために、一般に物價を騰貴せしめたることも其の一原由なるべし、租稅過重にして、且つ官營專賣法等の行はれ、剩つさへ關稅の高率なることも亦有力なる一原由なるべし、乃ち政治上よりして多少救解の方法を講究するの必要なる言を俟たずと雖も、凡そ中外租稅の增加と國家歲計の膨脹とは、今の立國上幾んど避く可らざる趨勢なるに於て此の方面よりして食品を廉價ならしむる方法を發見することは、蓋し多く望む可らざるに似たり。

然らば則ち食品を廉價ならしむる他の方法は如何、吾人の見を以てすれば、先づ全國の首都たる東京市に於て食品を低廉ならしむるがため、一方に輸送機關を完備すると共に、現在の問屋制度を變更するを以て最も捷徑なりとす、先づ東京市に於て然かするは、多くの物價大抵東京市を標準として定めらるゝ傾向あるに由る

（三）

食品の生産地と消費地とに於ては、其の價に驚くべき懸隔あり、試みに足一び都門を出でゝ地方に至り看よ、魚肉、鶏卵、蔬菜、菓物等の廉價なる實に驚くべきものあるにあらずや、少しく遠隔の地に至れば、其の懸隔は一層甚だし、房州に於て一尾五錢の蝦魚は、東京に於て五六倍し、直江津に於て一枚廿五錢の鯛は、東京に於て一圓五十錢内外に估られ、岡山に於て一顆八厘乃至一錢の桃は、東京に於て六錢乃至八錢に販がる、清國の農民が一個三厘内外にて賣り、其の上海、天津、芝罘等の小賣商人が一錢乃至八厘にて賣る鶏卵は、日本に來れば三錢より安きこと莫し、斯く懸隔ある原由は他なし、畢竟輸送機關完備せざれば也、汽車汽船の之を運ぶあるも、殊に食品として完全に輸送すべき方法具はらざるのみ乃ち汽車汽船にて輸送する間には、所謂品痛みありて、腐敗し破損するもの多きがために、運賃以外に此の損失をも加算せざるを得ざるが故に、東京市に於ては、勢ひ高價ならしめざるを得ざる也、否、品に依ては全然輸送し得ざることあり

故に此の食品輸送のため、先づ冷藏輸送機關を具ふるを要す、之あらば其の積載の食品に腐敗の恐れ全くなく、破損するもの亦甚だ少くして、所謂品痛みの損失を免がるゝを得るのみならず、大漁の時魚價の低落するに任すが如きこともなくして、地方の生産者は、割合良き價を以て之を賣出すの利益あり、乃ち生産者は高價を得、消費者は廉價に購ふを得て、兩者共に相益すべし

牛肉羊肉の高價なる、東京市は幾んど世界第一と稱せらる、然れども冷藏船によつて濠州より輸入し、

且つ市内にも冷藏庫を設けて之を貯へ、順次に之を賣出さば、一斤十錢内外としても尙ほ相當の利益ありと聞く、是れ亦牛羊肉を廉價ならしむる一手段なりとす、吾人は鐵道當局に對して多く冷藏車を供へ以て食品輸送に努めんとを勸むると共に、市内にも亦多數の冷藏庫を設立せんとを促さゞる可らず、今日食品冷藏の便法を解せざるは餘りに愚也、此の愚のために、食品を高價ならしめて、一般國民に生活難を愁訴せしむるは更に愚の極ならずや

(四)

東京市の問屋制度も亦食品を高價ならしむる最要原因たるもの也、魚市場、靑物市場の如き其の最も顯著なる事例たり

德川時代には、東京の諸商業多く問屋制度を用ひ、其の問屋數に制限あり、此の制限以外には自由に營業する能はざりき、即ち問屋は一種の專賣者にして、彼等は多く勞するとなく、坐ながらにして大なる利益を得たりき、自由營業の行はれざりし結果、生產者は勢ひ此の問屋に就て販賣せざる可らずして、其の仕入價格は殆んど問屋の意のまゝなりき、小賣業者も亦また然り、問屋は一方に法外なる價格を以て仕入るゝと共に、之を小賣人に賣るには却つて法外なる高價を以てしたりき、故に生產者は薄利に甘んぜざるを得ずして而して消費者は高價に苦めり、獨り利するは問屋のみにして、彼等は斯る制度の下に暴富を獨占して豪奢を恣にしたりし也

明治政府に至て、一切の文物と共に、此の問屋制度も亦大抵廢止せられたりと雖も、唯だ魚市場と靑

物市場とは殆んど幕府時代の舊慣を改めず、依然として巨利を占めつゝあり、故に生産者たる漁家農家は、頗ぶる薄利を得るに過ぎざるも、問屋は法外に利益し、而して一般小賣の肴屋八百屋の徒、また漸次に問屋に倣ふて、通例七八割以上十割の利を收むるを例とするに至れり、換言すれば漁家農家が廿五錢にて問屋に納めたる食品は、問屋に於て五十錢にて小賣人に仲次し、而して小賣人は客より一圓の價を貪ぼる也、斯の如くして食品を高價ならしめ、延きて國民の生活を困難ならしむ、是れ豈打破せざる可らざる一種の商習慣にはあらずや

(五)

食品仲次の問屋の如きは、普通二三割の利を收めて甘んずるを當然とす、而して小賣商人また五割以上を貪ぼる可らざる也

米穀取引所あるがため、全國の米價平準を保つは悦ぶべし、食品にも亦斯の如き取引所あるを欲するも、多くは定期賣買を爲し難きに於て、未だ俄かに實行を期す可らず、然かも自由營業とするも、一定の場所に問屋あるに非ざれば、生産者は却つて不便なりとするも知れず、茲に於てか吾人は東京市自から食品市場を設けんことを主張せんと欲す

市内に於て適宜數個の食品市場を設け、廣大なる冷藏庫を設け、茲に多くの食品を仕入れ、一割乃至二割の利を見て賣買を仲介すると同時に、又小賣店をも開き、生産者若くば小賣商人に貸附けて、日々相當の場代と納附金とを收むべし、此の例は臺灣の諸都會にもあり、食品を廉價に供給するに於ても、市

民の衛生のためにも、其の便宜なると著るし、吾人は東京市が進んで此の計畫を爲さんとを促す

食品問屋市營と、冷藏輸送とは、是れ食品を廉價ならしむべき二大良法とす、斯くして東京市に於て先づ食品を廉價ならしめ、次て大阪京都に及ぼし、名古屋、金澤、仙臺、廣島、熊本に及ぼし、漸く以て全國に及ぼさば、國民を益すると何ぞ淺小ならんや、百の道德倫常を說かんよりは、先づ國民の生活を安易ならしめて、然る後宗敎と敎育とに及ぼすべし、經世の志あるもの、何ぞ深く思はざるや



岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず

王堂學人　田中喜一

(一)僕は具體理想主義者にして泡鳴氏は新自然主義者なり――(二)僕の學說と泡鳴氏の學說とは其の形體を一にして其の精神を異にす――(三)人生批判の道具として哲學と文藝との得失を較す――(四)現實の本質如何――(五)現實を構成するに必要なる二成分――(六)生活に於ける理想の作用――(七)泡鳴氏は一種の形而上學者なり――(八)生活は解決なり――(九)理想なくして主義ある能はず――(十)人生は果して痛苦のみなりや――(十一)神は生活統一の要具の一なり――(十二)トウマス・カアライルの十九世紀思想史に於ける功過――(十三)古代人の活動の性質に關する泡鳴氏の誤解――(十四)强烈なる生活は分化と分業とを竢ちて初めて得らる――(十五)靈肉合致は既成の事實なり――(十六)利他は利己の變性にあらず――(十七)强者と弱者との依立――(十八)哲人政治――(十九)我が國體は哲人政治の最好模範なり――(二十)僕の象徵主義と泡鳴氏の象徵主義との相違點――(二十一)僕は本論に依つて去年以來の懸案を解くを得たり――(二十二)僕は立論の方法に關してエドマンドバアクに私淑す

一　僕は具體理想主義者にして泡鳴氏は新自然主義者なり

泡鳴氏は新自然主義に據つて人生を鑑照しようとし、僕は具體理想主義に據つて人生を理解しようとするのであるから、氏の立場と、僕の立場との間に霄壤の相違のあるのは當然のことである。氏と僕とは既にその立場に於て大に異る以上は、其の推論の方法と、歸結の意義とに於ても亦大に異らざるを得ない。されば僕の具體理想主義と氏の新自然主義と同一視せられては、僕が迷惑を感ずるやうに、氏も亦等しく迷惑を感ぜらるゝであらう。併し僕の學說と、氏の學說とが世の一部の論者に依つて、往々類似視せられ、甚だしきは同一視せらるゝことのあるのは、彼等の多くは其の觀察粗大にして、輪廓は見えるが實質は見えないし、其

の認識落漠にして、其の體容は解るが、精神は解らず、其の想像遲鈍にして、叙述は知れるが含蓄は知れざるが爲めに、僕と氏との議論が偶酷似の言語と、酷似の表現と、酷似の解說とを挾むよりして、僕の學說と、氏の學說との興味と、動機と、目的とに、如何に甚大なる相違の潜在するかを究めずして、唯だ無雜作に、僕が學說と、氏が學說との類似すること、或は同一なることを憶想するに過ぎないのである。

僕は哲學を專攻する學徒であつて、氏は文藝に從事する文士である。言ふまでもなく、哲學も、文藝も、共に人生に據つて生じ、人生の爲めに存するものであるから、或は人生を鑑照すると云ひ、或は人生を理解すると言つても、究竟、其の目的とする所は、等しく人生の點化と、靈化と、醇化との外にあるべき筈は無い。されば現代に親炙し、現代に同情し、現代を研究し、現代を利導し、支配し、輔翼するの精神と、力量と聰明とある者は、文藝より入るにしても、哲學より入るにしても、多くの契合點を有つて來るのは、たゞ自然のことである。されば哲學を專攻する僕が、固陋なる學徒より、一層泡鳴氏に近く、文藝に從事する泡鳴氏が偏狹なる文士よりも一層僕に近いことも是れ亦た自然のことである。

僕と、氏とは動機と、目的とに於てあらゆる二人の論者が異り得るほど異つて居るのであるから、總に言語と、文字とに於て同じき所はあつても、其れは別に取立てゝ言ふほどのことはないのである。猶ほ進んで一層正確に事實を語つて見ると、僕と氏とが多少同じ經路を辿つて居るのは、唯だ老朽せる系統に對して、之が破壞を努めて居る間に限らるゝのであつて、一度自家の經驗と、思索とに據つて、新たに獨特なる見解を建設する場合になると、忽ち東西に相分るゝこと千里も啻ならぬのである。然し嚴密に言ふと、破壞と、建設とは單一なる活動の二側面に過ぎないのであるから、同時に始つて、又同時に終るのである。隨つて建設は破壞に依つて絕えず支配さるゝやうに、破壞は又建設に依つて絕えず牽制せられなければならない。斯く觀察し來ると、僕と、氏とは、全く沒交涉の位置に立つのみならず、更に進んで正反對の態度を取るものであ

ることを僕は嚴肅に茲に宣言する。然し斯く言つた丈では、多數の讀者に取つて一片の宣託を聞くに過ぎない感があらうと思ふから、尙ほ一層詳しく箇中の消息を傳へることゝしよう。

何故に僕の主張の特色と、氏の主張の特色とが、殆んど同一の命題に依つて概括し得らるゝに拘らず、兩者の精神は非常に相違するものと解釋されなければならないかと云ふに、是れは命題の叙述は主に過去の思想に對する破壞の態度(アチチユード)を現はすに過ぎぬが、之が具體的の意義を索むるに及ぶとこゝに始めて、僕に、氏に、各獨特なる建設の志向(インテント)を發し來るが爲めである。僕は僕の人生觀及び藝術觀も、亦泡鳴氏の人生觀及び藝術觀も、次の三命題に依つて、大した不便なく概括せらるゝことゝ思ふ。

二　僕の學說と泡鳴氏の學說とは其の形體を一にして其の精神を異にす

一　人間は唯だ現實にのみ價値を置くべきものである、

二　人間の活動は素と單一不離であるべきものである、

三　個人は彼れの欲望の滿足のみを目的とすべきものである、

が即ち是れである。

是れ等の三命題は、大體の成式としては確かに僕の主張の要點を摺撫して居ると同時に、又た泡鳴氏の主張の要點を摺撫して居ることと僕は思ふ。併し一度び是れ等の三命題の具體的の意義を開展することになると、茲に始めて僕の見解と泡鳴氏の見解との間には千里の差を生ずるのである。今是れ等の三命題を僕と、氏とが各如何に解釋して居るかと云ふことを標出し、而して後にその意味を說明することゝしよう。

人間は唯だ現實にのみ價値を置くべきものであると云ふ第一の命題に就ては、僕は之を具體的に解釋するに反して、氏は之を抽象的に解釋して居る。

人間の活動は單一不離であるべきものであると云ふ第二の命題に就ては、僕が之を作用的に解釋して居るに反して、泡鳴氏は、之を機械的に解釋して居る。

個人は彼れの欲望の滿足のみを目的とすべきもので

あると云ふ第三の命題に就ては、僕は之を有機的に解釋するに反して、氏は之を分子的に解釋して居る。

一口に言つて了へば、僕と泡鳴氏との間に橫はる相違の根底は、茲に磐きて居るが、其れに蘊蓄せられた意義と、志向とを十分に開展する曉には、其の結果は、實に人目を聳動せしむる者があるのである。詮り僕と、岩野氏とは、共に象徵主義を現代に最も適當する藝術の理想と信じながら、僕の象徵主義は自づから具體理想主義の樣式を取り、氏の象徵主義は自づから新自然主義の樣式を取ると云ふのは、全く僕と氏との間に橫はる是れ等の異れる解釋が、其の因を爲して居るのである。僕と、泡鳴氏と、共に同一成式に入れられ得る三大綱領を提げて天下に望みながら、僕は何處までも其れを具體的に、作用的に、社會的に解釋して居るに、泡鳴氏は何處までも其れを抽象的に、機械的に、孤立的に解釋して居る。之が僕の學說をして人生及び藝術の全體を統一するにも尙ほ妥當なるものたらしめ、泡鳴氏の學說をして人生及び藝術の一部を說明するにも猶ほ不當のものたらしむるのであると言ふのが僕の意見である。

今日の學問の趨勢と、思想の傾向とは、若し或る學說の特徵が具體的であり、作用的であり、有機的であつて、又或る學說の特徵が抽象的であり、機械的であり、分子的であると言ふならば、朧ろげながら抄しても是等の術語の意義を理解する人士をして、直ちに、前者は何となく後者に優る所のものであるとやうに想はしむるに至つた。されば今僕が僕の學說が前者に屬し、泡鳴氏の學說が後者に屬すると言つたならば、僕は徒らに自分を揚げ、他人を貶するが爲めに、勝手に僕の學說の特色を標榜するに好字面を連ね、泡鳴氏の學說の特色を發露するに惡字面を重ねて居ると邪推する者があるかもしれぬが、是は畢竟するに僕の學說と、彼れの學說とを全然理解しないことから來つて居るのである。

僕は現今世人が徒らに意味無き揚げ足取りや、品惡き罵詈や、腹黑き中傷やを以て、臆面もなく、評論だとか、批評だとか言つて、互に騷ぎ合ひ、擲り合つて居るのを見て、我が國に於ては評論の時期未だ到らず

と爲し、之が促進を以て刻下の急務と信じて居る者てある。（新小說本年五月號參照）僕は紳士にして、また學者なる一個の男子が評論に從事する以上は、當に如何なる意氣と、抱負と、經綸とを有つべきかを知つて居る者である。僕が苟も評論家として一の評論を公にするからは、僕の宣する一言半句と雖も、之が根底と理由とを明かにすることが出來ないならば、初めより全然其麼ことはしないのである。されば此期に限つて、徒らに事實を無視し、虛僞を構成してまでも、僕の學說を揚げ、泡鳴氏の學說を貶すやうなことは僕に取つて思もよらぬことてある。眞正なる學問の祭壇の前に立つては彼我の別もなく、利害の念も薄い。唯だ大膽に、事實を觀察し、觀察したる事實を大膽に表白するのみてある。僕が學說の具體的であり、作用的てあり、有機的であることは既に識者の普く認めて居る所のものである。泡鳴氏の學說の抽象的であり、機械的であり、分子的であることは、是れより僕が識者に對つて證明することを樂みとして居る所のものである。

他人と論爭を構へる時、根底の根底より、原始の原始より出立しなければ滿足出來ないのは、僕の特性てある。されば議論は自づから大體に於て僕と泡鳴氏とが共有し得べき三成式を有しながら、何故に僕の學說は常に具體的となり、作用的となり、有機的となるのに反して泡鳴氏の學說は抽象的となり、機械的となり、分子的となるかと云ふこととの說明を其の起點と爲さねばならぬ。而して是は僕が哲學（僕が把持する樣式に於ての哲學）の研究者であり、泡鳴氏が文藝（泡鳴氏の把持する樣式に於ての文藝）の宣傳者であることから主に來つて居るのであると思考すべき理由が十分にあるから、論議は自づから人生批判の機關として、哲學の充す作用と、文藝の充す作用との商較及び對照より始まらねばならぬ。

三　人生批判の道具として哲學と文藝との得失を　す

僕は此處に哲學の價値と、文藝の價値とに就て兩者の優劣を論ぜんとする者ではない。言ふまでもなく人間に兩者を人生統一の機關とする必要があつて、始め

て兩者共に社會に出現したものであるから、社會に兩者を必要とする欲求の在る以上は、兩者は共に社會を統一するに必要なる機關であると云ふ意味に於て、先づ兩者は同樣の價値を有するものと見なければなるまい。勿論此場合に於ても事實に即して論ずる時は、或る時代に取つては其の社會の特性よりして、文藝よりも哲學を必要とすることもあらうし、又た或る國民に取つては其の個人の特性よりして哲學よりも文藝を必要とすることもあらうが、兎に角如何なる時代と雖も、未來はいざ知らず、今日迄のところ、哲學と、文藝とは同時に出現し、同時に平行して來て居るところよりすれば、大體の觀察としては、兩者とも同樣の價値を有するものと見るのが穩當の態度であらう。

併しながら、哲學と、文藝とが人生を統一する機關としてのおの〳〵各社會に於て占めて居るところの勢力範圍に到つては、(僕は斯く分析的に觀察しても大した無理はないと考へるから然うするのであるが、) 哲學と、文藝とを同樣に視ることは出來ないのである。文藝は一の分業として人間の個々の欲望を充す他の分業と等しく、其の統一の範圍は他の分業の統一の範圍に依つて制限せらるゝのであつて、詮り宗教や、政治や、工業や科學やと同格のものである。これ等の分業は夫れ〳〵人間全體のある一つの側面、或は一つの意義を代表するものであるから、勿論その側面、或はその意義を表出する欲望の範圍に於ては極めて大切なものであり、又た有効のものである。其の範圍に於ては、ある特別なる興味を以て、ある特別なる方法に依つて、人生を統一して居るのであつて、人生全體の意義と、勢力とは是等總ての分業の創設し、精練する人生觀と、處世法との交渉と、協同とに依つて出來るのであるから、吾人はこれ等の分業の何れの一つが作つた人生觀、又は處世法と雖も、輕視し、蔑視し、無視する譯には行かぬ。然うすれば、然うする限りに於て、人生の意義と、勢力とはそれ丈減少することは明白である。併しそれと同時に、是等の分業の何れも他の分業との交渉と協同とを假定して始めて其の存在の理由を有つて居るのであるから、宗教であれ、政治であれ、工業であれ、科學であれ、その一つの人生觀、又は處世法を

無制限に擴大し、又は誇張して、それをしてそれに當然賦與されたる範圍と、役目とを超越せしむると、忽ち百の弊害は生じ來るのである。科學の人生觀、又は處世法は其れが要求せらるゝ範圍に於て、それが最も妥當のものであり、又有効なものであるのは云ふまでもない。唯だ之を以て人生全體の人世觀、又は處世法とするに至つて大なる弊害が生じて來る。何故ならば人生全體には、科學の處世法、又は、人生觀に依つて統一することが出來ず、他の分業の處世法及び人生觀に依つて統一することを必要とする欲望があるからである。此のことは政治に就ても、工業に就ても、宗教に就ても、等しく大なる間違なく言はれ得る通り、文藝に就ても同樣に言はれ得るのである。文藝が人生のある範圍に於て、その人生觀、又は處世法として偉大なる効果を有つて居ることに就ては誰れも疑ふ者はない。然し同時に是れは唯だ其の範圍に限つてゞあるとは言ふまでもないことである。若し一度び文藝の人生觀、又は處世法が其の範圍を無視して、潜越にも他の分業の範圍に侵入するならば、無數の弊害は此處にも生じて來る。

古來哲學ほど其の職分に就て、異釋の輩出したものは恐らく他にあるまい。併し僕の見る所では、哲學は總ての分業が、分業に內具する特性に依つて、互に孤立し、或は互に矛盾して、全體の活動の勢力を減殺しようとする傾向を拘束し、再びこれ等の分業の間に調和と、協同とを成立たしめんが爲めに、初め各分業の中に含まれて居つた反省的要素が茲に團結し、融合し、醇化して、一の形體と、系統とを取つたものに他ならない。されば哲學は個々の分業たる宗教、政治、工業、科學等の興味と、意義と、志向とを無視せざる限り、其の第一義に於て、人生全體の人生觀、又は處世法を案出するをその職分として居るものと言はなければならない。

嘗ては、科學は制限されるが、哲學は然らずと謂はれたことがあつた。然し是れは誤謬である。人間の活動て、一つも制限されないものはないやうに、科學も、哲學も、其れが制限されて居る點に於ては同樣である。而して、科學と、哲學とに制限を與へる所のものは、

人生に含まれたる事實と、法則とに外ならぬ。科學も、哲學も、生活の自然の發展として、生活を統一する道具たらんが爲めに生活の中より出現し、今は生活の要素となつて居るものであるから、何萬年、何百萬年の間、生活に依つて發見せられ、創設せられた事實と、法則とを離れて、或は其れ等を超えて、別に新しき事實や、法則やを發見することは到底出來ないのである。科學と、哲學との爲し得る所のものは、唯だ是迄生活が永い間の努力と、工夫とに依つて發見し、創設した所のものを、少しく整頓し、變更し、醇化するだけのことてある。斯樣に科學も、哲學も等しく生活の實際に依つて制限せられて居り、又制限せられないならば人生に取つて何の價値もないのであるが、併し科學と、哲學とが生活に依つて制限せらるゝ樣式に至つては、全然同樣てあるとは言へぬ。哲學は全體として生活の事實と法則とに依つて制限を受け、科學は生活の局部の事實と、法則とに依つて制限を受けるのてある。一つの機關として、其れと同格なる他の機關より制限を受けるのは科學てあつて、總ての機關に君臨しながら、同時にそれ等總ての機關の實狀に依つて制限を受けるのが哲學である。

今科學と、藝術とは既に證明した通り、生活に對して個々の機關として、全く同格のものであるからは、科學に代ゆるに文藝を以てしたならば、上に述べた、哲學と科學との關係が取りも直さず、哲學と、文藝との關係となるのてある。人生を論じ、又は文藝を論ずるに方つて、哲學は人生全體の立場より其の意義を發見しようとし、文藝は纔に文藝の域内にあつて其の意義を知らんとする。然うてあるから、人生の意義を知るに於て、文藝は哲學に及ばないことは勿論として、文藝其物の意義を知るに至つても、文藝は哲學に及ばざること遠いのてある。

又た泡鳴氏は文藝は人生の中身を把持するに反して、哲學は纔かに其の輪廓丈を捕捉するに過ぎないと云ふ謬見を有つて居る者てある。例へば僕の論文『藝術の眞』に對する批評として、氏の書かれた『新審美學の建設』の中にも『必要もないことを喚々するのが哲學てあるのなら、いくら系統を追ふて來たものにしろ、やッ

ぼし必要のない空言空理だ。輪廓的研究をいくら進めても、内觀を直把する僕等に對して「無學」とか、「淺薄」とか云ふ資格はない。」「如何に氏の認識論から持つて來て、眞と美とが人生を統一若しくば發展さす物であると論じても、輪廓論はどこまでも輪廓論て、內部的事實――これが僕等の生命――に接觸してゐない。」などゝ言つて居る。是れは確かに文藝の性質を誤解し、哲學の性質を誤解して居るのであるから、僕は此の點に關しても、少しく訂正を試みなければならない。

一體、人生と言つても別に其樣な單一不離な實體があるのではなくして諸の活動より成立つて居るのである。而して是れ等各の活動は、皆な其の役目に隨つて、其れ〳〵理想化を努めて居るのである。併し既に理想化と言へば、少くとも概念としては、其處に理想化する主力と、理想化せらるゝ客體との二つの存在が想像せられればならぬ。然うすると、吾人が宗教は人生を理想化するものであると語る場合には、人生なる言葉に依つて宗教以外の一切の活動を意味するのである。勿論それ等の活動も、それ〳〵己れの職分に隨つて理想化を努めて居るのではあるが、茲には主として宗教の作用を觀じて居るのであるから、暫く是等の活動は人生なる靜的の客體となつて、理想化せらるゝものであり、宗教は動的の主力として之を理想化するものであると認むるのである。併し、立場を換へて、吾人にして、政治或は藝術を主として論ずる場合には、宗教は他の活動の中に入つて人生なる客體を造つて、政治或は藝術によりて理想化せられ、宗教と他の活動とより成る人生は其れに依つて理想化されて居ると見られ得るのである。猶ほ此の引例に據つて推理して行く時は、如何なる活動も理想化する主力となり、如何なる活動も人生なる客體となつて理想化せらるゝものと見らるゝことが知れよう。

人生は個々の活動より成立つから、一切の個々の活動を離れて人生の無いことは明かである。併し又如何なる活動と雖も人生を形作る一つの要素ではあるが、其の全體でないことも明かである。されば文藝にしても、また哲學にしても、人生全體でない限りは、吾人が其の作用を論ずる時に、絶えず其れに依つて理想化

ぜらるゝ他の諸の活動即ち人生の存在することを假定しなければ、何の意義も何の理義も無いことになる。此の場合に於て、文藝も、哲學も人生の Function（數學上の意義に於て）であらねばならぬ。是等のものは Function として、始めて其の存在の理由を得來ると云ふものである。此の事實よりして、廣狹、深淺の相違はあるにしても、人生に對して文藝と、哲學との占める位置、盡す役目は、全然同一であり、又た同一であらねばならぬ。されば泡鳴氏が誤解するが如く、文藝は人生の中身を把持し、哲學は其の輪廓の捕捉に止ると云ふやうな區別は全然兩者の間には無い。若し哲學が輪廓丈を捕捉するものならば、文藝も亦輪廓丈を捕捉するに過ぎない。若し文藝が中身を把持するものならば、哲學も亦中身を把持するものと言つて宜しい。併し人生の要素であると同時に、人生を理想化するものゝ役目は、唯だ Function なる言葉に依て最も適切に言ひ表はさるゝ。

　併し、泡鳴氏が文藝と、哲學との作用に關して、斯の如き誤謬に陷つたのは、兩者の性質の相違が、學殖と見識とに於て兩つながら缺くるところ多き氏をして然らしめたものと見られる理由がないでもない。それは他でもない。詮り等しく人生の理想化ではあるが、哲學の範圍は文藝の範圍に比して遙かに廣い。從つて哲學の方法は、文藝の方法に比して、一層普遍的である。事實普遍的の物は、特殊的の物よりも一層多くの內容を概括することから一層具體的であるが、俗人は經驗が特殊的より普遍的に進むと、感覺が概念と成り、色彩が樣式と成り、事實が法則と成るが爲めに、普遍的なるは抽象的であると同一であると誤解する。泡鳴氏が文藝を以て人生の中身を取扱ひ、哲學を以て其の輪廓だけを取扱ふものと誤解して居るのは、畢竟するに此の俗人の想像を襲踏するに過ぎない。

　前に既に詳説した如く、文藝は人生一部の理想化を目的とし、哲學は人生全體の理想化を目的として居る所から、哲學の用ゐる道具の、文藝の用ゐる道具に比して、更に普遍的であり、又普遍的ならざるべからざることは言ふまでもない。併し其れが爲めに、兩者の作用の間に中身とか、輪廓とかの區別を立てるのは誤

分曉の甚だしき者と言はねばならぬ。何方も人生を理想化しながら、人生を構成する要素である。何方も異る方法ではあるが、人生の Function である。此の場合に於て、平然中身とか、輪廓とか語つて居る一事に鑑みても、泡鳴氏が文藝と、哲學と、人生との性質に關して、何れ程までに、誤解否没解に陷つて居るかゞ解かる。併し若し強いて泡鳴氏が得意がつて慣用する中身の把持と、輪廓の捕捉とにある意味を付けようとするならば、其れは出來ないこともない。而して是れは唯一の正當なる解釋ではあるが、勿論泡鳴氏が今有てる見識や、學識では到底夢想だも能せざる底のものである。其れは文藝と、哲學とに論なく、何でも人生の Function として指標的價値(index-value)を有するものが、中身を把持して居るものであつて、其れを失つたものは其の輪廓を捕捉するに止るのであると云ふことである。人生の Function たる役目を充すと、否とに依つて、指標的價値を失ふと然らざるとが定まるのであるから、輪廓を捕捉するに止る文藝が多いと同時に、中身を把持する哲學も尠くはない。而して僕の哲學の孰れの種に屬するものであり、泡鳴氏の文藝の孰れの種に屬するものであるかは、僕ならず、泡鳴氏ならざる第三者の意見に問ふことゝしよう。

僕は、ある制限を附するならば、泡鳴氏は文藝に親炙した所の者であると云ふことを承認するに躊躇しない。併し僕は如何なる制限を附するにしても、氏が哲學を理解した者であると云ふことは否定しなければならぬ。やがて是の一大缺陷が彼れが人生を語る時と、彼れが文藝を講ずる時とに別なく、彼れをして恐くその正鵠を失せしむるものとなつて居るのである。彼れは文藝の意義を求めるに、只に文藝の立場より、而も偏狹にして怪詭なる文藝の立場よりしようとするのであるから、文藝其の物の意義さへ十分に知り難い。斯かる文藝を以て、人生又は文藝の意義を知らうとする彼れの所爲の失敗たることに就ては多くの言辭を費すほどのことはあるまい。文藝病理に對して、僕が果して扁鵲たるの實力を有するや否やは世人の判斷に一任しよう。兎に角僕は既に膏肓に入れる泡鳴氏の痼疾は彼れが哲學を解せずして徒に文藝に親み、文藝も、雖

大にして深遠なるものに學ばずして、徒らに淺薄にして固陋なるものに溺れた結果たるに外ならぬことを診斷し得るのである。

氏は何處かで『哲學研究者よりも文藝家の方は雙方を大觀して進歩してゐるのだ』と豪語して居るが、多くの場合に於て、事實に據らずして、獨斷をすることのみを事として居る氏のことてあるから、玆にも是の豪語が別に確然たる經驗より來て居らないことは明かてある。勿論進歩したる文藝家、固陋なる哲學者と、即ち現代を理解して居る文藝家と、現代を理解して居らざる哲學者とを比較したならば、人生と文藝とを知ることに於て、後者の、前者に優るとは勿論てあるが、僕は事實に照して、所在の哲學者が悉く現代を理解せぬ者ばかりてあるに反して、所在の文藝家が悉く現代を理解する者ばかりてあるとは信じ得ない。而して、假りに玆に一人の哲學者と、一人の文藝家とありて、兩者共に略等しき程度に於て現代を理解して居るとするならば、僕は前言を繰り返へして、人生と文藝とを知るに於て、彼等の專門の性質上、哲學者の文藝家に勝るの萬々なるを主張するものである。幸ひに泡鳴氏は文藝家たり、僕は哲學の學徒であるから、僕は此の論文に於て是の主張の幾分を證明することを豫期して居るものである。

順序として、僕と泡鳴氏との論爭は、現實の意義の解釋より始まらなければならない。

四 現實の本質如何

僕は先きに僕と、泡鳴氏とは等しく人間は唯だ現實にのみ價値を置くべきものであると云ふことを其の綱領の一つとして居るが、唯だ僕が之を具體的に解釋するに反して、氏は之を抽象的に解釋する結果として、僕の學說は具體理想主義となり、氏の學說は新自然主義となると宣言したのである。氏が現實を如何なるものと理解して居るかは、氏が新自然主義に於て爲された數多の解釋に依つて明かてある。併し氏の解釋が多くは誤謬てあることを摘撥しようとする僕は、この斷定の根底と、理由と、標準とを明かにするが爲めに、僕は現實を如何に理解して居るかを先づ示さねばならぬ。

抑も現實とは如何なるものであるか。今之を一概に劃義することは甚だ困難である。ざつと言つて見ても、常識で言ふ所の現實と、科學で言ふ所の現實と、哲學で言ふ所の現實とは決して同一のものではない。常識と、科學と、哲學とに特有なる興味と、目的とが異なるに隨つて、是等のものに依つて現實は色々に解釋されて居る。常識の說く所の現實は必ずしも科學の說く所の現實ではないし、又科學の信ずる所の現實は必ずしも哲學の信ずる所の現實ではない。是等のもの丶認める、或は作る現實には、啻に段階の相違のみならず、又た種類の相違があるやうに見える。併し一層深く考へると、是等の諸種の活動も、素と單一なる經驗を醇化し、統一することを其の唯一の役目として居ることは言ふまでもないから、是等の活動の中には自ら總てに共通し、遍在して居る性質がなければならぬ。此性質より常識と、科學と、哲學とがおの〱現實と見て居る所のものを觀察し、摺撫し、推理するならば、其の間に一つの契合點を發見することが出來ないとは限らない。而して僕は確かに自づから是の契合點を發見したと信じて居る。其れは他でもない、即ち、現實を劃義して、現實は何物に限らず、凡べて意識に顯はれ、思想を動かし、行爲を決する所のものであるとすることである。併しあらゆる意識とあらゆる思想と、あらゆる行爲とは、生活を持續するが爲めにのみ、出現し、動作して居るものであつて、又た是等のものが是の役目を充たすには、過去に組織された經驗に依つて、新たに生ずる刺激を支配することを唯一の方法として居るのであるから、如何なる場合に於ても時々刻々に生ずる直接經驗が現實の心核と成つて居ることは爭ふべからざる事實である。實に直接經驗は總ての眞理と事實との證明者であつて、總ての誤謬と空想との摘發者である。併し如何なるのが直接經驗であるかと言ふことになると、容易には決せられぬ。

人間の生活の樣式が時代と共に變化し來つたと云ふことは、泡鳴氏と雖も否定すまいと想ふが、生活の樣式が變化するに隨つて、現實の性質が變化したことは事實である。勿論人間の生活に在つては、如何に太古に於ても我が國の古代の諸神が經營して居つたと泡鳴

氏が想像する如き生活の樣式は、(人間の本來の性質よりして、斯る樣式に依つては、一日と雖も安全に其の生活を持續することは六ヶ敷いと云ふ極めて單純なる理由より、)決して實際に存在せず、又た存在することは出來なかつたのであるが、兎に角、太古に於ける人間の生活は、近世に於ける人間の生活に比すれば、極めて單純であり卑近であり、素朴であつたことは爭はれない。併し如何に單純であり、卑近であり、素朴であつても、ある行爲をなすに當つては、必ず其れがある目的に依つて支配されて居つたに違ひない。人間に取つて時々刻々彼れの苦樂と、存亡とを決定して行く彼れの行爲ほど現實のものはないが、斯かる行爲は瞬間的に來襲する刺激に對じて瞬間的に反應する衝動のみに依つて支配する丈では成り立たない。斯かる行爲は過去の經驗に依つて改整されて居る衝動と、過去の習慣に依つて統御されて居る刺激との間の交涉より成るのである。而して此の經過は多くの場合に於て智識の方面では反省となり、情意の方面では苦悶となつて現はれるのである。此の反省と、苦悶とは人間の行爲が必然に具備する重大なる成分であると謂はねばならぬ。されば正確なる意義に於ては、實際現實なるものは時々刻々に起る行爲の他にはないのであるが、是れは確かに泡鳴氏の所謂現實よりも一層其の性質は複雜なるものであり、その範圍は一層廣汎なるものである。換言すれば現實たる行爲を形作るのには其れが何の位素朴のものであり、簡單なものであつても、必然に支配する要素と、支配さるゝ要素との二つの側面の分裂と、一致とを要するのであるが、泡鳴氏は是れ等の兩側面を單一なものと觀て居るか、然らざれば纔かにその一側面のみを看て居るのである。人間の行爲は後に詳しく僕が説明を試みる如く、必然に理想即ち支配する方と、嗜欲即ち支配せらるゝ方との二要素から成り立つて居るのであつて、人間の所爲は是等の二要素を包含すると同時に、又其の事實を意識することを其の特徴として居るのである。偶には行爲の習慣と呼ばるゝほどに固定的のものとなつたものゝ中には、支配する側面が全く支配さるゝ側面に吸收されて了つたものもあるが、是れは極めて少數であつて、其の多

數は歷然統一ずる要素と、統一さるゝ要素とを包含して居るものである。

此の統一する側面と、統一さるゝ側面とは、人間がその生活を持續する道具として賦與せられた衝動の本質より自然に分化して來るものである。衝動は經驗に從つて得られた意義と、便宜とに依つて、時々刻々に變更せられ、或は改造せられて始めて役立つものであるから、ある刺激に反應するが爲めに起る衝動は、過去の經驗に參照して其れより蓋然起るならんと豫想せらるゝ結果を商量して、而して後その樣式を決定するのである。人間は事實として同時に並立する多數の欲望と、前後に代謝する多數の欲望とを有つて居つて、是れ等の欲望の中には協同するものもあり、又矛盾するものもあるし、又假令協同するものでも、其のある物を過度に主張すれば、他の欲望は其れが爲めに壓迫を受けるのは極めて自然であるが、事實として人間は有限にして、總ての欲望を無限に滿足さすることが出來ないものであるから、此處に過去の經驗に參照して同時に起る欲望と、前後に續く欲望との中より、成る丈廣く、深く、長く幸福を得る爲めにある欲望を取つてある欲望を捨てることが必要となるのである。斯くして單一なる欲望は其れが動くに當つて、暫く其の樣式即ち支配する側面と、その內容即ち支配せらるゝ側面との二つに分るゝのである。而して吾人は前者を理想と呼び、後者を嗜欲と呼ぶのである。

五　現實を構成するに必要なる二成分

されば人間の欲望が實現するには必ず理想と、嗜欲との二側面となつて現はれなければならないのであつて、之は決して然うしなくても圓滿な生活が出來るのに、殊に此樣な迂遠の手段を取るのではない。然うしなければ嚴密に言ふと一瞬間の生活も覺束ない故に然うするのである。

讀者は言語に囚はれずして直ちに事實を捕へなければならぬ。素と樣式と內容とは單一なる實在に對する二つの立場に過ぎない。されば理想を支配する側面と見、又嗜欲を支配さるゝ側面と見ても、實際に於ては各欲望がその本來の役目を充たして、其れが附屬する主觀の幸福を增進し、彼が安立を保障しようとして活(はたら)

く時は自づから、彼の生活が其の様式に於て最も善く整理し、其の内容に於て最も多く富贍ならんことを力めるから、其の結果は終に二重に現はれて一方には理想となり、他方には嗜欲とならざるを得ぬのである。

人間の創設する經驗が多くは對立の二要素より成立つものと見られるのは、その根底が悉く理想と、嗜欲との二側面となつて現はるゝ欲望から出て居るからである。喩へば主辭と賓辭、知覺と概念、權利と義務、專門と分業、保守と進歩、個人と社會、事實と法則、世界と神等の對立は皆な欲望の二側面に附せられたる概念に過ぎない。

人間の一切の活動は彼れが幸福を增進し彼れが安立を保障するが爲めに一時に於て、永久に亘つて、皆な欲望の二側面なる理想と嗜欲とを調和し融合せんとして畫策されたものと言つても宜い。科學も、道德も藝術も、皆な如何にして嗜欲を抑壓せずして理想の確立を圖らうか、又理想を破壞せずして嗜欲の主張を全うしようかとする工夫である。人間の生活の特色は變化の中に統一を求め、統一の中に變化を求めて居る所にあるのみならず、變化がなければ統一は破壞せられ、統一がなければ變化を窒塞する所にあるのである。素と人間の生活は是等兩者の調和に依つて始めて得られるものであるから、大體に於て、絶えず是の不思議なる事實の上に相應な注意は拂はれたのであるが、併し時代の異るに隨つて、生活の方法も自ら異り、例へば保守的即ち演繹的の社會に於ては、比較的に理想の方が重ぜられ、之に反して進歩的即ち歸納的の社會に於ては、比較的に嗜欲の方が重ぜられて居る。されど現代の如く、是等の兩側面の互に確執し、又相ひ協同する性質の、一層明瞭になつた時に於ては、一層善く平等に兩者に對して注意を與へねばならぬと考へる。

僕の現實は現に僕の行爲を形作る一切の要素を謂ふのであるから其れは必然に嗜欲と共に理想を包含して居ることは明かである。併し泡鳴氏は等しく現實を尊びながら、氏の現實は尠しも理想を包含せず、又包含することを許さゞるものであると謂ふ。僕より見れば、理想を容れないならば、何うして最小の、或は最單の、或は最低の現實でも存在し得るかゞ疑はしいのであ

る。假りに氏の言ふ如く、ある極めて少數の人士にあつては刹那と、刹那との間の統一を考へないでも、猶ほ生活の出來るやうな不思議な經驗が成立ち得るとしても、氏の所謂刹那は數的に何れだけの經驗と延長とを意味するものかは僕はまだ氏の說明を聞いたことがないから無論解らないが、併し氏が一論文を完了する間、若しくは一章句を完了する間は、一刹那と見られようと思ふが、その間氏の事であるから、多くの矛盾や、反論理のあるのは當然としても、兎に角初めに企てられた目的が終りまで持續されて居らないならば、一論文乃至一章句を完了するとが如何にして出來ようか。

六　生活に於ける理想の作用

僕は現代に於て自由思想の勳爵士（ナイト）を以て自ら居る者である。現實を尊ぶ點に於て決して泡鳴氏に劣るとは自づから信じない。

此の宣言は今事實に據つて十二分に證明しようと欲するのであるが、僕と、泡鳴氏との相違は、僕が現實の全體を取つて之れを現實と認むるに反し、泡鳴氏は其の半面或は局部を取つて之を現實と認むるとである。

僕も泡鳴氏も等しく人間にあつては、彼れの一切の努力一切の活動、一切の事業を產出する所のものは、彼れの生活を持續したいと希ふ欲望より他に何物も無いのであるから、生活欲は人生の根本事實であると見て居るものである。

勿論何の爲めに斯る組織を有する宇宙が在るか、又何故に斯る性情を有する人間が造られたかと云ふやうな問題は、到底人間の知力に依つて解釋し得る所のものではないが、人間は又事實に於て昔より一度も眞面目に斯樣な問題を解釋しようとしたことはない。なるほど言說に於ては宇宙の目的を解釋しようとした宗教もあつたし、人間の由來を解釋しようとした哲學もあつたが、其の實は如何なる宗教でも、如何なる哲學でも、人間が斯かる性情を以て、斯かる宇宙の中に存在することは、人間の力にて排斥することも出來ず、逃避することも出來ざる旣定不動の運命として、唯だ其の運命に支配せられながら、如何にせば少しても善く生活を持續することが出來るかと云ふことを唯一の問題として居つたのである。

人間の見る所の一切の事實と、人間が造る所の一切の經驗との根底たる人間の生活欲を超えて天地萬物は悉く不可解であり、無理想であると云ふ泡鳴氏の意見に僕は同意する。然しながら人間が己れの生活を持續する爲に過去の經驗に依つて衝動を調整して居る上は、人間の生活が無理想であるとは言へぬ。勿論人間は刺激を支配する力の薄弱なるが爲めに、彼の理想は屡々破壞せらるゝことのあるのは事實であるが、兎に角、理想が無いならば一瞬間と雖も、人間は生活し得る者ではない。生活欲の出現は全く盲目的のものであつて別に理由も目的もないものと思ふが、併しこの盲目的なる生活欲を基本として特定の組織を有する宇宙にありながら、特定の性情を以つて生活して行くことになると、其處に自づから人間の我儘勝手を以て無視し、或は變更することの出來ない客觀的條件が成立するのである。此客觀的條件なるものも人間が有てる性情を以てして、永い間の試驗より一番便利と考へた思索の方法又は生活の方法に過ぎないとは明かであるから、素より人間の欲望を離れて固定のものではない。併し人間の性情にして劇變せずして、過去の努力に依つて作られたる進路に據つて發展しなければならぬものである以上は、彼は段々に萬有を征服するにしても、必ず過去に創めた思索の方法或は生活の方法、即ち客觀的條件に準憑して行かなければならないものである。されば理想とは生活の外にあつて生活を支配するものでもなければ、亦生活が向つて行く所のものでもない。人間が自己を實現して行くに必須の方便として、創設し行く原則であり、又た假定である。人間の精神全體は泡鳴氏の所謂熱想の樣式を執り如何ほど高度の白熱を以て活く時でも、それが人間の精神であると云ふ極めて單純の事實からして、必ず理想なるものは其の重要なる一側面として存在し、而してその存在は明かに意識せらるゝのである。理想は精神全體に取つて外的の拘束として存在せずして、内的の關係として存在するのである。而して僕は人間の生活は如何に幼稚なものであつても、決して此の内的の關係を有たずして發動するものでないことを斷言する。

僕は今泡鳴氏の言葉に據つて、氏が如何に現實を理

解して居るかを少しく窺はふと欲ふ。氏は、

「人生は自我のエクスプレション、發想である。發想のうちに發現する自我は刹那的な物であるから、統一が出來たと思ふ時は既に自我は拔けてゐる。發展が出來たと思ふ時は、もう自我の形骸だ。」（新自然主義、新審美學の建設、頁三六六）

折衷的統一の出來ない、折衷的發展の見込みがない實際の人生は、いくら理想家があつて、絶叫しても、無理想である。無目的である。理想とか、目的とか、解決とか云ふことは、或物に對して他の或物を豫想するから出て來るので、全然他物の存在を許さない獨存自我は、徹頭徹尾、無解決である。それが生活し、活動するのであるから、直動的である。僕等の所謂新文藝はかういふ直接眞劍の人生を體現するのであるから、折衷的、手段的な眞とか、美とかいふ物を眼中に置かないのだ。若しこれに代はる物を指定する必要があるなら、僕は無解決、無理想、苦悶、悲痛等の實感を與げて答へよう。（全上三六七頁）

七　泡鳴氏は一種の形而上學者なり

以上の引證に依つて泡鳴氏は如何に人生を觀、又如何に、人生と理想との關係を觀て居るかと云ふことは略髣髴せらるゝのであるが、是れに由て見ると泡鳴氏が系統上、又作用上、如何に氏と形而上學者とが相關り、相依つて居るかを究むるの學識を缺き、又た忍耐を缺く結果として終に氏自身漫然、且つ雜然、不倶戴天の敵の如く言ひなす形而上學者が幾世紀間沒頭し來たつた舊窠臼に失脚して居ながら、其の事實に氣付かぬのである。如何にも笑止の至りである。

學殖に於て餘り富贍であるやうに見えぬ泡鳴氏が曾て哲學史を繙讀したとがあるか何うかを僕は知らぬ。假令あつても、見識に於て餘り高邁であるやうに見えぬ泡鳴氏が、如何ほど哲學史上の事相を體得して居るか、何うかは僕は知らぬ。併かし、古來同等の地盤に於て、互に他を排斥し、或は蔑視した二學說の多くは、互に同一程度の經驗と、理解とを以て、事實を觀察した結果として、生活の全身を形作る二側面を分離して、二個の實在と爲し、而して彼等おの／＼の敎育と、興味と、目的との相違する所より、一方が本體と重んずる所の側面を他方は之を屬性と輕んじ、又後者が實在と尊ぶ所の側面を前者は之を分派と卑めた結果に過ぎないのである。例へばエピキュラス學派と、ストア學派との爭鬪も斯くして出來たものであるし、名目論と實在論との爭鬪も斯くして出來たものであるし、合理說と經驗說との爭鬪も斯くして出來たものであるが、殊に近世の思想史に於て此の種の爭鬪で最も顯著なる者はベムザム、ミルの徒の功利主義と、カントの嚴肅主

との關係である。今僕は玆に悉しく是れ等の對立的學說が相關する諸點を闡明する遑はないが、哲學史上、直覺說に反對して起つた功利主義の理解と動機とは頓て功利主義に反對して立つた嚴肅主義の理解と、動機となつたことは、一見すると極めて奇異なる因緣のやうであるが、其の實哲學史を通じて屢繰返された極めて平凡なる事相である。詮り正當なる行爲は主觀的條件なる情的滿足と、客觀的條件なる知的一致との二側面を具備すべきものであるが、偶是等の學說は同一體より生ずる二側面の一方のみを重視して、他方を輕視し、甚だしきになると、一方の存在を認識して、他方の存在を閑却し、遂に永劫に亘りて理解すべからざる葛藤を生じたのである。されば是等の對立的學說を融合する唯一の道は、遺憾なく正當に、又た公平に、兩者の性質を知悉し得る高處より、兩者を觀察し、批評し、訂正して、兩者に相應な權利を與へると同時に兩者に適當な拘束を課し、以て兩者の反抗は皮相に止り、根底は依立てなければならない事實を看破し且つ道破するにあるのである。

泡鳴氏の言說する所に依て察するに、氏は現實を尊重するが爲めに理想を排斥すると云ふのであるが、其れは宛もカントが快樂論者の快樂に與へた見解を沒批判的に受取り、而して其處には道德の根底は發見せられずと想つて反對したと同樣に、氏は形而上學者が理想に對して與へた解釋を沒反省的に受取り、而して意義ある生活に其樣な物は無用であると反對して居るのである。若しカントにして一層の見識と同情とを以て快樂主義の主張とする快樂なるものゝ性質を吟味したならば、假令快樂主義は勝手に其れを誤解し、誇張して、遂に其の意義と其の價値とを、いたく歪めて了つたにしても、その根底には、人間一般の經驗に基ける評價の標準が含まれて居ることを發見して、確かに其れに依つて自家の學說を融和し、彼れの學說を一層實驗的にして具體的のものと改良することが出來たらうと思はるゝと同樣に、若し泡鳴氏が倘ほ一層の經驗と、見識とを以て、理想を人生に參照してその意義を求めようとしたならば、假令形而上學者の理想に對する見解には、勿論多くの誤謬も、悖理も含まれて居るにし

ても、猶ほ彼等の見解の中核となつて居るものは、實際の生活上に動いて居る事實であるとを發見したであらうと思はれる。

僕が前に少しく略說した通り、人間の精神生活は其れが如何に幼稚なものでも、亦た如何に發達したものであつても、必ず其の欲望の動く時には、支配する側面即ち理想と、支配せらるる側面即ち嗜欲との二つの確執及び協同となつて動くのである。而して生活が段々に複雑となり、廣汎となるに隨つて、嗜欲は段々に複雑になるから、其れを支配する理想にも段々に廣汎のものが出來て來るのであつて、遂に第一原因とか、神とか云ふやうな理想も出て來るのである。併し後になると其れ等が造られた當時の動機や、目的やが一切忘れられて、終には、全く日常生活と何等の關係無き空想、或は迷信となつたのであるが、併し常に學者の學說より實き、常人の常識に於ては、猶ほ極めて平易に、素朴に、無造作に、是れ等の往々にして抽象概念となり易き理想も、實際には案外なる威力を以て、生活に統一を與へ、慰藉を與へ、希望を與へて居るのである。

それは兎に角、人間の生活を指揮する心的道具は必ず統一する側面と、統一せらるゝ側面との二つとなつて顯はれるものであつて、嗜欲とは統一せらるゝ側面に付せられた名に過ぎないと同樣に、理想とは統一する側面に付せられた名に過ぎないならば、苟しくも少しく道理を解する者にして誰れか嗜欲の存在を疑ひ、理想の存在を疑ふ者が一人でもあらうか。

世の形而上學者、即ち抽象理想論者の把持し、尊崇する理想は幾世紀間、曲解に曲解を重ね、誤見に誤見を疊み來て、今日となつては實際生活に於ては到底實現すべからざるものとなつて居るのみならず、實際生活とは何等の關係もないものとなつて居るから、實際生活に害毒になればとて、決して利益にはならないが、併しよく〳〵此の由來を繹ねると、素とは嗜欲と對立して必然精神生活の道具として存在しなければならぬと僕が信ずる理想を敷衍し、擴張して出來た結果に過ぎぬ。而して此の經路を取るにも、それ〳〵甚大にして、甚深の理由はあるのであるが、唯だ不幸にして彼れ等は一々實際生活の需用に應じて、その中に生ける

意義と價値とを求めることを忘れたのである。されば若し泡鳴氏にして眞に人生を知り、理想を知つて居る者ならば、形而上學者の謂ふ所の理想を排斥すると同時に、實際生活に於て動いて居る理想を發揮すべきであらうと思ふ。何故ならば、斯る理想の存在は、人間の生活の最高樣式に於ても假定せられなければならないものであると同時に、其の最低樣式に於ても假定せられなければならぬ者であるからである。

八　生活は解決なり

氏は「理想とか、目的とか、解決とか云ふことは、或物に對して、他の或物を豫想するから出來て來る。」と平然言はれて居るが、是れは明かに氏が少しも精神生活を組織する要素と、其れ等の關係とを知らぬことから來て居る誤謬であつて、理想とか、目的とか、解決とか云ふものは、決して自我に對して存在する或物に非ずして、自我が活動する時は必然自我の中に現はるゝ要素である。泡鳴氏の言はるゝ通り、自我は勿論獨存のものであるが、其れが動く時には、嗜欲と理想、方便と目的、問題と解決と、云ふやうに必ず自我の活動は、暫く二つの側面を呈し、是れ等の確執と、協同とに依つて、自我はその生存を持續して行くのである。是れ等の兩側面が確執に始まり、協同に終る期間に於て、一つの行爲が完成さるゝのであるから、吾人が一つの行爲を爲すときに、一つの理想は實現せられ、一つの目的は到達せられ、一つの問題は解決せらるゝのであるが、其の次ぎの瞬間に復た一の行爲を發顯するならば、又新たに一つの理想、一つの目的、一つの問題は創出せらるゝのである。斯くして一の實行は、一の理想を生み、一の理想は一の實行と熟し、斯く轉々反復して、無窮に進むのが人生の特色である。されば氏が「物には限りがないから、一つの物に解脫をするとまた跡の物に迷ふ筈で、――數量的でなくとも全く解脫が出來るとすれば、それは涅槃の狀態であつて死でなければ空想に過ぎない。」と說いて居るのは、極めて平凡なる事實を平凡に觀察して居るのであるが、此の事實は、僕にはそれだから、人生に理想は無用なものであると云ふことを證明せずして、反つて時々刻々理想に依つて支配されなければ生活は出來ないが、併し生活

は一つの理想が實現さるれば、直ちに他の理想を胚胎し來るを必要とするものであると云ふことを證明するだけである。されば、氏が又た『現代人の本性は、從來の解決と慰安とに滿足出來ない程熱して來たのだ。この熱心で餘裕がない程の眞面目が、無限絶大の煩悶苦闘となつて現はれて居る。』と言つて居るのも非常に間違つた見解である。現代人が從來の解決と、慰安とに滿足出來なくなつたと云ふのも殆ど虛僞に近いほど事實を誇張した話であつて、事實現代人は新しき狀態に生活するが爲めに、多少工夫を致して、過去の解決の方法と、慰安の方法とに訂正を加へて居ることは事實ではあるが、併し大體に於て過去の遺傳を受け、過去の文明を繼けて居る吾人が、過去に出來た解決の方法と、慰安の方法とを無視して、何處に何うして、新らしく解決の方法と、慰安の方法とを發見することが出來よう。併し其れは然うとして、それであるから、現代人は唯だ煩悶苦闘して居るだけであると云ふのは全く虛僞である。空想である。人間は何時の時代でも、決して理想に依つて解決を行はずして、一瞬間と雖も生活し得るものではない。現代人と雖も、現に生活して居る以上は、理想も立てゝ居るし、解決もして居る。若し泡鳴氏の謂ふことに少しでも眞理があるならば、其れは唯だ現代人は理想を建て、解決を爲るのに、前人よりも多く困難を感じ、苦痛を感ずると云ふに過ぎない。

氏が人世と、理想との關係を誤解して居ることの證據は、全篇到る所に疊出するのであるから、之が實例を引うとするには、際限もない話であるが、次の文句抔も其の一例とすることが出來る。『覺醒した自己は生きると云ふことより外にない。純粹なる生は主義に立して、而も無理想な苦悶――そこには之を解決解脫せうとする弱い考へなどは全くない』(刹那主義と生欲、三一九)

氏は茲に覺醒したる自己は生きると云ふことより外にないと言つて居るが、其れは勿論のことであつて、僕は覺醒しなくても自己は生きると云ふことより外に目的はないと思ふが、併し生きるには、是非共時々、刻々に起る苦悶又は問題を解決する理想が必要であるの

てある。苦悶を解決するのは、弱い考へてあるか、何うかは知らないが、生きると云ふことは、詮り僕から見ると解決すると同じことになるのてあるから、苦悶を解決せずして、猶ほ生きると云ふことは、なるたけ生きないやうに、生きると云ふことになるのてあつて、天下之れに優るの矛盾が復たとあらうか。氏はまだ氣が付くまいが、時代の如何、又は人種の如何に拘らず、人間に依つて企てられ、爲さるゝ活動は、政治てあれ、道德てあれ、科學てあれ、藝術てあれ、皆な此の苦悶の解決を目的として起らなかつたものは一つもないのてある。君等が苦悶の文學とか、悲痛の文學とか云ふものも、畢竟するにやはり苦悶を解決する文學、又は悲痛を慰籍する文學に過ぎないのてある。

九　理想なくして主義ある能はず

氏は主義と理想とを區別し、主義は生活に大切なものてあるが、理想は無用のものてあるのみならず、又有害のものてあると、觀て居ることは、次の章句に由つて明かてある。

僕等の様に下らぬ安心の出來ない、種々な疑問の多い、刹那の存在を爭ふものには、主義が乃ち生命てある。(早稲田文學並に時事新報記者に頁一六二)

無主義なものは全く生命のないてくのぼう同様だが、世の所謂理想なるものは無くても生きておられるのだ。(刹那主義と生慾頁三一七)

斯く主義を標致して、理想を排斥する泡鳴氏は、確かに主義と理想との關係を未だ一度も嚴密に考査したことのない人てあることは分明てある。是れも畢竟するに、彼れが理想の性質を全然誤解して居るより、自然に來つて居るのてあるが、然し僕より見れば、理想は主義の根底てあり、淵源てある。世の中には理想を有つて居つても、未だ主義と云ふほどのものを有つて居らぬ人は在る。然し理想を有たずして、主義を有つて居る人は決してない。何故ならば理想が發展し、組織せられて、茲に始めて主義なるものが生ずるからてある。科學が組織されたる知識てある如く、主義は組織されたる理想てある。理想は前に掲げた僕の解釋に從つて、個々の欲望がはたらく時に嗜欲を支配する所のものてあるが、生活が努力に依つて段々に統一を得、個々の欲望が一つの系統を形作るやうになるに及んて茲に始めて主義なるものが現はるゝのてある。主義な

るものは過去に蓄積したる方針に依つて、當面の刺激を征服して行く計畫である。それが意思の性質を含むやうに聞えるのは計畫が生きて動く場合には、何時でも抵抗に打ち勝つ勢力を有たなければならないからである。泡鳴氏の如く最小にして最低の行爲の成立にも必要である理想を無視して、行爲を單に刹那の盲動と思惟しながら、何うして其中より自づと方向の意識と、目的の連續とを假定して居る主義が發生し得ると理解するのであるか。斯かる主義は依然たる本能であらねばならぬ。假令それが意識を伴ふとも、經驗に依つて發展し、努力に依つて左右せらるゝことなく、先天的の樣式と運動とを以て永久に進む所のものであらねばならぬ。併し從來の經驗に憑ると、少くも人間にあつては、經驗に依つて發展せず、努力に依つて統一されないものは、異る時處を一貫して、同一性を保つことは難いと云ふことが證明されて居る。されば斯かる主義は行爲の根底たる理想の組織せられたものであると云ふことに歸する。事實に據り、推理に頼りて理想と、主義との關係を索めず、徒らに理想を傳說的に解釋して、而して之を一概に排斥し、鼓から棒に主義なるものを拉致し來り、頻りに有難がりて居る所が、泡鳴氏の泡鳴氏たる所以でがなあらう。

十　人性は果して苦痛のみなりや

泡鳴氏は又人生を苦悶、或は悲痛の連續と見る所の論者の一人である。例へば、

「どうせ、人生の最終最始は、渾沌でないか？　その終始をつないで居る狀態も渾沌ではないか？　此間に活動するものは、メレジコウスキの所謂『人間神』から、耶蘇教傳來の形式を取り去つて、解脫を求めず、救濟を呼ばず、轉々苦悶に堪ゆる人間、乃ち、『悲痛の靈』でなければならない。解脫は自分以外には何物かを見認めて居るのだ、自分が神なら、救濟を求める譯はない。久遠の生命は苦痛で、最も個人的のものである。宗教でも哲學でも組織する餘地を許さない。この境地は、宗教でも哲學でも達し得られないから、僕は最も自由な藝術を取るのだ。然し、僕は『藝術の爲めの藝術』主義は採用しない。半獸主義から出る自然主義は、一言で云へば悲痛の靈を體現すればいゝのだ。」（トルストイ論を讀む頁一〇六―一〇七）

「人生は醉生夢死でいゝ。どうせ悟つたと澄まして居る者も裏面から見ると、不自然な醉生夢死である。醉ッぱらひの方が却つて神經は過敏である。過敏な神經が何よりも生命だ――人生は悲慘だ、人間は痛苦だ。樂天だとか、厭世だとかいふ餘地もないのだ。」（日本古代思想より近代の表象主義を論ず頁三八）

茲で泡鳴氏の人生の最終最始と云ふことが、其の Whence, Whither を意味するならば、僕もやはり其れ

は渾沌たるものであると云ふことに同意する。然しその終始を繋いで居る狀態と云ふのが其の What に當るならば、僕はそれが渾沌であるといふことに反對する。人間は何うして出來たか、何うなつて仕舞ふか、何人と雖も答へることの出來ない問題であるが、又何人と雖も答へることを要せぬ問題である。詮り嚴密なる意味に於て、斯かるものは何時でも問題とはなつて居らなかつたのである。併し唯だ人間は自我の生活を持續したいといふ欲望を以て存在して居ると云ふことだけは、何人も否定することの出來ぬ根本事實である。人間の企てる一切の活動と、人間の試みる一切の努力とは、皆な彼れが生活持續の欲望を實現する爲めに起るのである。而して是れ等のものが生活の內容、即ち What を形作つて居るものである。されば吾人に取つて唯一の實在たる、この what 中には、自づから意識もあり、目的もあつて、一つの系統をなして居るものがあるのであるから、僕は現實の立場より見て、生活そのものは決して渾沌たるものではない、渾沌であつては生活は成立たないと言ふのである。

泡鳴氏はよく口癖のやうに、人生は苦悶である、悲痛であると言つて居るが、氏は果して自分の言つて居る言葉の意味を考へて、而して其の樣なことを言つて居るのであらうか。

吾人にして苦痛と、快樂とを語る時には、是れ等は實際經驗の上に立つて經驗せられたる、若くは經驗せられ得る事實であるとして語らなければ、何の意味もない。吾人が就て語り得る苦痛と、快樂とは、身體若しは精神が或る狀態にある時に起る所の特定の經驗である。大體に言へば、吾人の活力が發揚する時には快樂の感情を生じ、それが沮害される時には苦痛の感情を生ずる。されば吾人が苦痛と快樂とを語りて、其れを吾人が存在を獲、生活を始めた後の事實に限らなければ、何の意味もないことになる。而して吾人が意識の證明する所に憑れば、(吾人に取つては吾人の意識の證明が實在に關する最終の證明である)吾人が生活に價値を置いて生を續ける間は、何人と雖も快樂のみを經驗して、少しも苦痛を經驗せぬと云ふのは虛僞であるが、亦た苦痛ばかりあつて少しも快樂は無いと云ふ

のも事實に反する。

昔ショウペンハウエルは人間が充されざる欲求を抱くは苦痛であるが、人間の生活に於ては、一つの欲求の充さるゝ瞬間は如何にも短きものであつて、一つの欲求が充さるゝや否や、忽ち他の欲求が懷かるゝ。されば人間の生活の大部分は、猶ほ未だ充されざる欲求の爲めに苦められて居る期間である。それ故に人間の生活は悲慘であると結論したのであつた。ショウペンハウエルは確かに事實の半面しか見て居らなかつたのである。欲求の滿足を企てゝ居る間の精神狀態は、希望と呼ばるゝ所のものであるが、希望は決して純乎たる苦痛のみではなくして、其れがある快樂を伴ふことは事實である。其の時に自我の全體は欲求の滿足に依つて初めて實現するものと信じて居るのであるから、まだ欲求が遂せられない間は不滿を感じ、軈て此の不滿が苦痛の形を執ることは事實であるが、併し一方には自我全體の實現が段々に接近しつゝあることを意識し、それに依つて快樂を感じて居ることも事實である。然うすると、希望が充され了つた瞬間も、希望の懷かれ初めた瞬間も、苦痛と快樂とは常に相伴つて居る。素より數量的に苦痛と、快樂との關係的多寡を計算する譯には行かぬが、普通の狀態に於ては、先づ大體に於て兩者は生活を持續する道具として相半ばして併存し居ると見るのが適當であらう。この實際上の立場を離れて、生存することが生存せざることに比して、既に苦痛であると云ふやうなことを言ふ者があるならば、僕は斯る人と眞面目に議論するの勇氣を有たぬものである。何故ならば斯かる人は證明も、駁論も兩つながら許さぬ空想を弄んで居るに過ぎないからである。一體苦痛とか、快樂とか云ふことは人間が生活欲を基礎として、生活を始めて後に生活の間に現はるゝ實際の經驗の一であつて、人間が人間である間は、決して是れ以外に別種の苦痛や、快樂を知らないし、又其れが知れよう筈はないのであるから、苦痛と快樂とは唯だ關係的に成立ち得る意識と見なければならぬ。ある經驗が苦痛であると云ふならば、是れは既に彼は半面に於て快樂を經驗して居ることを暗示するのである。

氏は又「生を愛するのは必ずしも光明的ではない。

光明の裏には暗黒がある。この世に生存するのは苦痛である。たゞ幾多の苦痛を受けてもなほ生きて居たいと努力するところに、人間の威力が出て來る」(日本古代思想より近代の表象主義を論ず頁六)と語つて居るが是れも甚だ事實に相違した斷定である。人間が生を續けて居るのは決して苦痛であるに拘らず、然うして居るのではなくして、生を續くることに價値を置いて居るから、然うして居るのである。世の中には自づから手を下して己れの生命を絶つたならば、未來に於て嚴罰を受けるであらうと云ふ信念よりして、價値を置かない生活を續けて居る者も尠しはあらうが、併し此の世の生命が絶れて後は絶對の無意識に陷るのであると堅く信じながら、なほ生活を營んで居る者が大多數であらうと思はれる。彼等が生活を持續して意識を活(はたら)かして居るのは、生活を斷ちて意識を無くなすよりも、然うして居る方が價値あることゝ信ずるからではないか。泡鳴氏の謂ふ如く、人生が左程悲痛であるならば、其の悲痛より離れる力は各人に具つて居る。生活が果して悲痛ならば、悲痛より脫する方法があるのに、何も幸福を求める本來の性質に反してまでも、努めて悲痛の束縛に甘じて居るにも當らぬではないか。僕より觀れば、そんな愚の行爲を續ける所に、人間の威力が出て來るなどゝ言ふのは全く無意味の戲言(たはごと)に過ぎぬ。

十一　神は生活統一の要具の一なり

前に說明した通り、理想なるものは其の初め瞬間的の嗜欲を支配する爲めに出來たものであつても、生活が發展するに隨つて理想も發展し來るものであるからは、人間の工夫する概念及び彼が從事する活動は、悉く理想の體系であると云ふことが云へる。今泡鳴氏が論じて居るだけのものを擧げて見ても、科學、哲學のやうな活動も理想の體系であるし、神の如き概念も理想の體系である。氏の意見を覗ふが爲めに、例に依つて氏の言說する所のものを少しく引照して見よう。例へば

「僕の『半獸主義』で云つた通り、宇宙は到底不可解である、人生は極度まで神秘である。科學や哲學は、出山釋迦と同じくミイラのおばけて、けちりんも靈活肉熱の趣きがない、世の覺醒者はすべて無意味の行者である」。(トルストイ論を讀む、頁九七)

「神と云ふ觀念があると、どうしても自然に對する態度が薄くなる。

實際生活で云へば、毎日の仕事は他日或報酬を得る手段に過ぎない。だから、一つの過ちがあると、それを懺悔する形式までが起つて來た。神も知らない、道德も知らない實業家ほど現代に於て自己の仕事に一生懸命なものはあるまい』。(日本古代思想より近代の表象主義を論ず、頁三二)

と氏は述べて居る。併し僕が嘗て何處かで委しく論じた通り、哲學や、科學は決して、氏が茲で考へて居る通り、不可解なる宇宙を說明することを目的としないし、又神秘なる人生を說明することを目的ともしない。常識が一轉すれば科學となり、再轉すれば哲學となるのであるが、常識は唯だ生活をなるたけ善く持續する方便として、理想を組織するものに過ぎないのである。而して生活が段々に複雜となり、廣汎となるに隨つて、常識よりも一層細密て、且つ一層正確なる知的方針を必要として來ると、常識は何時か科學となるのである。又た生活が更に段々に複雜となり、廣汎となるに隨つて、孤立せる科學にては滿足せず、一層深刻にして普遍なる知的統一を必要として來ると、科學は何時か哲學と變ずるのである。されば科學も、哲學も等しく常識と共に人間の生活が或る程度に到着してより後は、それを形作る要素となつて居るのであるから、人間の生活に常識が必要であるならは、科學も、哲學も亦た其れに必要である。而して常識が組織せられた理想に過ぎないならば、科學も、哲學も、亦組織せられたる理想に過ぎないのである。今日吾人が生活と云へば、自づから常識は其の中に包含せらるゝ如く、科學も哲學も其の中に包含せらるゝのである。それはなるほど、哲學者、科學者と呼ばるゝ者は比較的に少數であるが、其の要求は人間の性情に根底し、その作用は社會の組織を貫徹するのであるから、今科學と哲學とを此の世より取去らうとするならば、人間の生活は全然一變して仕舞ふに違ひない。されば吾人の知り得る限りに於て、現實なるものは自づから科學と、哲學との影響を受けて居る所の現實である。なるほど個人々々に就て言へば科學や、哲學の嫌ひな者もまた解らぬ者もあらうが、併し其の人とても現在生活する以上は、決して科學や哲學の影響を離れることは出來ないのである。

此處まで論じて來れば、神の概念が實際生活の要素

となつて居ることに就て、多くの言葉を費す必要はあるまい。僕は素より具體理想主義者である。從つて自分では生活の統一に神の概念を持つて來る必要を少しも認めない者であるし、又世人が神の概念に依つて生活を統一しようとする時に、往々弊害の伴ふことも知つて居る者である。併し神の概念が抽象であるか、具體であるかは、全くそれを用ふる當人の理解と、情操とに依るのである。先に引照した文句の中で泡鳴氏が非難して居る樣な事實は、全くないとは云はれないが、併し是れは神の概念が抽象的となつて居る場合に限るので、それが具體的となつて居る場合には決して斯かる弊害はないのである。

僕は如何なる概念でも當面の目的を助長するやうに働いて居るのを具體的と云ひ、それを阻害するやうに働いて居るのを抽象的と云ふのである。若し神の概念なるものが先きの理想を本として段々に造られ、生活を統一する他に目的を有たぬものならば、其れに依つて實際の生活の意義と、價値とを增して居る人は、具體的に神の概念を使つて居る人であるが、それに反して實際の生活の勢力と圓活とを減じて居る人は、抽象的に神の概念を用ゐて居る人である。前者は神の概念と實際の生活とを一元的に調和し、後者は是れ等を二元的に分離して居る。實際には神の概念は、兎角それが餘りに廣汎であり、不定であるが爲めに、實際の生活以外に在る別種の存在又は勢力と誤解せらるゝ恐れがあるが、併し何人に於ても必ず然うであると云ふことは言はれない。現に神の概念に依つて善く生活を統一して居る者もある。而して斯くして居る者にあつては、神の概念は即ち現實の一要素である。

どうも泡鳴氏は學殖の菲薄なると、反省の膚淺なると、鑑賞の偏狹なるとの爲めに、氏は現實的、具體的なることを標致しながら、其の實は殆んど最も古風な形而上學者も三舍を避けるほどに抽象的、非實的に陷つて居る。此の缺陷は氏の文章を讀みもて行く中には、僕を更へるも猶ほ數ふるに遑あらざるほどに重疊錯出するのであるが、茲に氏がしたり顏に現實を精練しようとして、反つてそれを不具なるものとして居るのは、其の一例に過ぎぬ。氏は「若し神と神の力とがあるもの

なら、それは自分以外ではないと云ふのだ。」と宛も何か一大發見でもしたやうに言つて居るが、如何なる時代に於ても神は人間の經驗の中にあつて、經驗を構成し、輔佐して來た一つの要素であつたと云ふ事實だけでも、人間を措て外に神のなかつたことは明かである。嘗てウエルテルは吾は神に非ずやと云ふ疑問を發して居る。人生の性質と、範圍との明かでなかつた當時に於ては、或は大膽なる疑問であつたかも知れぬが、今日吾人より見れば是れ以上平板にして痴鈍な疑問は尠い。吾人は吾人の經驗を統一するが爲めに、神の概念を創設するだけでも、人間は神であることが明かではないか。否な人間は神以上の者であると云ふことは明かではないか。

然し人間が神を發見し、或は創設する事實に就ての一層意味ある問題は（少くも過去の時代に於ては）、何故に人間は神の概念を創設し、而してそれが自己以外に存在して自己の運命を支配する一大勢力と想像することを必要として居つたかである。此の事實を心理的に、且つ社會的に、委しく說明することは此處で僕の企てようとする事柄ではないが、一口に言ふとそれは先に僕が生活の二大要素として擧げた理想と嗜欲との關係が、今日ほど明白とならず、兩者を互に反抗するものと認めた結果である。詮り支配するものと、支配さるゝものとは同一物の二側面であることを悟らずして、兩者の關係を遠ざからしむれば、しむるほど、支配する方に一層の威力を與へ、支配さるる方に一層の從順を與へると認めた結果、其の間に一種の二元觀を立てるに至つたのである。昔より少くとも一部の思想家の中には煩惱即菩提、或は世界即神と云ふやうな宣言はあつたのであるが、之は唯だ漠然たる希望或は信仰として存して居つたのであつて、是れ等の要求の眞の意義の解つて來たのは、比較的に近世のことである。併し今日に於ては、是れ等宣言の事實は、時々刻々の行爲や、實驗やに依つて、最も明瞭に證明せらるゝこととなつた。今日では何うして煩惱即菩提でなく又た世界即神でないと考へられた時代があり得たかと怪しまるゝやうになつた。

併し人間は最も多く經濟（ローオブエーコノミー）の法則を採つて生存を圖ろ

者である。されば過去に於て經驗を構成するに必要なる理想と嗜欲とを二元と觀る所の二元觀を創設し、それを利用して行くのには相應な理由と便宜とがなければならない。苟も人間を遺憾なく說明しようと志す人は、此の事實に對つて聰明にして、正確なる解釋を與へる義務がある。

一致がなければ相違のある譯はない。靜止が運動の一變形に過ぎない如く、相違は一致の一樣式に過ぎない。されば神と世界とを相違するものと見て居つたのは、詮り其間に或る種の一致を認めて居つたのである。總ての協同は合議より成り立つのであるが、其れが討論の方法に依つて爲さるれば一元的となつて現はれ、威力に依つて爲さるれば二元的となつて現はるゝのである。而して昔、社會に制裁も弱く、統一も少なかつた時代に於ては、合議よりも威力による方が、遙かに機宜に適した措置であつたことは、歷史哲學に於て知識と見識とを有する者の等しく承認しなければならぬことゝ思ふ。斯かる理由で古代の人は神の概念を生活統一の要具として居つたのである。

されば泡鳴氏が『耶蘇が「野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡がざる也」と云つたまでは詩的だが、「神は……斯くよそはせ給へり」と付け加へたのは蛇足である。』と言つて居るのを見ると、如何に泡鳴氏が歷史上の感覺と、社會上の理解と、哲學上の見識とを三つながら缺いて居るかゞ分かる。神は斯くよそはせ給へりと基督が言つたのは當時の人情を根底として、最も善く、最も美くしく、經驗の意義を彼れ等に說明する方法であつたのである。此の句に依つて先きの『野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざる也』と云ふ句に包まれた意義が始めて發揮されたのである。現代に生活する吾人に取つては、宇宙萬有の意義を理解するに、この最後の句は無用であると思はれよう。否な、有害であるとも思はれよう。併し宇宙萬有の精髓は神であつて、神を取去つた後の宇宙萬有は只だの形骸に過ぎぬと觀じて居つた當時の人士には、この最後の句は其れに先つ句に點睛の功を致して居るものと取られたのである。詮り彼等には『野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡がざる也』

だけては不完の命題であつたのであつて、彼等は自然に之が歸結を期待して居つたに相違ない。夫れが「神は‥‥斯くよそはせ給へり」に依つて、始めて完成されたのである。この場合に神は不思議に萬有に即せず、亦た萬有より離れず、萬有の外にあると同時に、亦た萬有の內にあつて、萬有の意義を完成し、萬有の志向(インテント)を完成して居つたのである。されば此の文章は吾人には總合斷定であるが、當時の人士には分解斷定（僕は總べての斷定は悉とく總合斷定であるとの意見を以て居る考であるが、玆には暫く便宜の爲めカントの分類に從つて置く）であつたのである。キリストは最後の句によつて其れに先つ句に包まれて居つた意義を抽出し闡明して、新たに造化の眞と美とを味はしめたのである。

十二　トウマス・カアライルの十九世紀思想史に於ける功過。

此處まで泡鳴氏の見解を論じて來た僕は、最も自然に次の項目に移ることが出來る。それは即ち前に豫告した通り、僕と泡鳴氏とは人生は單一のものであつて分離すべきものでないと宣言しながら、僕が之を作用的に解釋して居るに反して、泡鳴氏は之を機械的に解釋して居る、其れが僕と泡鳴氏との見解をして非常なる相違を來さしめて居るのであると云ふことに就てゞある。

昔トウマス・カアライルは當時英國に於て宇宙の組織の說明には機械論行はれ、人間の性情の說明には分子說行はれて、宇宙は機械の運動と化し、人間は分子の集合と化して了つた時代に於て、當時彼れが稍空漠なる併し豐贍なる暗示を含める獨逸の超越主義より學んだ所の宇宙觀と人世觀とを以て一度分割せられ、粉碎せられた宇宙と、人生とに再び目的と統一とを輸入することを努めたのであつた。之を達するに、彼は總ての經驗を區劃し、分別する所の見解に反對したのであつた。其れ故に、彼は重學より心理學に至るまで、經驗を支配するに區劃と分別とを用ゐる一切の科學に反對しようとしたのである。

當時の人士に對つて、新らしく目的と統一との意識を與へたカアライルの功績は十九世紀の思想史上に決して沒却すべからざるものであるが、併しカアライル

は當時斯樣な學問を要求する社會の意義を知らず、從つて斯かる學問其物の意義をも知らなかつたのである。當時斯かる學問に從事して居つた學者の多くが、唯だ時代の好尙に從つて、殆んど沒反省的に斯かる學問を盲追して居つたことは事實であるから、カアライルの抗議にも確かに一と通りの理由があつたのであるが、併し是れ等の學問と、その研究法とには、彼れ等の想像することの出來ない意義と價値とが含蓄されて居つたのである。

生活は素より單一なものである。併し豐富なる生活をするには一つの感官より多くの感官が分化しなければならず、又た一つの欲望から多くの欲望が分化しなければならないのである。是れ等の感官と、欲望とは、共にそれが根底たる一つの欲望や、感官より出たのであるから、假令分化した後と雖も、同一の根底に立ち、同一の目的に向つて動いて居るのである。されば經驗を能く理解するが爲めには、是れ等のものを、識別して分離せざると同時に、融通するも混同せざることが大切である。斯くして人間の生活が段々に發展するに隨つて、一方に於ては其の分化を增すと同時に、他方に於てはその統一を增して來るのである。されば眞に人生を理解するが爲めには、其の分化の樣式に注意し、又た其の統一の精神を力說しなければならないのであるが、過去に於ては是れ等の二側面は二つの見地に依つて全然分割されて了つたのである。即ち宗教や形而上學は統一の方面をのみ力說し、常識や科學は分化の方をのみ力說したのである。勿論是れ等二つの活動の孰れも互に他のもの、存立を假定して、而して自己の職分を定めて居るのであるから、社會的に見れば、共に協同して居るのであるが、それに從事する人士は、自家の從事する活動の意義を十分に理解せずして、或は分化を容れざる統一を主張し、或は統一を許さゞる分化を主張したのである。事實として十八世紀より、十九世紀の上半に亘りて、科學の威力に眩惑して、科學の宣言を妄信し、科學を以て全く統一を許さゞる分化を主張するものとした者も多く在つたのである。さればカアライルが全力を奮つて、是れ等の人々の見解に反對しようとしたのには多くの理由はあつた。併しカ

アライルは又其れを爲ようとして、他の極端に陷つた傾がある。謂りカアライルの缺陷は多と一と、分業と統一と、確執と協同とは、同時に存在するに非れば、同時に廢滅しなければならぬと云ふ一大事實を沒却して居つたことである。如何にして此の奇異なる性質を有する經驗を完全に、且つ圓滿に認識し、支配することが出來るかと云へば、其處には唯だ一つの方法しかないやうに僕には見える。其れは、即ち經驗の總てを作用的には識別するが、實質的には分離しないと云ふことである。勿論當時の科學者も斯かる見解の成立ち得ることを知らなかつたのであるが、カアライルも其れを知らなかつたのである。されば科學者は經驗を實質的に分離して了はうとするし、カアライルは之を實質的に混同して了はうとしたのである。併し其樣なことを行つては何ちらも經驗を統一するに何の效果もなかつたことは明かである。而して泡鳴氏の所爲は頗るカアライルの其れに似たるものがある。

十三　古代人の活動の性質に關する泡鳴氏の誤解

泡鳴氏が統一を尊び、合致を重んじて人生の眞意義を其處に現はさんとして居るのには、僕とて之に反對すべき理由は毛頭ないが、併し彼の思索と、鑑賞とが機械的なるが爲に、統一を尊ばんとして却つて渾沌派を尊び、合致を重んぜんとして却て混濁を重んずる樣になつて居るのは如何にも笑止千萬と云はねばならぬ。眞の統一は分業の行れる處でなければならぬし、眞の合致は確執の存する處でなければならない。併し泡鳴氏は『分業は人間縮少の基である、分化は人生墜落の初めてある。』（日本古代思想より近代の表象主義を論ず頁二〇）と疾呼して頻りに社會から言ふと、比較的に分業の少く、個人から言ふと比較的に確執も稀れてあつた我が國の古代人の經驗や、感想が吾人に取つての模範であると云ふやうに說いて居る。併し是は氏が歷史學と、社會學と、心理學とに於て少しも知る所なき過失より自ら來つて居る所の誤謬である。氏の考へる如く徒らに熱烈なる經驗を得るのが人生の極致であると云ふことには僕は反對するが、假りに泡鳴氏の見解に從つて、其れが人生の極致であるとするならば、氏の渇仰

する我國の古代人の經驗は決して氏が想像する如く熱烈なるものではなかつたのである。彼等には反省なく、煩悶なく、苦鬪なく、衝動は直ちに實行となつて現はれたのである。隨つて彼等の行動に對する意識は常に低度に止まつて居らなければならぬ筈である。氏の讚嘆して止まざる智、情、意の合致も、詮り彼等に於ては、反省と、煩悶と、苦鬪との起る場合の少なかつた結果である。泡鳴氏が彼等の生活は、吾人の生活よりも熱烈であつたと言ふことの誤謬は、猶ほ感官の分化せざるアミイバの生活が、最も發達したる感官を有する人間の生活よりも强烈であるとする誤謬と同一である。

暫く本論に關係あらしめんが爲めに、古代より今代に至るまで個人及び社會の活動が經過し來つた樣式を三つに分けて見ると、上古の人間の活動は渾沌であり、中古の人間の活動は分裂であり、最後に今代の人間の意識は統一であると云ふとが言へる。而して渾沌は未だ分裂を經驗せざる前の狀態であつて、統一は既に分裂を經由した後の狀態であるから、兩者は或は其の形體に於て類似する所があるにしても、其の精神は全然別樣である。然るに泡鳴氏は是等の二つを同一のものと見做すのである。若し單に外形の相似たるが爲めに、此の二つを等しく一元的と呼ぶならば、前者は素朴的に然うあるのであつて、後者は反省的に其處に到つたのであると言ふことを忘れてはならぬ。素朴的の一元觀と、反省的の一元觀との差異は非常なものであるが、其の主なる點は前者の生活に對する意識が微弱なるに反して、後者の生活に對する意識は强烈なる所にあるのである。古人は善惡の木の實を食はぬ前の人間である。今人は既に其れを食つた後の人間である。今人は如何に古人の境遇を羨めばとて、決して再び彼等の狀態に立返り得るものではない。併し泡鳴氏の思惟する如く、强烈なる意識を發見することが、人生の極致であるならば、其れは古人の生活に於て發見せられずして、唯だ今人の生活に於てのみ發見せらるゝものなることを僕は玆に斷言する。

氏は『自然主義的表象の生活は、既に僕等の祖先がやつて居たのだから、今度は、この現代に於て、之を詩に實現しようと云ふのである。』（日本古代思想より近

代の表象主義を論ず（頁三九）と言つて居るが、是れは如何にも尤なる次第である。泡鳴氏と雖も何故に現代に於て、吾々の祖先が實行した通りの生活が、其の儘、直ちに社會に實現さるゝことが出來ず、纔に詩に依つて髣髴せらるゝに過ぎないかの理由を知つて居るであらう。詮り現代に於ける人間の生活は、極めて複雜にして亦た多岐であるから、到底古人の生活が用ゐた如き素朴にして單純なる方法では統一することは出來ないが、併し詩は人世の全體を寫すものと世の詩人等が想像して居るに拘らず、其實、詩は其の小部分しか寫せるものではない。唯だ其れが用ゐる表象の手段に依つて其の小部分を寫しながら、人をして其れが全體であるかの如き幻想を起させるものであるから、現代に於て擬古的方法に依て古代を模寫し得るものは獨り詩のみであると見たのであらう。併し兒戲に等しき人工に依つて、社會の片隅にあつて、經驗もなく、見識にも乏しき詩人達が、形式的に古代の生活を模倣しても、それが社會全體に取つて何れだけの効力があらう。泡鳴氏は刹那に萬象を攝取するものとして、頻りに古人の生活を羨やむのであるが、併し僕から見ると分化と、分業とに依つて、生活する人こそ眞に刹那に萬象を攝取して居る所の人である。分化と、分業とは統一を傷け、合致を破ると云ふのは全く事實を無視して居るのであつて、分化と分業とがあつて始めて統一は造られ、合致は成さるゝのである。

泡鳴氏は感官の發達した動物の生活に於て、眞の統一が行はれて居ると思ふて居るのであるか。或は感官の發達せざる動物の生活に於て眞の統一が行はれて居ると思ふのであるか。職業の分立する社會に於て眞の協同が行はれて居ると思ふて居るのであるか、或は職業の分立しない社會に於て眞の協同が行はれて居ると思ふのであるか。

十四　強烈なる生活は分化と分業とを竢ちて初めて得らる

泡鳴氏の如く刹那に萬象を攝取することを理想の生活とすることは大した誤謬ではない。併し泡鳴氏は此の命題の意義を唯だ機械的にのみ解釋することを知つて、作用的に解釋することを知らないから、遂に是の

貴重なる命題をして無意義のものに終らしめて居る。人間が生活の欲望を充足する方便は極めて數多いのであつて、大抵の人に取つては、其の總てを大抵偏頗なく中正に充足して行くことに依つて、幸福は得らるゝのである。併し事實として、人間は刹那毎に是等の無數の欲望を充足することの出來るものではない。されば今は此れ、次には彼れと云ふやうに、個々の欲望を充足して行くのであるか、訓練せられた生活にあつては、其處に全體を支配する方針と目的とがあるから、自我は前後、左右に起る欲望を貫徹して居つてこゝに總べての欲望は太體に過不及なく現はるゝのである。

又た個人と社會との關係に就て言つて見れば、個人の意義は社會生活に依つて始めて完全に實現さるゝものであると云ふことが謂へる。若し個人が孤獨に生活しなければならぬものであるならば、個人は生活する爲めに種々の活動を必要とするから、其の中には無論彼れに適するものと、適せざるものとがある。されば斯かる狀態にあつては、彼れは極めて不完全に自己の欲望を充足することしか出來ないであらう。併し個人が一度社會の系統に入る以上は、互にその有無を交換し、その長短を補益することが出來るから、人間は分業に依つて始めて最も完全に、自己の欲望を充足することが出來るのである。斯く心靈の分化と、職業の分立とに依つて、人間は始めて統一あり、目的ある生活を營むことが出來るのである。

氏は心熱の意義を説明して『自己が最も眞摯になつて居る時は、自己の一部〱でない、全體が一つに燃えて居るのだから、その時の作物に感情の熱ばかり現はれる筈はない。智情意一體の心熱が現はれるのだ。云ひ換へれば、熱想的自覺である。かうなると、宗教は意力、哲學は知力、藝術は情で行くといふ樣な區別は、離れにても幼稚なことが知れよう。』(自然主義的表象詩論、頁一三八―一三九)とさも新たに眞理を發見したかの如く得意になつて説いて居るが、今となつては人間の一切の感想と、一切の思索と、一切の行動とは全人の活動であること位を知らぬ者は一人もない。併し泡鳴氏が滿足して居るやうに見えるよりも、人間の云爲に關して、一層正確に其の表現の異る側面を觀、

或はその經過の異る段階を知らうとするには、必然に少しても相違する要點に依つて、特種の形相を發見し、其れに特種の名稱を附して、暫く特種の存在と假定することが必要であるのである。斯くして常識に於ても亦た學術に於て、智、情、意の三つの概念と、言葉とは生じ來つたのである。されば智、情、意を全然何等の關係なきものと觀るに至つては勿論誤謬の甚だしきものであるが、之が全精神の全活動であることを知つた上は、その特徴に隨つて、おの〳〵を識別することは肝要である。人間が感想に、思索に、行爲に活動する場合には、何時でも全人は全力を以て動いて居るのであるが、經驗の種類に隨つて、比較的に、智の側面が顯著に現はるゝ場合があり、比較的に情の側面が顯著に現はるゝ場合があり、又た比較的に意の顯著に現はる場合がある。一つの具體的經驗も亦た具體的行動も必ず智を以て始り、情を以て熟し、意を以て終るのであつて、是れ等の三時期を合して、玆に始めて經驗でも、行動でも一つの完結を告げるのであるが、倘ほ一層嚴密に言ふと、智、情、意は同時に併存するが、同時に終始せざる活動であつて、智が終る時には、情が酣であり、意が始るやうに動いて居るのである。喩へば友人の訃音に接すると云ふ單一なる經驗は、忽ち其れに對する反應を呼起すが、其の反應は智、情、意より成立つのである。反應は始、中、終を通して、一つの目的を完結する活動である。初めには、其の訃音の意味を理解しようとする態度が顯はれる。是れは即ち智である。中頃には其れが了解されるや否や、その價値を鑑賞しようとする態度が顯はれる。是れが即ち情である。その價値を評價する結果として後に起るのは、其の出來事に對して己れが實行を決定せんとする態度である。是れが即ち意である。

人間は如何なる場合に於ても是の三つの段階を綜合して、始めて一つの具體的經驗は完結するのである。されば三つの側面、或は段階を認めたからとて、決してあらゆる感想も、思索も、行爲も全人の發現であると云ふことを妨げない。泡鳴氏の言ふ如くにすると、豐富なる生活を營むに必要なる智、情、意の分化は一切許せないことになる。併し前にも述べた通り、眞の統一

は分化を俟たなければならないことを知らなければならない。昔宇宙が一つの體系を爲して居ることを嘆美しようとして、天を仰いで『萬物は一なり』と叫んだ學者が在つたが、泡鳴氏の所爲も頗る之に類するものがある。吾人が直接に必要とするところのものは個々の事實、個々の經驗である。唯だ一層善く其れを利用し、或は鑑賞するが爲めに、其の間に統一を索むることが大切になつて來るのである。併し統一を求むるが爲めに、個々の經驗や、事實やを破壞して、平然たる者は統一の必要を叫びながら、未だ一度も人生に於て、如何に統一を必要とする動機と、理由とが發生し來るかを考へたことのなき者である。

十五　靈肉合致は既成の事實なり

泡鳴氏は頻りに靈肉一致を叫ぶ所の論者の一人である。氏が今靈肉合致を如何樣に理解して居るかは、次の引照に依つて少しく窺はれるであらう。

『肉靈合致の自然に來給へと勸める。肉靈合致は斷定ではない、理想てはない、刹那的自我の感ずる事實てある。(肉靈合致の事實、頁三三三)

『然し、僕等が理想を排して現實に向ふのは、精神を殘した物的を取るのではない。現實の物に肉靈合致の自然を見るからである。』(仝上)

『刹那主義を體現する藝術は人生の一部または手段ではない、肉靈合致的人生の全部または內容である』。(肉靈合致の事實、頁三三七)

人間は素と其の生存を持續するのが唯一の目的である。併し人間にあつては、生存は精神によつて肉體を支配することに依つて始めて得られる。されば人間の欲望は悉く身體を保存する爲めに精神が起す欲求に過ぎないのであるから、人間の欲望にして一つとして一面身體に屬し、一面精神に屬しないものはない。然し過去の或る時代に於ては、人間の欲望を二分して、一方を肉とし、一方を靈として、前者は卑むべく、後者は尊ぶべきものとしたのであつて、當時の形式的なる敎訓に從ふと、なるたけ靈を以て肉を壓するほど高等な生活が出來るとされて居つたのである。勿論人間としては其樣なことの出來る筈はないし、又出來ても爲るのは甚だ惡いことであるから、何時の時代と雖も、眞面目に其樣なことをしようとした者はなかつたのであるが、併し不思議にも、信仰や學說としては、斯かる不自然にして不合理なる生活の論法が今日に至るまで社會に全く其の痕跡を絕つたとは云へない。之は人

間の欲望を形作る理想と嗜欲との關係が充分に明かになつて居らなかつた遺物であるが、實際に於ては靈肉合致は、唯だ如何なる人も然うしなければ一日もその生を保つことが出來ないと云ふ極めて簡單なる理由に依て、案外に行はれて居つたのである。泡鳴氏は尙ほ人間の普通の生活は、學者の學說よりも大抵の場合に於て賢いと云ふことを學ぶの必要がある。靈肉合致は人類が始まつて以來、常に合致せなければならないが爲めに合致して居つた極めて普通にして平凡なる事實である。

吾人は言語に捕へられてはならない。人間の日夜從事して居ることは、行住、坐臥悉く靈肉合致であり、靈肉合致でないものはないのである。唯だ過去に於て人間が比較的に自己の性情の眞相を理解せず、從つて生活を統一する優れた方法の發見せられざる時代に於て、學說及び信仰として靈肉反抗の假定が設けられたのである。勿論その當時に於て、斯かる不完全なる學說、又たは信仰が、生活を統一する方法として案出せられ、又たそれが案出せられた曉に、多大の勢力を擅世紀間に亘つて有つて居つたと云ふことには多くの意味はあるが、其の間でも學說や信仰より一層賢き實行は常に靈肉合致を體現して居つたのであると云ふ一大事實を閑却してはならぬ。

生活を持續すると云ふことを唯一の目的として居る人間の活動は、それが感想であつても、思索であつても、將た行爲であつても、一つとして靈肉合致の發現でないものはない。併し部分と全體、理想と嗜欲、統一する側面と、統一さるゝ側面とを能く調和することの出來なかつた時代に於ては、前者を靈と名け、後者を肉と名けて、共に實質的に存在し、實質的に反抗する二つの元素と認めたのである。而して人間の努力はなる丈、靈に由つて肉に打勝つことに在ると信じたのである。其樣な考へ方は、一層善く人間の性情を知つて來た吾人から觀れば、如何にも粗笨にして悖理なものであるが、當時に於ては、之より善き方法はなかつたのである。素より人間は斯かる自然の理に逆行した、學說や信仰に全然服從することは出來ないのであるが、當時に於て理想と嗜欲との協同を成立たしむる

方法とては、是れ以外になかつたものとすれば致方はない。當時の人士は此の學說又は信仰は人間に無上の方針を與へるものとして受取り、實際に其の標準に憑據して生活することの出來ないのは、人間の薄弱より來るのてあると考へたのてある。

僕は人間の生活は既に實際に於て靈肉合致てあるから、理論に於ても亦靈肉合致てなければならぬと信ずる。併し眞の意味に於て靈肉合致を成立たしめようとするには、泡鳴氏の唱道する方法ては靈肉は合致せずして反つて分離することを認めるのてある。靈と謂ひ、肉と謂ふも（前に述べた通り）部分と全體との關係に過ぎないのてあつて、人間の性質は（是れも前に述べた通り）反省と努力とを用ゐないならば、部分の嗜欲は全體の理想に依つて支配されないものてあるから泡鳴氏の道ふ通り如何に人間の全體を一時に燃さうとしても、唯だ刹那々々の發動にだけ放任しては、却つて肉は靈と離れてすふと考へる。斯く觀じ來ると、泡鳴氏の靈肉一致に對する見解と、方法とは少しも人間の本性に基かざる一個の空談に過ぎないことが明かてはあるまいか。

十六、利他は利已の變性にあらず

次に僕は先に僕の見解と泡鳴氏の見解との相違點の最後のものとして數へた所のものに遷つて、之が批判を試みて見ようと思ふ。其れは他てもない。即ち僕と泡鳴氏とは共に個人に取つて價値あるものは、唯だ彼れの欲望の滿足のみてあるとしながら、僕は之れを有機的に解釋するに反して泡鳴氏は之れを分子的に解釋する所から、茲にも僕のと、泡鳴氏とのを全く異る二つの學說として了ふと云ふことてある。岩野氏は、氏の所謂自然主義的表象詩の特色の一つとして、

『そこに人間の生慾が一刹那の餘裕もなく、存在の危機を守つて居る狀態てあるから、博愛や慈善を說いたり、『神は愛なり』など歌つたりそんなのんきなことはして居る餘地がない。そんな餘地が一部出來れば、一部だけ自己の眞摯をゆるめたことになる。自己生存の大危機に臨んて、他を救ふと云ふ樣な考が出ると思ふのは、僞善てなければ、心の箍の拔けたものてあらう、酒精に水を入れると稀薄になる、眞摯な作用に非個人主義の要素が這入るに從つて、熱烈の度が不足になつて行くのだ。（自然主義的表象詩、頁一三八）

と言つて、彼れの個人主義が如何なるものてあるかをほのめかして居るが、是の趣意は國家人生論に於て

一層綿密に、且つ明確に敷衍せられて居る。

正直に言ふと此の國家人生論は確かに新自然主義全篇を通じて、最も優秀の言論である。氏が海老名牧師の所説と、加藤博士の所説とを比較して、加藤博士の意見の遙かに海老名牧師の意見に優れて居るのを説く所、確かに彼れが見識の平板ならざるを見るべきである。併し僕より見れば、茲にも彼が事實を無視し、徒らに空想に依つて具體的たるを急ぐの餘り、反つて彼れの個人主義をして、極めて抽象的とならしめて了つた。氏は加藤博士の意見を批評して『宇宙は自己のみの存在と自覺してこそ初めて熱烈な精神が出來るので――そこに至ると、博士の所謂變性的利他心をさへ許す餘地はなくなるのだ。これは博士の立ち場と僕等の自然主義との大いに違つて居るところであらう。』（國家人生論、頁一二三九）と言ひ、又た『僕等は肉靈の合一不離を説くよりも一層進んで、たゞ自己一體を認めるばかりだ。この境にあつて、加藤海老名兩氏の論議を比較すれば、海老名氏のからよりも、加藤氏のから發足する方が、まだしも人生の實質、生命に直接に接觸し易いのだ。』（同上、一二四一）と言つて居る。僕は勿論加藤博士の所説にも缺陷はあるが、泡鳴氏の所説にも一層大なる缺陷があると思ふ。

個人の一切の所爲は彼れが欲望を滿足せしむる爲めであると云ふことは、今更めて泡鳴氏に聽かずとも、現代の倫理觀に於ては殆んど一つのツルイズムとなつて居る。善人と、惡人とに別なく、愚者と賢者とに論なく、凡そ人間の行爲なるものは、皆な當人が自ら滿足を得るためでないものは一つもない。利己の行爲と、利他の行爲と、物を與ふる行爲と、物を盜む行爲と、人を殺す行爲と、人に殺さるゝ行爲と、悉く當人が其れに依つて滿足を得るからでないものは一つもない。昔盜跖は飴を以て鍵を盜むの器となし、柳下惠は其れを以て母を養ふの資となしたと言はれたが、何ちらもそれに依つて各自己の滿足を得たことには毛頭の相違もない。されば泡鳴氏があらゆる行爲の意義を自己の滿足以外に索めないことに對して、僕は何等の異議も異見もない者であるが、唯だ僕が泡鳴氏に尋ねたいことは、泡鳴氏は社會生活の立場より種々の所爲に與へられ

た價値に相違あることを承認せらるゝか何うかと云ふことである。若し氏にして價値の相違を認めないと言ふならば、氏は確かに社會に現存する事實を無視して居るのである。若し認めると言ふならば氏は如何にそれを說明しようとするのであるか。

行爲なるものが、悉くある個人に依つて爲されなければならないことは言ふまでもなく、又た自己の滿足の爲めに爲されない行爲の一つもないことも言ふまでもないが、或る行爲は他の行爲よりも社會的に一層の價値を有することは事實である。是の標準は那邊より生じたものであるか。社會的に言へば、他人の幸福を增進するやうな行爲は價値ある行爲とせられて居るのであつて、其れに反して他人の利益を阻害するやうな行爲は價値なき行爲とされて居るのである。價値ある行爲をなすと、價値なき行爲をなすとは、多くは各人の天性に由つて定まるのであるが、併し反省と努力とに依つても養はるゝことのあるのは事實である。加藤博士の利他が利己の變性であると說くのは、此の反省と努力との經過を指したものであらう。併し加藤博士の出立點には、僕か容易に看過すべからざる謬見が伏在して居る。

加藤博士は進化論を奉ずる人であるが、利他心の起原を人間が過去の生活に依つて養ひ來つた遺傳性に求めないのは實に不思議と言ふべきである。僕は理論に於ても、亦た事實に於ても、純然たる利己は如何にしても決して利他に變ずることは出來ないと信ずる。されば實際は利己が利他と變ずるに非ずして、利他となる要素は利己となる要素と等しく始めより人間の性情の中に潛んで居るのである。是れは社會生活を營んで居る個人の利益は、最も廣い立場からは、常に他人の利益と結び附いて居るから、滿足と云ふ點から見れば勿論自己の滿足であるが、各人は本能的に他人の苦痛に同情して之を自己の苦痛とする特性を有つて居ると觀ることが出來る。まだ自他を區別する意識も十分に具はらない孩兒が、彼を取り圍く人々の泣くを見て悲み、笑ふを見て喜ぶのは、全く本能より來て居るのであつて、決して經驗に依つて己れの幸福と、他人の幸福とを同一視して居るのではない。併し是の孩兒が他

人の苦樂に同情し得る可能性は、後になつて彼が社會に成長すれば、利他心と名けらるゝものとなる基本金である。それ故に、僕は生活の始めには利己心も利他心もない。併し兩方になるものは始めから漸ほ分化せられずに存在して居ると言ふのである。

勿論發展の徑路より見れば、生存の必要上、狹義に於ける利己心は狹義に於ける利他心に先立つて實現するやうに見える。併し實は經驗の擴充と反省の增長とは、段々に自己の幸福と、他人の幸福との關係を追究して利己心と利他心とは互ひに他を劃定して行くのである。去れば利己と、利他とは勿論二元ではないが、併し利他は利己の變性したものでもない。自己の滿足と云ふ一元の下に確執を保つ二相である。

個人は社會生活を爲すに隨つて、(而して社會生活を爲さない個人は實在に非ずして抽象である)、自己の意志と他人の意志とは依立するものであり、自己の利益は他人の利益と關聯するものであるから、自己の意志を實現する道は、同時に他人の意志を實現することに在り、自己の利益を增長するは、同時に他人の利益を增長するにあることを知つて來る。されば如何なる人と雖も、目的を有つて生活する者は、必然に自己以外に自己に類する目的を以て生活する存在者のあることを知るに至らなければならない筈である。此場合に於て泡鳴氏の言ふ如く、宇宙間に「たゞ自己一體を認めるばかり」と云ふことは、最も極端なる被催眠者、或は精神病者のやうに行爲の連續と、統一とを失つた人と雖も、到底有つことの出來ない意識である。社會は其處に生活する總ての個人の欲望を悉く充足するやうには造られては居らぬ。從つて各人が彼の意志を實現しようとすれば、必ず他人の意志の實現が之が障礙となることを發見する。又各人が彼の利益を增長しようとするならば、必ず他人の利益の增長が之が防害となることをも發見する。玆に於て讓步と妥協とが生活の一大方針となつて來るのである。

十七、强者と弱者との依立

されば若し泡鳴氏の言ふ所のものを、此處には實質的でなく、單に形容的に解釋して、其の意義を見出さうとしても、次の二つの假定の外には出ることは出來

ない。それは即ち各個人の意志は他人の意志と何等の衝突も起さぬやうに、自己の意志を抑制して、他人の意志を尊重するやうに、十分に社會的に敎育されて居るか、然らざれば、一人か或は少數の個人は、彼等の强大なる意志に依つて、全然他人の意志を抑殺して了つて居るかの何ちらかであらねばならぬ。是等の孰れの場合に於ても、自己の意志に抵抗する他人の意志はない譯であるから、泡鳴氏の言ふとほり『宇宙は自己のみの存在と自覺』することが出來ようが、併し是れは現代に於て成立つて居らない狀態のみならず、遠き未來に於ても、或は恐らく永劫に亘つても成立たざる狀態であらう。僕の考へ得る限り今より幾億萬年を經過すとも、努力と反省とを俟たずして、各個人が本能的に若しは衝動的に彼れの意志と、他人の意志とを自然に融通するやうな性情を取る時代が來るとは思はれない。それと同様に一人の强者の意志が、億兆の衆人の意志を全然抑壓して仕舞ふ時代も來ようとは思はれない。されば是等の假定の孰れも全く歷史の發展と、社會の傾向とを無視した空想に過ぎないが、併し泡鳴氏の語氣に依つて之を觀ふと、泡鳴氏は僕が今實現せられて居らないのみならず、又た到底實現せらるゝ期なしと信ずる社會狀態が、强者の意志の作用に依つて、實現されるとか、或は實現さるべきであるとか考へて居らるゝやうであるから、少しく是れに含まれた誤謬を指摘して見よう。僕は例に依つて先づ此點に關して泡鳴氏の述べて居る所のものを擧げて見よう。

先づ僞善的手段若しくは論結を離れて考て見給へ。個人々々の關係に於て、弱者の存在は必要と思はれない。その不必要な弱者を助けようとか、救へようとか、救濟しようとかするものも不必要なことである。然し世間は兎角その不必要なことにもつともらしい理由を附して、之を行ひたがるのは傳習思想に拘束されて居るからである。社會主義、世界主義、正義、博愛、慈悲、犧牲等の馬鹿らしい觀念はすべてこれから起つて居る。この諸觀念の有害無害はさて置き、根底に於て土臺淺薄なものではないか？宇宙はたゞ强者の足跡を印するところだ、强者の存在が乃ち宇宙であるのだ。人類の存在も强者の權利を維持して行くところにあるのだ、觀じ來れば强者がおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來たのだ。之を一言にして言へば、極端な利己主義、個人主義、否、唯我主義である。加藤博士の說も、冷たい唯物的偏見を去つて、その科學的智識を壓迫して、結晶または蒸餾されたら、やがてこの境地に達すべきものである。(國家人生論、頁二四三)

凡ての人を悉く一と數へ、一以上に數へぬと云ふの

は素と最大多數の最大幸福を目的とする法律が、永い經驗より得來つた無上の格言である。法律の前には弱者病者も一の價値ある者と認められ、強者健者も一以上の價値なきものと認られて居る。斯く見ることが社會の平和と、幸福とを增進する上に最も有効であるのである。なるほど弱者病者は社會に利益を與へるよりも損害を與へる方が多いものならば、社會は斯る者をして存續せしむるよりも、寧ろ滅亡に歸せしむる方法を講じた方が得策であるやうではあるが、併し、強と弱と、健と病とは畢竟するに比較上のものである。乙は己を強者とし、甲を弱者とするであらうが、丙は乙より更に強者たるが爲めに、乙を弱者とするであらう。若し丁があつて丙より更に強者ならば、丙は丁の前には弱者たるを免れない。而して社會に協同の生活を營む者は、無數の關係に於て互に依立し、信賴し、相助するとを努めて居るものであるから、強者と雖も弱者に負ふ所があり、病者と雖も健者に與ふる所のものがある。それ故に人類全體を一つの道義體系と見做すことは各個人の幸福に取つて極めて肝要なことである。是れは人間が社會生活を營むに必須なる根本公準である。此の根本公準を貫かずして、個人の價値に依つて其の存在を尊敬する態度を異にしたならば、各個人の生命と幸福とは絶えず危殆の位置にあらねばならぬ。何故ならば價値の高下は殆んど無限であつて、上には上があり下には下があるからである。乙は甲より價値あるが爲めに甲を虐待するならば、何時か己れも亦丙が己れよりも價値あるが爲めに、己れも丙に依つて虐待せらるゝの日あることを覺悟せねばならぬ。斯かる狀態に於ては、一日も安心して生を營むことの出來る者は一人もあるまい。されば少くとも人間は人類全體を限つて、之を一つの道義體系と見做し、何人と雖も法律の前には一であり、何人と雖も一以上でないと同樣に、又一以下でないと假定することが、各人の幸福の爲めに一番賢い道であるのである。さうすると弱者を助け、或は敎へ、或は救ふことが甚だ必要なる用心となつて來ることが明かであらう。

泡鳴氏は宇宙はたゞ強者の足跡を印する處だ、強者の存在が即ち宇宙であるのだ、と言つて居る。併し是

れは半面の眞理に過ぎぬ。なるほど新氣運を劃し、新制度を創むるには强者、健者の意志だけが其の張本たるかの觀があるが、その實は決して然うではない。如何なる强者健者と雖も、衆人の欲求に背いて、何物をも爲すことは出來ない。たゞ衆人には夫れ〲苦を避け、樂に就く欲求はあるが、其れを實にするに必要なる明確なる意志を缺くが爲めに、强者健者は彼等の欲求を基礎として、彼等に代つて明確なる意志を造るのに過ぎないのである。社會の方針となるものは少數者の意志であつて、多數者の意志は方針となる價値なきのみならず、亦た意志と名けらるべきものさへもないことは事實である。併し少數者の意志の憑據する根底は多數者の欲求に外ならぬ。生を欲する念慮は誰れにあつても同じである。少數の强者優者は彼れ等が多數の弱者劣者に依つて信頼され、尊敬される間は如何なる權威も保たれ、如何なる命令も行はるゝであらう。併し一旦彼れ等の欲求に背いた場合には、强者弱者はあらゆる兵力と法力とを以てするも一日と雖も己れの位置の保てるものではない。是れ丈は實に民主政體に就て謂はれ得るのみならず、亦專制政體に就ても等しく謂はれ得るのである。三軍の師は猶ほ奪ふべし、匹夫匹婦の志は奪ふべからずとは蓋し此事實を說いたのであらう。

論じて是に到ると、立法の根底に唯に威力的要素を認めて、道德的要素を認めない加藤博士と泡鳴氏とは共に大いなる誤謬に陷つて居る者と言はねばならぬ。

十八、哲人政治

併し斯く論ずるが爲めに、僕を凡俗主義の主張者と誤解しては困る。僕は英雄主義に信仰を置かぬと同時に、凡俗主義にも信仰を置かぬ者であつて。僕は詮り政治も、法律も、宗教も、道德も、科學も、藝術も、盡く凡俗の欲求を基礎として、之が統一と醇化とを努める哲人の努力より出來ると觀る哲人主義の主張者である。大體より觀ると、人間が彼の根本性より己れの生活の持續と發展との爲めに企てた一切の事業と、一切の活動とは、悉く哲人主義の精神に依つて支配されて居るのである。哲人主義の可能は必然に二つの要素の併立と協同とを假定する。一つは少數の者は如何な

る事業を計畫するにしても、決して多數の者の希望を本位に置くことを忘れないと云ふことである。も一つは多數の者は少數の者の計畫する事業には時として彼等の智力では理解出來ないことがあつても、常に少數の者の賢明に信頼して行くと云ふことである。是等の二つの要素は、人間の事業のある處には、必ずそれが成分として入り込んで居らなければならない要件である。すると强者の側から見ても、亦た弱者の側から見ても、泡鳴氏の考へる如く極端な個人主義、利己主義、否唯我主義では一日でも維持された社會はないし、又たあるべき筈のものではない。

十九、我が國體は哲人政治の最好模範なり

之と連關して、僕は泡鳴氏が我が國體の特徵に關して述べて居る意見にも大いなる誤解が含まれて居ると信ずるから、それをも序に是正して置かう。先づ氏の意見を紹介すると次の如くである。

『かういふ思想がどうしてわが國體と衝突しないかといふに、わが皇室とわが國民との組織して居る國體は、極端な個人主義と極端な國家主義の甘く融合和解したものであるからだ。相對的個人主義は、自己の權利を主張すると同時に、他人のそれを認めさすのであつて、人類平等などいふ虛僞思想はそこから出て居るのであるが、絕對個人主義は自己の實力(乃ち、權利)以内に何等の假定をも設けないのである。之が最大擴化たる豐太閤の如きでさへ、わが皇室と少しも衝突しなかつた。日露戰爭に例を取つて見ても、わが同胞が國家の爲めに戰死したと云はれる、その眞相は個人個人の本能性の然らしめたものとしか思へない有樣であつた。之を、俗說に從ひ、大和魂とか武士道とかいふ名に當て塡めなければならないものとすれば、その大和魂または武士道なる物は、たゞ個人の本能竝にその無飾活動を云ふに過ぎないのである。』(國家人生論、頁二四四)

『ところが、わが國體は個人が乃ち國家、國家は乃ち絕對個人で、その間に殆ど相對個人の存立を許さない。上一人即ち、最强者でなければ、殆ど何物でもないのである。わが國民はこの哲理を各々自己の本性に體現して身づからも亦絕對個人であると思つて居られるから、そんな特別な國家組織が出來て世界に唯一の國體を殘して居るのだ。』(國家人生論、頁二四五)

若し果して我國に於て甘く統治が行はれ、文明が進んで居るなら、それは決して泡鳴氏の考へるが如く極端なる國家主義と、極端なる個人主義とか融合して居る結果ではない。古風な宗教家や、哲學者か夢想する獅子と小羊とが安全に一つ處に横臥する黃金時代なるものが來た曉は兎に角、現在に於ては極端な國家主義と、極端な個人主義とは必ず衝突するに定つて居る。今

の状態に於ては、本能的には個人の欲求が直ちに國家の方針となることは出來ない。唯だ兩方の反省によつて國家はなるたけ個人の欲求を尊重しようとし、個人はなるたけ國家の方針に信頼しようとすることに依つて、始めて個人の權利は、國家の命令と合體するに到るのである。僕は日露戰役に於て戰死したわが同胞は、本能的にさうしたとは信じない。全く反省の力に依つて國家の意志に合するが爲めに自己のある欲求を抑壓して始めて成就することの出來た行爲であると信じて居る。個人が本能的に己れの欲求を實現して、直ちに國家の意志に適合するやうな時節はまだ却々到來しては居らぬ。人間の性情にして一變せざる限りは其様な時節の到來する期は恐らくないであらう。

僕は我が國體の特徴は、昔より哲人主義の精神の上に立つて來た所にあると信ずる。泡鳴氏は上一人が最强者でなければ殆ど何物でもないと言つて居るが、僕は上一人は最賢者でなければ殆ど何物でもないと信じて居る。若し上一人が最强者であるならば、それは唯だ最賢者である自然の結果に過ぎない。我が皇室の尊嚴は決して武威を以て築き上げられたるものに非らずして、仁德を以て築き上げられたるものなることは、我が國の過去の歴史が優に證明する所のものである。上一人は代々哲人政治の首腦として、最賢者の位置に居られ、萬の臣民の欲求を鑑みられて、其の上に政治の方針を立て、來らせれたのであるし、よろづの臣民は咸な之に信頼して上一人の命令に背馳するやうな欲求を棄てゝ來たのである。斯くして茲に特有なる國體が出來たのである。其れ故に、わが國に於て、若し絶對に權利を有する個人があるならば、それは唯だ上一人だけであつて、他の者は悉く相對の權利しか有つては居らない。

以上の論議で、泡鳴氏の個人主義に對する批評も大體了んだ。之に依つて、讀者は前に僕と泡鳴氏とは等しく個人主義を採る者であるが、其れを有機的に解釋するに反して、泡鳴氏は其れを分子的に解釋する。其れが、即ち僕と泡鳴氏との學說をして、大いに異らしめて居るのであると僕が言つたことの架空でないことを承認せらるゝであらう。

二十、僕の象徴主義と泡鳴氏の象徴主義との相違點

斯く僕と泡鳴氏とは、抽象的には同一なる三命題に依つて、再び表はされ得るに拘らず、具體的に其れ等を敷衍するに及んでは忽ち全く反對の歸結に達する思想を有するからには、僕の學說と、泡鳴氏の學說と、等しく象徴主義と目され得るものでありながら、又だ大に異るものとなつて居ると云ふことは極めて自然のことである。今結論として全體の立場より、少しく僕の學說と、泡鳴氏の學說とが、如何なる體系を取つて居るかを觀察して見度いと思ふ。

世には象徴主義の信奉者と稱して、實際の經驗が、其れの起原と想像せらるゝ無限の本體を暗示することを力說し、斯くすることを實際の經驗を統一するの方便として居る者がある。而して斯る見解を有する人士は斯くすることに依つて、實際の經驗は益々其の價値と尊嚴とを得て來るのであると考へて居るのである。然し斯樣な庭弱にして且つ悖理なる態度を排斥するのは、僕も泡鳴氏も同一である。僕等は等しく、たゞ實際に生活することによつて、生活の意義を發見しようと主張する者であつて、之を外にして生活の意義を發見する方法は絕えて無きことを主張する者である。されば僕等に取つては象徴主義とは生活の意義を發見する爲めに、實際に生活する或る方法に與へられたる名稱に過ぎないのであるが、此に僕のと、泡鳴氏との間には大なる相違があるのである。

今僕はこゝに僕の人生觀及び處世法なるものに就て詳しく述べる遑はない。併し一口に言つて見れば、古來人間が案出した工夫や方針は悉く統一する側面、即ち理想と、統一せらるゝ側面、即ち嗜欲とを整齊して動搖の中に安定を發見するとを目的として居つたのである。併し此の目的を達するのに古來二つの方法が行はれたと觀ることが出來る。一つは動搖の要素を生活より排外し、後に殘れる內容貧少なる靜止の要素のみを摺摭して茲に生活の方法を索めたのである。も一つは動搖する生活を其の儘受取つて、それを統御する方法を索めたのである。前の方法は靜的であつて、其の目的は靜的平衡を求めるに在る。後のは動的であつて

其の目的は動的平衡を求めるに在る。若し讀者をクラヌシズムと呼ぶのが適當てあるならば、後者はシムボリズムと呼ばるゝのが適當てあらう。

人間が内容豐富にして、色彩絢爛なる個々の經驗を尊重するに到ると、茲にシムボリズム、即ち象徴主義は生じ來るのてある。人間は如何にして豐富なる内容と絢爛なる色彩との一部をも傷けずして、何うして己れの經驗を統一することが出來ようか。是れが象徴主義の解決すべき問題てある。僕より觀れば、泡鳴氏が目的として考へて居る强烈なる意識とか、情化したる智力とか云ふものは、其の實、目的に非ずして方便に過ぎないやうてある。而して泡鳴氏の擧げた特色は實際に役に立たうが、或は立つまいが、眞の目的は確かにその先にあるのてある。僕は之を全體に依つて部分を支配する爲めに、部分の中に全體を發見し、過去と未來とに依つて、現在を支配するが爲めに、現在の中に過去と未來とを發見し、又た社會に依つて個人を支配するが爲めに、個人の中に社會を發見することに在ると信じて居る。而して是れは決して如何に意識を强烈ならしめても、或は智識を情化しても、泡鳴氏の如く刹那を抽象的に取り、心靈を機械的に取り、個人を分子的に取つて居ては到底得らるゝものてはない。

生活は動力的のものてあり、作用的のものてあり、又有機的のものてある。されば其の意義を抽象的の刹那の中に、機械的の心靈の中に、分子的の個人の中に求めようとする者は、皆な失敗に終らざるを得ない。之に反して刹那を具體的に觀、心靈を作用的に觀、個人を有機的に觀る人は、正直に、嚴肅に、大膽に、刹那と、心靈と、個人とを觀察すればするほど其處に、刹那は自ら過去と未來との關係を以て、心靈は種々の作用を以て、個人は社會の意義を以て顯現するのてある。既に是等のものゝ中に是等の關係は豫め包含されて居るのであるから、觀察者は唯だ其れを發見し、識別しさへすれば宜いのである。

二十一、僕は本論に依つて去年以來の懸案を解くを得たり

今日自然主義を宣傳し、或は辯護して居る文士の數は十指を折るも尙ほし盡されぬほどてあるが、僕の見

る所では自然主義の意義を體認し、悟得して居る點に於ては、岩野泡鳴氏を以てその随一としなければならぬ。されば昨年の八月僕が彼の『我國に於ける自然主義を論ず』と題する論文を公にした時、僕は夙に岩野泡鳴氏を批判の對象の一つ――而も主なる者の一つ――としようと心竊に期して居つたのである。當時不幸にして僕の友人と、僕とが苦心したに拘らず、適當なる材料の得難かりしが爲めに、遂に泡鳴氏の把持する自然主義の價値を窺ふに及ばずしてやんだのであつた。必然の障凝からとは云へ、斯くして僕が初めより多くの興趣を感じ、多くの思慮を與へて居つた泡鳴氏の人生觀及び藝術觀に一言も説き及ぶの機會を有たなかつたことは、今でも之を顧る毎に、猶ほ衷心多少痛恨の情無きを得ない。

然るに昨年十一月中（と覺ゆ）、泡鳴氏は氏が最近二三年間に渉つて、時々新聞、或は雜誌に公にした論文を集め、之に『新自然主義』の名稱を附してしたものを僕に贈られたのである。僕は斯書に依つて、始めて氏が懷抱する自然主義の價値を十分に批判するに、偏頗の材料を得たのである。是に於て僕は直に氏に對つて氏の厚誼を感謝すると同時に、追つて斯書に就て、僕の意見を發表すべきことを約したのである。爾來烏兎匆々巳に半歳を經過した。併し僕は是の間中決して當初の約を忘れて居つたのではない。唯だ平常劇職にある身として適當なる機會を獲なかつたのである。今日と雖も僕が理想として居る種の評論を物するだけの閑日月を得たと云ふ譯ではないが、併し近時の思想の變遷に鑑みて時機を逸するを虞れて零砕の時分を拾集し、漸く此の一篇を作つた。

二十二、僕は立論の方法に關してエドマンド・バアクに私淑す

或る史家は其の『英國十八世紀思想史』に於てエドマンド・バアクの政論の特長を叙して『彼の創説は毎に特種の實例に依て抑制せられ、且つ證明せらる。而も猶ほ彼は凡べて特定の場合の中に常に一般の原則を觀得す。』と言つたが、僕が評論家として世に立つ抱負も亦此處に在る。されば僕は何時、如何なる時事問題に逢著しても常に其れを通して、世に對つて永劫の敎訓を

與へることを忘ぬものである。名を時事の評論に籍りて、一時の際物師たるとは學者の恥辱とする所であつて、又僕の恥辱とする所である。されば此の評論とても唯だ泡鳴氏の人生觀と藝術觀とを縁として僕の人生觀と藝術觀との一斑を披瀝しようと試みたのであるから、歳月の推移に依て其の意義と價値とが急に失はれるものとは考へない。併し食膳を薦める者は客人の食欲の饑な時を撰ぶのを當然とする。僕が今此の評論を世人に薦めるのも亦是の意味に外ならない。

世に若し此の僕の計畫を評して牛刀を以て鷄を割くに等しとするものがあるなら、其れはまだ僕の心事を解せぬ者である。獅子が兎を搏つに全力を以てするは、彼は其れに依て己れの勢威の發動を享樂せんとするのである。

僕は謹んで斯の蕪雜なる評論を現今の學術界と文藝界とに貢獻する。

（完）

日清和睦論

池邊吉太郎

一體私は日清和睦論者である。支那と日本と仲を惡るくして、支那の利益にも日本の利益にもなることが何にもないと思ふ。日清戰爭以後、一時日本は、支那に對して又支那人に對して、酷く輕蔑の念を抱いた事があつた。隨分つまらぬ、譯の分らぬ馬鹿な事と思つたが、今では追々に其風が止んで來たのは甚だ喜ばしい事と私は思ふて居る。今日では日本と支那と和睦して仲善くして行つた方がよいと思うて居るのは私計りではない。總ての人が皆さう思うて居る。今の當局者も無論然うだと信ずる、又然うだと信ずべき證據もある。今度安奉線一件で日本は自由行動を執つたといふ事は、何れよくせきの事だらうと思ふが、それでも私は我慢すれば我慢出來ぬ事でなかつたらうと思うてゐる。我慢した方が結局日本の利益でなかつたかと思う

てゐる。然し事は外交上の事で已にやつて了つた上は、綸言をいつても取返しのつかぬ事故餘りいふまい。其結果あの一件では支那が讓り、そして外の滿州懸案では今迄通り日本が追々と讓り、他日本から折合を求めて纏まりが附きつゝあるらしい。日本の自由行動といふ事も元來制限的のものであつたのに、其上に日本からさういふ風の態度を取れば、安奉線一件も左程日清和睦の害とならぬかも知れぬとも思ふ。尤も清國政府は新聞を檢束して日本の事を矢釜しくいはせずに居る。それで支那人は一般に今度の事情を知らずに居る。知らずに居る丈け或は却て間違つた事が言ひ傳へられ、訛傳謬說思はざる誤解を日本に抱かせ、日本が大いに迷惑するやうな事も起らぬとも限らない。然し今の當局者の如く用心に用心を重ね、互讓的精神を繼續して事に當つたならば、かゝる誤解を和らげるかも知れない。そこで日清和睦の感情を案外害はずに濟むだらうと思ふ。

尤も私は日清和睦を希望するといふ事は、何も支那に依賴して日本國の爲めに、又日本人民の爲めに何か餘程の助けを得るといふ爲めではない。さういふ念願は毛頭ない、支那の未來については私も世の多くの人と共に疑惑を持つ。如何に支那を研究した人でも支那の未來を的確に豫言し得る人は決してあるまいと思ふ。今もないが、昔にもなかつた。支那がどう成り行くか、恐らくはスフヰンクスの謎以上の謎である。只、然しながらかういふ事はいへる。支那の事は分らぬが、支那以外の世界の事情は却てよく分る。其分つた處で判斷して見ると、今若し支那分割が起れば、世界の强國の二三は、支那の半分なり三分の一なり若くは全體なりを統治する力を有することは明かだらうと思ふ。支那は外國からヤッ附けられて、其下に統治せられた歷史は昔からいくらもある。周の時代から外國の折衝には困しんだ。秦始皇の万里長城も外國の侵入を恐れた結果である。漢武帝は力が强かつた故反對に外國まで切り込て行つた。史記なり漢書なりに書いてある地名が分れば分る程驚くべき面積を平服したらしい。

然しさういふ例は極めて少くて唐の太宗までない。其間の三國なり、晋なり、五胡の亂なり皆北方の夷狄に困められた歴史だ。唐太宗以後亦宋、遼、金となり、元に至つて統一した。今の清朝も支那人にいはしたら外國といふかも知れぬが、滿州人であつて餘り懸け隔つてゐぬから別としてもよい。さういふ風に昔から外國に荒され、分割せられ、一統せられ、いろ／＼な歴史がある。けれども何れの國も永く之を一統して居る力がなかつた。元は滅法界に力强かつたが、直ぐに恢復せられ散り／＼ばら／＼になつた。之れは元が力强かつたに拘らず何かしら大いなる弱點があつた爲めだらうと思ふ。處が今度はなか／＼さうでない。今度やられたら恢復出來るか出來ぬか六つかしい。そりや外でもない。今の文明といふものは、國といふものに非常に大きな力を持たせる事になつた。遠方から飛道具を放なす、近くからグッと腕を伸ばす、遠近共に非常に力がある。其力を利用していろんな事をやる。踏みつけてやることも充分出來る。今度やられたならばなかなか恢復することが出來ぬ。永久――といつても無限の永久ではないが――六つかしいかも知れぬ。少くとも元などより遙かに六つかしい事は明かである。これは日本にとつて――國としての日本にとつては些と怖い事である。あの大きな國を統一してやつたら大したものである。取立て得る租税の額も素晴らしいものだ、今のまゝでも役人の懐に入れず中央に集めたらエライものである。經濟力も集中したら莫大なものだ。從てこれが政治の統一の上にあらはれたらどうであらう。どうかすると日本などを一嘗めにするかも知れない。日本の爲めには危險至極の事である。其危險はどうあつても避けたい。そこで私は支那が人手に渡らずに原形の儘に保存することを日本の爲めに願はしい。今の朝廷も目が醒め、人民も目が醒めかけて來て、立憲政治の施行に着手して居るが、それが果して出來るか出來ぬか大問題である。此事が分らぬ故つまりは支那の未來が分らぬといふ事になるのであらう。然し分らぬは分らぬとしても、其仕組が要するに支那人が支那を

支配するといふ事に少くとも向いてゐる。これは私は日本の爲めにいゝ事だと思ふ。願はしい事だと思ふ。

∴日本が支那を征めるといふ事――これは存外に容易な事業かも知れない。古往四千年來、支那を陸地から征めたものは多いが海からは一遍もない。處が近頃になつて海から來るものが多い、英國が二回、佛蘭西が二回――尤も佛蘭西は一度は英國と共に、一度は南方の陸續きからやつて來たのだが歐洲から文明の利器を利用してやつて來たのだから海からといつてもよい。つまり遠方から遠矢を放つた。日本は近い處から海を亘つて行て大變苦しめた。今後日本が何時やらうと思つても容易に出來るだらうと思ふ。けれどもそれは決して願はしい事ではない、何故願はしい事ではないかといへば、殘念ながら日本の國は、世界の或二三の強國程エライ力を持たぬ。一時征服しても永久に之を踏止めてやつて行く事頗る覺束ない。どうしても今の處では矢張り仲善くして、支那を今の儘に保つて、日本も利益し、支那も利益することを政策の根本とするの外がない。これが私の日清和睦論の根據である。(完)

文藝家の二重業

三宅雄二郎

近頃或る名ある畫家は二重に仕事すべきを言ふ、心血を注いで大作を敢てするも、人に知られず、知らるるも買はれず、職業として何の得る所なし、さりとて唯だ空しく朽ち果てんも殘念なり、若かず挿畫模寫等にて多少の報酬を得つゝ徐ろに大作に從事せんにはと。家計の裕ならば兎に角、然らざる限り、勢ひ此の如くならざるを得ざらん。展覽會に陳列するは、概ね大作にあらざるに、猶ほ容易に購買者を得ず、定價の半分若くは三分一にしてもむづかしく、已むなく家に持ち歸りて窓掛とするあり。況んや工夫に工夫を凝らし、繪具を吟味し、數千圓に上るは、骨折り損の草臥儲けたらんや必せり。畫家相ひ率ゐて間に合せを務むるは避くべからざる數にして埒もなき小作を出すの餘

暇、窃に大作を念とするは、事の然るべき所なり。大作は多きを望むべからず、一生涯に二三あれば則ち可なるべし。但だ二三にせよ。之を念とするの幾人あるかを知り得ざるを憾む。歳月人を待たず、漸く餘裕を生じ大作を試みんとする頃、髪既に白きを染め來らざるや否や聊か覺束なし。文學に於ても之に類するあり。

普通の事物は盲者千人目明き千人の有様なるが、稍々專門に渉れば、盲者千人以上、或は千五六百、千七八百甚だしきは千九百九十に及ぶ。百代の畫聖と稱せらるゝもの、猶ほ批難を免がるゝ能はず。ラフアエルのシスチン・マドンナは世界の名品と呼ばるゝ所、而もジヨセフ・ペンネルは以て最も穢らはしく商賣じみしものとせり。ペンネルはペン畫に於てチチアンの言ふに足らず、ヴキエルジユの遙に優るを云ひ、尙ほ腐蝕法に於てレンブラントの言ふに足らず、ホイツスラーの遙に優るを云へり。ヴキエルジユ及びホイツスラーは近代の大家にして、或る人の評定せるが如く、近代なるの故を以て古人に劣るとすべからざれど、チチアン及びレンブラントを以て言ふに足らずとするに至り、褒貶の甚しきに驚かざるを得ず。ラフアエルの卑俗なるを明言するは寧ろ滑稽なりとすべし。されどペンネルは素人にあらず、黒人にして批評を好むもの、而して猶ほ斯かる狀態なるべくんば、批評に亂暴なるあり、察すべきに非ずや。而も製作品の價額は往々批評を以て上下す。買はれんことを欲して好評を求め、自家の特長を現はさざれば、遂に見るべきなきに終る。ピユビス・ド・シヤヴアヌは近代に超越し、間斷なく批難を蒙り來れり。カスタニヤリーは指して繪畫とするの價値なしといへり。シヤヴアヌは頗る神經質にして、批評の爲に心を動かさざるを得ず。我が是認する所の非認せられ、我が最も得意とする所の最も烈しく攻擊せられ、その餘りなるの屢々なるより、一切批評に耳目を閉ぢ、單に我が信ずる所を貫くに決意せり。乃ち批評を記載せる書類は机上に山を爲すも、少しも之を讀まず、書面も封を切らず、その儘に差し置けり。人

之を知りながら、倘ほ頻に書類を寄贈せるは、讀まれんが爲めならず、來客の目に觸るべき裝飾物となさんが爲めなりき。シャヴアヌは斯くして己れの信ずる所を畫き、他に類なき畫風を作るを得たるが、若し其の多感の質を以て絕えず批評に接せしならば。決して彼の如く成功せざりしならん。

シャヴアヌの繪畫は尋常人の頗る理解に苦む處、時代の差別なく、季節の差別なく、地域の差別なく、徒らに妄想を恣まにせるかに見ゆ。批難は主として此點に存せり。而も彼れ元と科學を好み、科學に忠實にして、苟も描くところあらず、輕々筆を走らしゝが如きは實に苦心慘憺の餘に出でしもの、十分に自然を寫し、然る後藝術に益なしとするを省きしなり、藝術を以て自然を完成するものと認めしなり。その見地の何樣なるを考へず、一覽して理解する所あらざるは、怪むに足らず。シャヴアヌは強ち理解せらるゝを求めず、群盲に賞めらるゝよりも一人の知己を得るに若かずとし、而して知己テオフヰル・ガウチヱを得たり。其の自ら信ずるの篤かりしはシャヴアヌのシャヴアヌたりし所なり。畫家は斯くあるの望ましとす。されどシャヴアヌは世間に賣らざるも、パンテオンなり、公會堂り、安んじて大作に專らなるを得たりしも、我國の如き、其の心を以て心とするも、之と業を同くするを得ず。若干の作品の文部省に買ひ上げらるゝさへ、如何はしき評價の下に於ても、その選定に洩るれば全く徒勞に屬するを免れず、刻苦黽勉するは冒險的の嫌ひなきに非ず。心にも無き小作に從事するは已むを得ざるに出づ。而も小作は小作とし、能ふべくんば人の思はく如何に關せず、自ら信ずる所を行ひ、友を他日に求めんことを期すべし。茲に二重業の必要を見る。

文學に在ても、批評の爲めに累を蒙りしもの少からず、七年前エヂンバラ・レヴヰユ創刊滿百年紀念號の出で、本年クヲータリー・レヴヰユ創刊滿百年紀念號の出でしは人の知るところの如し。今こそ多くの雜誌の存在し、之を凌駕するの少からざるが、二紙創刊後數十年間、互に正反對の位置に立ち、英の文界を兩分

するの勢ありしなり。而して其の相ひ別れしは、種々の事情あるも、ジエフレーがウヲルター・スコットを攻撃し、併せてサウゼー、ヲーヅヲースを攻撃せしを最も近き原因とす。スコットは自由派進歩派を好まざりしも、若し批評の酷烈なる無くんば、或はその儘に經過したらんも測られず。ジエフレー及びスコットは、私交の嘗て變らず、互ひに敬重せしも、趣味の異なりしは、即ち二大雜誌をして百年間對抗せしめし所以なり。スコットなり、サウゼーなり、ヲーヅ、ヲースなり、自ら信ずる所ありしが故に、酷評を蒙りながら、相當の位置に安んじ、尚ほ益々之を高むるを得たるも、さまで信ずるの厚からずんば、或は批評に動かされ、初志を飜すに至らん。特にジエフレーの如く紳士の態度を以てせず、多くの亂評家の亂評妄評するに於ては、意氣沮喪せざらんこと難たし。

屈原のいりへし黄鐘毀棄瓦釜雷鳴は、何の世にも之れ有り。批評に當るあれど、當らざるも多し、作家以上の批評家あらば作に益するの尠からざるが、他の時代、他の國は暫く措き、我國の文藝批評家は二三人を除き、作に益する所ありと思はれず。批評家として最も適當なるは却て筆を執らず、謂ゆる文壇の評判は或は連中が一時の好事心を以て愛情を表白せるに止まる、その重きを置くべきに非るは言ふ迄も無きが、書肆の意向は此等の評判に決すること稀ならず、批評家と嗜好を同くするは、得々として作に次ぐに作を以てし、之と嗜好を同くせざるは、馬鹿らしく感じて作を斷念するに至る。されど作家たるものは、果して斯かる境遇に限らるべきか、又は是れ以外に爲すべきあるかは、思慮すべき所なり。小批評家の運命は久しきに非ず、幾多批評家の作りし輿論は數年ならずして變化す。前の輿論に歡迎せられし者が、後の輿論にて埒外に抛げ出され、別に新たに迎へらるゝ者あること、作家の變遷を考ふれば思半に過ぐ。比較的壽命の長きは輿論に支配せらるゝこと少かりしもの、例せば滋柿園の如き、曾て歡迎せられず、その代りに筆を執ること二三十年茲に異ならず。作家は必ずしも批評より離る

べきに非ず、少くも職業上之に注意せざるを得ざらんも、書肆若くは新聞社への原稿は一種の勞作とし、更に己れの信ずる所に向つて進まんこと、自己の爲め、且つ文藝の爲めに希望せらる。齡二十代なるは流行を追ふに專なるも可い、三十代なるも猶ほ或は可とすべけれど、四十を過ぎて猶ほさる有樣ならんか、最早や將來なしといふも妨なし。文界藝の人を判斷するには、職業的に從事しつゝある外に何の爲す所あるかを見るべし。仕事を二重にし居れば事を處するの宜きを得たるなり。



海外消息

七月三十一日巴里より

無念庵

現在に於ける海外一切の諸勢力に我國と緊密の關係ある歐米諸國の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

●謹啓　獨逸大宰相ビユローー公が財政案中の主要部分たる遺產相續稅及び其他を否決せられ、一週間の議會の休會を宣して其間に大に議會操縱の術策を致さんとしたる事は既報の如くなるが、中央黨及保守黨等は遂に政府に向つて一の妥協案を提出しツマリ二千五百萬磅の新稅收入を認むる事となり再び議會を開會して之を可決したり、されど之れ實にビユローー公の政策を無視したると同樣なるを以てビユローー公は七月十二日大宰相の職を辭するに至り候。

●ビユローー公の周圍の事情

久しく獨帝を擁して世界の

臺に花形役者たりしビユロー公が、何故に大宰相の印綬を解くの止むを得ざるに至りたるか、之れ最も興味ある問題なりとす、然れども深く公の心底に切り入つて明白に事實の眞相を傳へんことは到底不可能の事に屬す、唯茲には表面に表はれたる公の周圍の事情を記するに止め置かんと欲す。

▲公と政黨との關係　抑も公の對議會策は自由黨及び中央黨（僧侶黨）の二大政黨を結びつけて之に據り以て議會に多數を制するにありたりしが、本年に至りて、公の立案せる財政計畫が尠なくも中央黨及自由黨の分裂を來たさしめたり。即ち自由黨は公の財政案を以て獨逸の國力を侵害するものとなし財政整理委員を辭したり、續いて前述の如く僧侶黨及び保守黨聯合の上、富豪及貴族を主眼として立てたる遺產相續税なる者を否決し、單に中以下の細民を苦しむに過ぎざる日用品に對する賦課税のみを通過せしめたり。社會黨は茲に於て陰に陽に猛烈なるビユロー公不信任運動を開始し一般人民の多大なる同情を得たり。公の背後には絶大無上の帝王の神權あり、獨逸帝國議會は憲法上の位置は兎に角、事實上他の例へば英國の下院に於けるが如き勢力を有せず、公の之に臨むや常に傲然自ら持し、他國の宰相が議會の操縱に腐心するか如き經驗を重ねたる事なし。公と諸政黨との間には常に面白からざる感情の蟠かまり居るや久し。

▲公と獨帝との關係　獨帝は自己の意の儘に政權を切つて廻はらんとする事には、ビスマーク公をすら自ら彈劾したる程なり、近年ビユロー公が其の政策に對し屢々不愉快なる感情をさしはさみたるは事實なるが如し。

然るに皇帝は皇帝の一書記翰長たるに甘んぜざる宰相を宰相とする事を好まず。皇帝の外交的政策に反對し、若しくは皇帝が屢々敢てする不謹愼なる言動に諫言を云ふ者は長く皇帝の信任を持續する事を得ず、六月廿四日の第二讀會に於て遺產相續税の否決せらるゝや、ビユロー公は篠キールに赴きて軍艦滯泊中の皇帝に謁見し、議會解散か然らざれば宰相辭職の御裁斷を仰ぎたり、然るに其何れをも取らずして、ウルフ通信社に命じ左の通信を發せしめたり、即ち「宰相は本日の謁見に於て即時辭職の勅許を奏請したりされど皇帝は之を却け、帝國の財政改革は内外政務の最大要件たるを以て聯邦政府の承認し得べき成案を得るに至るまで其職に留まるべきを命ぜられたり」と之れ取りも直さず皇帝が宰相の辭職を許可したるものと同様なり。

▲要するにビユロー公の辭意は豫算案の否決よりも寧ろ皇帝の以上の如き面白からざる態度が其動機となりたるか如し。

●獨逸新宰相任命　ビユロー公は豫算案に一段落をつけたれば、外務省官吏を招待して別辭を陳べ獨逸大宰相の職を去りたり、次で本月十四日新宰相フォン、ベートマン、ホルウエク博士は任命せられたり、新宰相は普國の人、其祖父モーリッツ、アウグスト、ホートマン氏は有名な

る法學者にしてウイルヘルム四世陛下の信任を辱ふし、一八五八年乃至一八六二年自由黨内閣に入りて文部大臣の職にありたり。父は一富家翁にして閑日月を送り得たれば氏は父よりも寧ろ祖父の志を承け繼ぎたるものと云ふべし。新宰相はストラスブルヒ、ライプチヒ、ベルリン諸大學に學び、三十歳にして郡長となり、千八百九十九年ポーゼン州ブロンベルヒ縣知事となり三ヶ月を經てブランデンベルヒ州知事に擧げられ一九〇一年樞密顧問官に任ぜられ、一九〇五年普國内務大臣となり一九〇七年獨逸帝國の内務大臣に榮轉せし人なり。外交にかけては殆と無經驗なりと雖も其常に穩和なると、不撓不屈能く事務の實行を擧ぐる事と當代の政治家中に得がたき學才等を以て獨逸國上下の重望を負へる人物なれば陛下の信任を得ることは容易なるべしといふ。

●佛國内閣の瓦解　佛國議會の海軍調査會が佛國海軍の大醜體を暴露したる事は前便に申上げたるが該問題は事の餘りに重大なりしため、海軍大臣の引責となり、續いて現内閣更迭の原動力となりたり、去る二十日の代議院に於ける首相クレマンサウ氏と前外務大臣デルカッセ氏との間に近頃になき激烈なる議論起り、デルカッセ氏は佛國の海軍政策が常に動搖し居る爲め海軍力の充實せざるは其の處なりとて、手傷く首相を攻撃したり。

▲クレマンソー氏の激論　首相は徒に自己の推測を以て他を攻撃するの卑怯なるを責め、アルゼシラス條約に於て佛國人民に一大屈辱を與へたる者はデ氏なりと述べたりしが、他の列席議員等は既にク氏の内閣に慊焉たらざる者のみなりしかば、之を認めず、百七十六票に對する二百十二票を以て政府側提出の内閣信任案を否決せられ候。

▲クレマンソウ氏とデルカッセ氏　ク氏がアルゼシラスの屈辱云々と抗辯したるは、當時佛國の海軍が充實し居りしならんには直に出師準備を爲し得べかりしも、事茲に出てず空しく屈辱を忍て泣寢入りとなりたるは、取りも直さず、當時の外相デ氏及び海軍大臣が佛國の海軍力を内心悲觀し居たるが故なるは相違なし、佛國現在海軍力の微弱は決して獨り現内閣の罪のみにはあらずして、デ氏及び其當時の海軍大臣も共に其責に任ずべきものなりとの意にして、デ氏も之には實は閉口したる次第なり、されど海軍調査會の委員長として、苟くも現内閣の不信任を叫ぶ以上は、如何なる事ありとも中途にして其意志を挫折する事は自已の面目として出來得べき事にあらず、殊にク氏の舌鋒が鋭くデ氏の胸壁に感じたるだけそれだけ、一種の敵愾心は驀然として起り遂に其與黨を提げて不信任を決議したる譯に候。

▲ク氏は又何人が首相たりとも佛國の海軍を遂に之れ以上の實力あるものとなす事を得ざるべしと信じ、此の確信を以て議會に對したる譯なるが、ク氏の立場より云へは之れ實に無理のなき處なりと云ふべし。

▲佛國新内閣の成立　然れども之れ佛國内閣全員に對する不信任にあら

ざるを以て、ク氏の去りたる後の新内閣はク氏の内閣にて司法大臣たりしブリアン氏に依りて即時成立せしめられたり。氏は社會主義者にして、政教分離問題に於て嘖々の高名を擧げたる人なり。新内閣方針等總て前内閣と異ならず、此間に獨り馬鹿を見たる者はクレマンソウ一人なるが如き感なき能はず。誠に穩健なる好宰相を氣の毒な事をしてけりと申居り候。閣員の顔觸は外相にピシヨン氏陸相にブルン氏、海相にボン、ド、ラ、ペレール等なり。

●米國關税改正案通過　チングリー法關税を改正せんことはタフト氏の聲言したる主張なりし爲め大統領に就くと同時に、之が改正に着手したる事及び其間の消息に就ては既に前便に於て申上げたる通りなるが、下院は該案の討議に三ヶ月間を要し、漸く七月九日の下院に於て通過せしめられたり。新關税法の内容に就ては未だ何等の詳報に接せざるを以て其是非を論ずる事を得ざるも、多數議員の言ふ處に依れば、共和黨の誓約が界事實の上に現はれたりと云ふ。

●波斯帝廢せらる　國民黨は何等の計畫を立てゝ密に運動しつゝありしが、俄然テヘランに侵入して暴行を極め、官兵は又議事堂を包圍し露兵は縱横に入り亂れて首都は全く暗黒となりたり、革命兵は遂に皇帝の廢位を強ひ、政府より年金五千磅を支出して首都を立去らしむる事に決定したりとの事に候、如何なる密謀のなしとも限らず、或は一種の政略かとも思はると云ふ者あれど、皇帝の廢位は事實疑ふべからず、今後如何に成り行くか波斯の前途は益々興味あるものと相成候。

●西班牙の反亂　モロッコ問題に關聯して、西班の出兵を頗る不譽なりと認め之に反對せる一隊の士民バアセロナを包圍攻撃せりとの報ありしが、其後士民の勢力益猖獗を極めバーセロナ市は光景暗憺として目もあてられぬ始末となりたる由、殊にモロッコ兵との戰鬪常に西兵に不利にして、或者は早くも西國の危機と叫ぶに至る。西國は全國に動員令を下し陸相は辭表を提出せられしも聽許せられざる由、猶之に就て此の次ぎに申上ぐべく候。



現代人物評論（二十）

森鷗外論

△聯想と回顧

島崎藤村

森鷗外氏のことを考へると、詩人ギヨエテのことを聯想する。『神曲』の中に、あの主人公が私淑する詩人ヴアジルの靈に伴はれて、地獄めぐりをするところがある。たしか彼の詩人の靈が主人公に向つて、こゝまで君を案内したが、これから先は最早僕の力に奈何ともすることが出來ない、君獨りて行き給へ、といふ意味のことを言つて別れるところが有つたやうに記憶して居る。この記憶は甚だ覺束ないが、森氏が踏んで來た道には、丁度これに似たやうな場合があつたのではなからうか。氏もまた一度この岐路に立つて、ギヨエテを見送つた人ではなからうか。

森氏が長い沈默を破つて、小説や脚本を公にするのを見ると、斯ういふ深い回顧の情を私の心に起させる。氏は今、獨りで歩い居る。工匠ソルネスのやうな寂しい心を抱いて『ジヨン、ガブリエル、ボルクマン』を譯しつゝある。

△森鷗外

三宅雪嶺

大分以前の事だが鷗外は頻に書き立てゝ誰でも相手に論じ合つた、少しの批評に對して長々と書いたこともある、或る人がそれを大人氣無いといつた所が氏は答へて曰ふやう、韓信の胯潜りといふが、若し韓信に

して腕力が勝れて居たら、勝を潜らずに片端から抛げ倒したであらうと、即ち自分は捺ふるに及ばぬ、誰でも抛げ倒して遣るといふ意で有つたらしい、鴎外には勝氣な處が有る、實際尋常に超えた能力を持つて居る、學校に居ても、學校を出ても、己れの能力の尋常で無いことを自覺して居たであらう、

醫者として何れ丈の力あるかは世間では餘り知らぬ、併し官職に於て昇り得らるゝ丈昇つて居る、如何樣な事情が有るにしても技倆が無くては爲し得られぬ事である、それで文學に於ては坪内氏の英文學に於けるが如く獨逸文學に位置を占めて居る、珍しい事とせばならぬ、醫者には昔から多藝なものがある、中にも政事に關係したり、文學に關係したりするのがある、舊幕時代に儒醫と稱して儒と醫とを兼ねたが、幕末には政治兵制に携はり、學問技藝にも携はつた、明治になつて立身したのも尠くない、今でも政治、文學に關係あるものがある、ヴヰルヒョが醫と政治とを兼ねて獨逸に鳴つたとかで、我國でも醫者が代議士にならうとする流行があつた、其の或る者の曰ふには、醫者としてヤブ、政治家としてデモたるを免れぬと、誠に情けない歎聲であつた、今でも醫者にして代議士たるものがあるが、まだ之ぞと目立つたのが無い、併し文學の方には色々ある、井上氏の歌、鴎外の獨逸文學等がある、

鴎外は一時文學に遠ざかつた、軍醫として專心に勤むる爲に遠ざかつたのか、兎に角遠ざかつた、軍醫としてはそれが宜かつたであらう、文學に評判が宜いと醫者が下手であるかの樣に疑はれたであらう、併し今となつては、最早や大丈夫である、寧ろ文學の方に斬つて出るに宜い汐時である、勢を知るの彼れは、これから文學上大に活躍するかも知れぬ、今は醫と政治とを兼ねて秀でたものは無いが、醫と文學とを兼ねて秀でたものが有る事になるであらう、

か、それが何れ丈事實にされるか、軍醫として最上官に達したのは醫術に於て貢獻したところがあるのか、又は別に貢獻したところがあるのか、醫者仲間に何かの話があらう、獨逸文學に於て氏に及ぶものの有

るか無きかも疑問であるが、氏自ら獨逸文學に通ずるを以て滿足せぬであらう、必ずもつと爲す所ある心組に相違ない、それが如何なるものかは分つて居らぬ、併し氏は負け嫌ひである、醫術に於ても敢て人に一歩を讓らうとはせぬ、文學に於ても任ずる所あるであらう、人が不足を言つても承知するものでは無い、餘程勝氣である、唯勝氣であるに似ず、政治には全く嗜好が無いらしい、文學でも純文藝の如きに向ふのである、若し政治に氣が有つたら、發賣禁止になるものを出版する樣な事は無い筈だ併しそれといつて氏は最も秩序を尊び命令を重んずる軍隊に屬して居る、さうして氏自ら秩序を尊び命令を重んじて到らざる所がない、それにも拘らず一方には發賣禁止となる樣なものを書いて居る、即ち氏の身體は矛盾を併せ兼ねて居る、ところが氏が矛盾を併せ兼ねる事は之には限らぬ、謹嚴であつて風流である、丁寧であつて片意地である、優しくつて六かし屋である、妙に矛盾して居る。

矛盾は能く統一されて居て、それで時として破綻するらしく見える、氏の生活は仲々込み入つて居る、甚だ平らな生涯だが之を分析するは頗る困難である、今の文學者に之を書き現す能力あるものありと思はれぬ、されば氏自らその込み入りたる所を書き現はし行かば、それこそ何人も企て及ばぬ所に出るのである、が人が面白がるか如何かは別の事である、併し單純な樣で複雜、複雜な樣で單純、類が無い樣で普通に見えて居る、まだ前途の到達點が分らぬ、分つても自分で分ることを欲しまい、分る前に大に爲す所あらんを希望する。（談話筆記校閲濟）

△鷗外先生

永井荷風

凡てのいまはしい形をあからさまに照す日の光が次第に沸らいで、色と響と匂のみ浮立つ黄昏の來るのを待つて、先生は「社會」と云ふ窮屈な室を出て、「科學」と云ふ鐵の門を後にして、決して躓いた事のない、極めて規則正しい、寛濶な步調で、獨り靜に藝術の庭を

散歩する。藝術の庭は實に廣くて薄暗くて隅々までは能く見えない。色々な花がさいて居るけれど、まだ誰も見た事のない花が何れだけ暗い影の中に咲いて居るか分らない。先生は種々な太古の人物の彫りつけてある、丁度希臘のサルコファーデュのやうな、冷い石の榻に腰を下して、いつも若々しい眼で、誰れも知らない庭中の花をば殘らず眺めやうとして、已にその大方は眺め盡して了つた。時々は科學者の態度で摘み取つた花の花瓣から蕋までを仔細に調べる事もあるが、時々は少女よりも優しい心でうつとりと其の薫に醉ふ事もある。先生は自分の氣に入つた花の姿をば繪に寫して折々土塀の外に居る人に見せてやつた。塀の外に居る老人又は先生と同じ頃の年の人には何の事だか分らなかつたが、然し好奇心の燃えて居る若い人達は初めて土塀の中にはあんな美しい花が咲いて居たのかと心付いて、一生懸命に入口を見付けて花園の中へ這入つて來た。然し先生の腰をかけて居る石の榻のある近邊までは、道が遠いばかりでなく、道の曲り具合が分りにくいので、誰も行き得るものはない。若い者供は一度び已に先生が歩みながら見飽きて仕舞つた路傍の花を眺めてあれがいゝの、此れが美しいのと、わい／＼騒いでゐる。先生は其の聲をかすかに聞いて獨りで微笑んだ。そこで折々遠くから皆なの知らない變つた花を取つてはふいと投げて見せた。わい／＼云つて居る一同は投げられた花を手に取つて見たが、塀の外にゐた以前のやうな稚い愛らしい心がなくなつて、おれも今では庭を歩いてゐる男だと高振つて居るから、この知らぬ花を知らないものと思ふのが厭なので、こんなものは仕様がない、おれ達には不必要だと罵つた。中にはこんな事をいふものがある。先生は唯だ花を見て樂しむ人だ。我々は汗を流して花を作らうとしてゐる人だ。あんな呑氣な男は仲間に入れぬ方がよい。先生は遠くから此の聲を聞いて再び面白さうに笑ふ。時々はわざとからかふつもりで、凋れかゝつた花などを投げてやる事がある。先生はいつも獨りである。一所に歩かうとしても、足の進みが早いので、つい先きへ先き

へと獨りになつて仕舞ふのだ。競爭と云ふやうな點のある興味は先生の味はうとしても遂に味へない處であらう。自分は先生の後姿を遙かに望む時、時代より優れ過ぎた人の淋しさといふ事を想像せずには居られない。

△森先生

戸川秋骨

森先生には切り込む餘地がない。竹刀をすてゝ降參するより外致し方がない。とんだ事を輕卒に御引受けしたものだと後悔して居る。森先生の御邸には門に駒寄せがあつて、正面からは決して内へ入れない。出入口は全く別の方面にある。私は嘗てそれを巡査に教へて貰つて、先生の御邸に行く事を得たが、今先生の事を考へてそれを思ひ出した。何處か先生には摑め手があるのであらうが、私には解からぬ。

先生の作て、私の始めて讀んだものは、うたかたの記である。柵草紙であれを讀んだ時には、まるて醉つたやうになつて仕まつた。幾度くりかへして讀んだか解らない。私は日本の本て二度もくりかへして讀んだといふものは殆んどない。併しうたかたの記丈は例外て、殆んど暗誦して仕まつた。良いと思つた處は今でもよく記憶して居る。これが心醉の始めて、先生のものは大抵讀んで居る。すてに心醉して居るのであるから切り込む隙を見附ける事の出來ないのは勿論である。

先生の作は極めて藝術的で平衡とか渾成とかいふ處が著く見えて居る。これも切り込めない一理由かも知れない。

近頃は頗る思ひ切つた飛び離れた作をされるが、それても藝術的といふ處は失せない。先生の作は現代に於ける尤も古典的な趣味を傳へるものであらう。この近代的の色彩と古典的趣味との融合は頗る面白い事である、これがやがて先生の文學的生命のある所ではあるまいかと思はれる。一寸附記して置くが、古典的といふとクラシ、ズムを連想して、技巧とか形式とかを

偏重するものと解されるが、私はクラシカルといふ古典的とクラシシズムといふのとを區別して（そんな區別はある筈のものでないと言ふ人があるかも知れぬ。また全くその間に區別はないかも知らぬが）前者は心の藝術的なの、後者は形の藝術的なのといふ樣に解したい。從つて古典的といふのは、心の藝術的であるといふつもりなのである。即ち森先生の場合に於ては、それが平靜な澄み渡つた、平衡の取れた心持といふ事になつて顯はれて居ると思ふのである。此れほんの一時の思ひつきである。本當の所は私しはよく解し得ないから此れて御免しを祈る。

△森君

井上通泰

餘り親しい仲だから却つて言へないね、森君は餘り交際せぬ人だ、醫者仲間でも往來して居るものは僅々二三人、靑山（胤通）と賀古（鶴所）と私位なものだろう、亂交はせぬがその代り交つたとなるとひどく親しくなる人で、途中から疎くなる樣なことはせぬ、大學の古い卒業生でね、明治十四五年位であつたろう、私の卒業は二十三年だつたが、左樣だ、九年程前だね、年齡は私より五つ程上だ。

洋行して歸つて間もなく、まだ千住に親掛りて居る時分に賀古に附いて尋ねて行つた、賀古は同級生で森君とは斷金の友だからね、後の柵草紙は此仲間でやつたのさ、市村瓚次郎君や、落合直文君等もその一人だか、此人達は私の紹介で共に千住へ行き、初めて森君に會つたのだ、

學は各々違ふけれど話は能く合ふ、て明治二十二年の夏と思ふ、國民友の夏期附錄に、當時は西洋物の杜選な譯詩などが澤山出て居たのだから、如何だい、我々仲間で一つ模範的のものを作つて世に示さうじやないか、宜かろうといふ樣な事になり、てんでが作つて載せる事にした、之が我々の文學に於ける團體的仕事の初さ、落合の有名な「笛の音」などいふ大作もその夏期附錄に出たのて、それは「おもかげ」と題した中に

收まつて居たのだ、その頃我々の團體は銘々には署名せず、單に「SSS」の名を以て「おもかげ」の題の下に交る〳〵毎月書いて居たものだ、團體には前に云つた四名の外に更に森君の妹、今の小金井良精氏夫人君子さんも加はつて居り、一所になつて書いて居た、「SSS」といふのは我々の團體を新聲社と名けて居たからその各綴の頭文學だけを列ねたのだ、

處が此國民の友に出した作が大に世評よく、ハヅミが附いて遂に同じ年の冬柵草紙の第一卷をば、市村、森、落合及び私とが責任者で發行する事になり、他には君子女史、幸田露伴氏なども助けて作物を寄せなぞした、斯くて幾年續けて來たのだが、日清戰爭が始まると共に森君が出征する事となつて止めてしまつた。森君と組み合つての仕事はそれきりだつた。

一昨年の五月頃から森、賀古兩君の發議で、互に極端と極端とがあつて容易に適從する所を知らぬから、皆がその所信通に作をし、持寄つて互に相談し合つたら宜かろうぢやないかといひ、斯くして又常盤會なるものが出來、我々が選者となり、森君と賀古君とが幹事となつた、

森君は洋學者であり私は國學者である、それで能く話が合ふものだといふものが有るが、外觀には如何にも左樣であろう、が森君は洋學者とはいふものの洋學者中の國學者である、私は國學者であるけれども亦橫行の文字を解する、それ故互に相步み寄つて思想の上には餘りに距離の遼遠てないものがある、換言すれば森君は洋學者中の保守主義者であると同時に私は國學者中の進步主義者である、一方は西から一方は東からと其處に妥協の餘地が存するのだ。

醫學者としての森君が、醫學の方面にも仲々深い研究があり、基礎醫學、特にその軍隊衞生の方には頗る功勞の有る人だけれども、實地醫學の方と違つて直接人の目に映ぜぬ所から、兎角現れずに文名の方に掩はれて仕舞ふ、此處に斯ういふ話があるから仕やう。

荒木寅三郎といへば京都の醫科大學長で、別科卒業生からして現在の椅子に凭つた程の出來る人だ、今こそ

餘程人附合に慣れて鋭鋒を見せなくなつたが、以前は青年の意氣に任せ頗る人を罵倒したものであつた、此荒木が七年程洋行して戻り、直に岡山へ赴任し、赴任后間も無く又東京へ來て、誰か知名の學者に紹介して呉れといふから六七名へ向けてやつた、處が其后逢つて聞いて見ると、いや彼れも駄目だ此れも駄目だ、無學なものばかりで相手にならぬといふ挨拶、では森は如何だつたと最后に訊くと、流石の荒木も暫く口を噤んで、うん彼れ丈は一人違う何でも能く知り居るわいといつて舌を捲いて居た、此一小話でも大抵知れ樣てないか。

一體頭がよいのだね、唯文學と醫學とのみに限りはせぬ、博覧强記で何事にも一通りの知識を有つて居る海軍の軍令部に松岡（靜雄）といふのがある、私等の兄弟で柳田國男のまた弟になるのだ、それがまだ中尉位の時の事だが獨逸へ留學を命ぜられた、て佐世保に居る間に森君がその頃軍醫部長をして小倉に居た所へ尋て行つたら、井上の弟だといふので快く會つて呉れた、そして陸軍の辨當で晝飯の御馳走をして呉れたが、その折の談話だ、君は洋行するといふのだから一つ船の話をして聞かさうといふ。松岡之には氣を奪はれた、といふのは自分の兄弟で言ふも何だけれども學校をも兎に角一番で卒業をする、相應の頭は持つて居る。いや海軍の若手の士官では將來有望とも見做されて居た方で、特に船の事は日頃研究をし、隨分細かしく知つて居るのである。處が此船專門の松岡に向つて心得の爲に話して聞かさうといふだのから驚かざるを得ぬ、森はそれから一時間ばかり諄々として說いた相だ、之を靜かに聽いて見ると二度意外の感がした相だ。言々盡く新智識ならぬはなく實際に當つて非常の助けになつたと、之は松岡が戻つてから直接私に聞かした事だよ。

世間に頭の宜い人は幾何もある、が頭の宜い人は得て勉强せぬのが多いし、勉强するものには又餘り頭の宜い人が少い、頭が宜くて且つ勉强するといふ樣に、二つを一つに兼ねたものは滅多に無い、偶ま之を森君

に於て見る。森君は生れついて老實な人である、私よりは年嵩たから、いつも老實だと思つても、何、自分よりは年輩が上だからああも有ろうさと考へ直して見て來たが、矢張り左樣ぢやない、私も今年四十七だ、森君の四十七の時に見て左樣に感じて來たのだが、矢張り森君の四十七の時とは違う、彼人は今年五十二だね、私も之から五十二になつたとて迚も彼樣いふ態度氣質にはなれ相も無い。生れ付いて老實なんだね。(談話筆記)

△森先生

芹菜子

○唯數行、予をして評論を急がしめよ。

○森先生はヂレタントである、哲學者である。教訓者てある。

○予は常にその小説を讀んだ後に、

『や、また教へられたな。』

と呟かずには居られなかつた。今でもあの『鷄』の主人公、石田少介のやうな、ぢつと何事をも忍んでゐる、教訓的人物が眼に見えるやうである。

○予は、また先生の小説を讀んでゐると、屢『何故に』を分析したやうな文字に逢着することがある。『ヰタ、セクスアリス』でもさうであつた。『魔睡』でもさうてあつた。

○而して最後に予は、官吏と藝術家の矛盾を思ふ。

△一讀者として

水野葉舟

自分は一讀者として、長い間鷗外氏を遙かに見て居た記憶を書き度い。

自分が從來尤も、繰り返して讀んだ書を上げるとしたらば鷗外氏のもの、二亭氏のもの、藤村氏のもの……などがたしかに第一位を占める、その中で、一番古くから讀み耽つたのは藤村氏の詩集であつた。次には鷗外氏の「水なは集」と「かげ草」とであつたらう。しかし、それは誰から紹介されて讀んだか、その點は記憶

は無い。古い日記を見ると、自分の文體がすつかり鷗外張りである。それ程に、自分はそれ等の書を耽讀した。

後になつては、古本屋を漁つて「しがらみ草紙」を集めたり、本郷の盛春堂(?)だけにしか賣つて居ながつた「めさまし草」を必ず買つたり、自分は可成熱心な讀者であつた。

「即興詩人」は雜誌の中に大抵集めて持つて居た、が書になつた時には第一に買つた。今でもその一版が、手元にあるが、あの書位なつかしがつて讀んだ書は少かつた。自分の二十か二十一位の時だつたが、あれを讀むと、ひそかにアントニオを氣取つて見たりした。自分の空想の中に、生きた人になつてあの書の中の人間が動いて居た。

あの書を讀むと、今でも自分の感動が湧くやうに高まる事がある。

自分は、思想の上にも、感情を教育された上にも鷗外氏には隨分に重大な恩惠を蒙つた、だが、永い間、自分はたゞ鷗外氏に醉つて居た。その創作を透して、決して氏の本體を思つたりすると言ふ事はなかつた。

近日、「一幕物」を讀んだ。そして久し振りにぼき〳〵した、そつけない、艶もないが實に心持のいゝ文章を拜見した。

だが、その前に一つ斷つて置き度い。自分は昨年「文章世界」で鷗外氏の訪問記を讀んだ。筆者は某氏ださうだが、それを讀んだ後に、自分は個人的に鷗外氏が腹の底から嫌になつた。役人風の、人を馬鹿にした、驕慢な人と思つて、その訪問者に同情した。これはしかし、鷗外氏に對して、鷗外氏の地位を正當に思つて見なかつた故であるのを後に知つた。

さて、最近に、あの有名なヰタ、セクスアリスを讀んだ。自分はスバルと言ふ雜誌は從來見た事はなかつたが、島崎さんの處に行つた時に、貸して上げようと言はれたので、拜借して來て讀んだ。そして頗る感心しなかつた。訪問記者にずら〳〵と自分の記憶を、話てもされたものを讀んだやうな氣がした。

て、このヰタ、セクスアリスト言ふ創作を讀むと、始めて鷗外氏のライフと言ふものが、眼前に彷彿とした來た。

自分は一回も氏にお目に懸つた事はない。だから、丁度幸だ。自分が、あの小說を讀んだ鷗外氏を書いて見よう。

成程、非常に頭のいゝ人だつたらう。始終、この世の中の勝利者で、その前に途が極めて、平々坦々として居たらしい。何事も氏にはその明晰な頭で截然を判斷が付く。

しかし、それに從つて氏には感情の問題で少しも苦勞されたと言ふ處が無い。少くとも氏自身の自體には傷痕が無い。

自分の友人の一人はやはりこの作をよんで斯う言つた。

「成程、鷗外さんには翻譯しか出來ない。」との一句には自分は成程と思つた。斯う言ふ人は、從つて偏狹であらう。

これと、も一つはその文章を見ると、如何にも無愛想な人て話が下手らしい。以上は無遠慮に自分の感じを書いた。

ともかくも今日に於て氏が尙ほ若々しく善惡に干らず、作を公にして居られるのは實に目覺しい事てある。

△森鷗外先生

田山花袋

○私は大變鷗外さんの恩惠を受けて居る。文學上では殆んど眼を開けて貰つた恩人といつてもよい。獨り私ばかりでない「文學界」などに居た人——島崎君なども確かに鷗外さんから啓發された點も少くなからう。さういふ點になると鷗外さんの方が坪內さんよりも遙かに大きい感化を及ぼしたやうに思ふ。私はだから鷗外さんを先生として尊敬して居る。

○然し鷗外さんはロマンチシズムを論じても、或はナチユラリズムを說いても、何時も自分は傍觀者又は

批判者たる位置を動かす、其渦中に捲込まるゝといふやうな事は決してない。だから思想が該博にして總ての物がよく分るといふ、獨得の長所があると共に、自分が思潮の中心となつて、大なるムーブメントを起すといふやうな事もない。坪内さんなどは時として自ら渦中に投じ、傍のものからも擔がれて、終に手も足も出なくなるやうな事もあるらしい。鷗外さんは擔がれるやうな事は決してない。擔がれさうになるとツイと逃げる。鷗外さんが官界に成効して居るといふのも、さういふ點がある爲めだと思はれる。

○鷗外さんは評論を以てよりも「水沫集」其他の飜譯を以て文壇を益した事が多い。今日に至ては文壇が一般に進歩したから「水沫集」を讀む必要もなからうが其當時は非常な感化を及ぼした。鷗外さんの此頃の作物の批評ですか、それは私はいひたくない。此の位て御免蒙りませう。よいやうに書いておいて呉れ給へ。

△森鷗外博士

星雲子

○鷗外博士は常に少數を動かし、其動かされたる少數を通じて文壇に大いなる貢献をなしたり。然れども今日の博士は最早や文壇の大勢を指導するの中心力にはあらず。博士は「昴」の如く僅かに七星を統括して天の一方に異彩を放つに止る。

○博士の近作皆讀むべし。明晰、簡淨、一點一劃のソツなきに於ては、流石に老手なるかなと嘆ぜしむ。思ふに博士の頭腦は明鏡止水の如くなるべし。來るもの徂くも悉く其眞相を其面に映さゞることなし。而して博士の手腕は牛を解くの庖丁の如く、刄を遊ばして以て、其映じたるものを紙に落す。博士の作を讀んで若しアラを拾はんとするも恐らくは徒勞に畢るべし。

○博士の作、稍々學者的臭味を帶ぶるに於て、漱石先生の作と似通へる節あり。然れども漱石先生の作には瑕疵百出す。今日の作家中、若し瑕疵の最も多き人を

求めば、恐らくは漱石先生ならん。此點鷗外博士のとは正反對也。然れども漱石先生の作には處々にたまらなくよい處あり。興動いて得意の箇處に逢着すれば、筆飛び墨躍つて、讀者を引込んで作者想像の天地に遊ばしむる力あり。而して鷗外博士にさういふ點は少しもなし。漱石先生には哲學者の分子と共に詩人的分子あり、鷗外博士には文學者の分子と共に科學者の分子あるが爲めならん。

○鷗外博士の作最も惡るき意味に於ても、旦那藝の最上なるものにして、よき意味に於ていへば、修養ある、模範的紳士の、垢拔けしたる、好藝術者也。あれて、今少し熱あり、濕ひあり、光ありたらば殆んど一世の敬仰する處となるべし。

○醫科大學の敎授、概ね鷗外博士を好まず、而かも何人も「森は頭腦(あたま)がよいからな」といつて居る由、博士の醫界に於ける技倆も畧ぼ察すべし。

○「ジョン、ガブリエル、ボルクマン」の飜譯、原文には忠實なるべけれど、あの臺辭が今の日本の俳優の口に乘り、又今の日本の觀客の耳にうまく合ふべきやは疑なき能はず。脚本の飜譯に至ては鷗外博士遙かに逍遙博士に及ばず。

○鷗外博士の作其ものが、如何なる時代まで傳はるべきかは疑問也。而かも明治文學に及ぼせる無形の感化に至ては永く後世に傳はるべし。

△森先生

小山内薫

先生は今まで文壇の人に大分誤解されてゐたやうに思ひます。近頃先生がさかんに創作をされるやうになつて、先生の眞の面目が稍世間に認められるやうになつたのは喜ばしいことです。善にもせよ惡にもせよ自分の總てを暴露して、自分の總てを世間に見て貰ふ程心持の好いものはありません。今まで先生は御自分の一角ばかり文壇に見せてをられました。文壇も亦先生の一角ばかり見てゐたやうです。

先生は決してクラシシズムの人でもありません。決

して窮屈な審美學者でもありません。又決して文壇の老大家でもありません――但しこれは私一箇人の考ですから、先生からは否定されるかも知れません。

先生が「舊人」でなくて「新人」だといふことは、先生の古く書かれたものを讀めば讀むほど分ります。「つき草」の序文や、「歌舞伎」の第三號あたりに歸休庵といふ名で小倉から投書された手紙などを讀んで見て、さてその年代と日本に自然主義のさかんに稱へられ出した年代とを比べて見ると、思半ばに過ぎるやうな事があらうと思はれます。

長谷川二葉亭先生も日本文壇の先覺者でありましたが、森先生もこれに劣らぬ日本文壇の先覺者であると信じます。

「審美新説」や「審美極致論」を精讀して見ると、先生が決して作家に對する同情のない窮屈な審美學者でないといふことが分ります。先生をdogmatic criticだと思ふ人はまだ先生の説を精讀しない人です。

私がまだ大學の學生時分でした。或日先生をお訪ねした所が、脚本の話が出ました。その時私は「私も脚本を書いて見ようと思ふのですが、何分まだ世間を知らないから駄目です。例へば夫婦關係といふやうなものを書かうと思つても、全く自分に經驗のないことですから困ります。脚本といふものは年をとらなければ書けないものゝやうに思はれます。」といふやうなことを申しました。すると先生は例の人をひきつけるやうな微笑を含まれて「だが君、いつまで經つても世間は分るもんぢやないよ。僕の年になつたつてやッぱり分りやしない。だから、そんなことを考へないで、ドシ／＼書くんだね。」といふやうなことを言はれました。この言は未だに私の心に深い印象を殘してをります――先生は決して「經驗」を振廻す老大家ではありません。

先生は三四年前から始終斯ういふ風なことを言つてをられました。「僕もまだこれからだよ。これから大にやるつもりだよ。若い人達にまけずに大に勉强するつもりだ。」との言もこの頃になつて思ひ當る所が多う御

坐います。

先生に就いてはまだ澤山申上げたいことがありますが、突然のお尋ねても御坐いますし、先達中の旅行て大分疲れてをりますから、これて失禮します。

兎に角この説は先生に惚れてをる男の説としてお聞き下さい。（八月二十日）

△醫學界に於ける森鷗外氏

（スバルに出てしヰタ、セクスアーリスと對照し見ば一層の味あらん）

大野豐太

往年高山林次郎氏が太陽誌上に於て「友人に與ふる書」といふ長論文を公にし、文學が出來ると一向その本業が出來なくなる、此專門以外に特色があると、專門の方は疎かになつて仕舞ふものと一般に言はるゝその妄を破し、多くの人の例を擧げて極論した、當時有名な論文て頗る痛快の文字てあつた、昔から醫士て文人を兼ねしものは我國には多かつた、殆んど列擧し難い程てある、明治になつてからても文人の資格ある醫士は決して少くない。世に知れぬものも多いが、知れたものも亦多い、森鷗外氏の如きはその中の極めて著名な人物てある。

鷗外氏を以て單に有名なる文人とのみ看て仕舞ふことは鷗外氏を品隲し盡したものてない、醫學者としても隨分氏は功勞ある人と思ふ、一時は鷗外氏は文士てあるから本業の醫學の方の智識は御留守てあるなどと稱し、氏の醫學上の智識を疑つたものさへあつたが、其等の人は醫學上の事情に暗きもので、余等は此方面から見ても決して凡庸の醫士てはないと思ふ。文學上からの批評に就ては或は毀譽樣々有ろうと思ふが、その方面の事は一切他の評家に任す事とし、私は世間にまだ能く知られて居らぬ鷗外氏の醫學上の經歷をば在りの儘に紹介して見やう、即ち氏の生時から今日に至る迄の履歷を順序立てゝ御話するといふ體裁になるんだ、或る意味よりすれば、寧ろ文學以外の森鷗外一代記と見做すべきものである。之を氏が文學上に於る經歷と對照して御覽なさる方があれは面白からう。稍最

近鷗外氏の作 Vita sexualis（ヰタ、セクスアーリス）と比較する時は、更に興味が深かるべしと思ふ。

森鷗外氏は文久二年正月十九日を以て、石見國鹿足郡津和野橫堀に生れた、明治三年に初めて蘭學を學ぶ準備として、先づ父靜男に就いて和蘭文典を學んだ、が父よりも更に勝れた蘭學者、室良悅といふ人があり、氏は更に轉じて此人に就いて學んだ、此室良悅は後名を研と改め、今猶ほ存命して相州に居る、明治五年に父に伴はれて東京に出、西周の家に泊つて本鄕は壹岐殿坂の進文學舍に入り獨逸語を學んだ、之は東京醫學校（後に東京帝國大學）へ入る準備としてゞある、斯くて二年を經て東京醫學校の豫科へ入つた、その時年は十三歲。學校は下谷の藤堂屋敷にあつたのだが、その後本鄕元富士町に引越したものだから氏も遂にその寄宿舍に入つた、明治十年に東京醫學校は東京大學醫學部と改められたが、其年に氏は本科へ入つた、次いで十四年の七月四日に愈よ大學を卒業した、時に二十歲てあつた。

同じ年の十二月に陸軍軍醫副（中尉相當官）となり、東京陸軍病院（今の第一衞戍病院）に奉職した、時の課長は八杉貞雄といふ人で今の外國語學校敎授八杉貞利氏の父であつた、鷗外氏とは同鄕な相てある、當時軍醫となる人は殆んど陸軍の貸費生ばかりであつたのに、如何にして軍醫となつたかといふと、氏の父靜男は時の軍醫總監松本順の弟子であつた、その緣故からして先輩の西周と石黑忠悳との間に交涉があり、遂に採用せられる事となつたのである、西周はその頃陸軍大丞、石黑はその頃軍醫本部次長であつたのだ、若し鷗外氏にして此時身を陸軍に投ぜず、大學に留つて助手でもして居たなら夙に敎授となつたに違ひあるまい。が今の通りで却つて宜かつたかも知れぬ、その爲に讀書の暇を得て餘力を文學に揮ふことも出來たのであろうから。

明治十五年の五月一日に軍醫本部（今の陸軍省醫務局）の課僚を命ぜられ庶務を扱つて居た、時の課長は長瀨時衡て靜石と號し漢籍內典の素養があつて、當時

の軍醫中珍らしき人物であつた。此處で鷗外氏は普魯西の陸軍衞生制度取調を命ぜられ、プラーゲルの陸軍衞生制度書を基礎として大部の著述に從事し、翌年三月功成りて遂に醫政全書稿本十二卷を編み、之を官に上つた、之が鷗外氏洋行前に於ける唯一の大著述であつた、此勞力が因を爲して翌十六年六月七日獨逸へ留學を命せられ、衞生制度の取調を兼ねて衞生學をも修めさせられた、八月二十三日に出發し十月十二日伯林に着するや否や、丁度その頃橋本綱常氏が大山陸軍卿に付いて同地に行つて居たので、制度は谷口謙を別に呼んで取調べさせるから、足下は只衞生學をのみ專攻せよとの命を改めて受けた、その結果氏は同年十月ライプチッヒ大學に趣きホフマン氏 Prof Franz Hofmann に就きてその敎室の仕事をした、此年一等軍醫(大尉相當官)に進む、翌十八年十月軍醫講習會に參加する爲にドレスデンに行く、此軍醫講習會の主裁者はウヰルヘルム、ロート Wilhlm Roth といひ、當時英國に於けるパークス氏 Parkes と並稱され、軍陣衞生學界の二泰斗と仰がれた人だ、翌十九年三月ミュンヘンに趣き五月同大學に入り、ペッテンコーフェル氏 Max von Pettenkofer の敎室に入つて勉强し、その結果翌年四月迄に左の二業績を作成した。

「ビール」の利尿作用に就て (Ueber die diuretische Wirkung des Bieres.)

石竹科種子(アグロステンマ、ギタゴ)の解毒に就て (Ueber die Entgiftung von Agrostemma githago)

同時に又左の論文をも公にした、

日本兵士の食餌に就て (Ueber die Kost der Japanischen Soldaten.)

以上三種は衞生學資函 Archiv für Hygiene に掲出せらる。

明治二十年の四月伯林に行き、ロベルト、コッホ氏 Robert Koch に就いて勉强する樣になり、その敎室で黴菌學上の技術を修めて左の論文を公にした。

伯林市水道に於る病的細菌に就て (Ueber pathogene Bacterien im Berliner Canalwasser.)

右は衛生學雜誌Zeitschrift für Hygieneに出づ、

翌二十一年七月迄伯林に在り更に次の論文を作り、之をウイルヒヨー氏 Rudolf Virchorw に依托して世に公にした、即ち人類學會論文集 Verhendlungen der anthropologischen Gresellschaft の一篇なり。

日本住家の人種學的衛生學的研究 (Ethnographisch-hygienische Studie über die Wohnhäuser der Japaner.)

その他に小著述は澤山ある、又小池氏の鷄林醫事の獨逸譯 Drei Jahre in Korea 一卷がある、同年七月三日に伯林を發して英佛を經由し、九月八日橫濱に着して東京に入つた。歸るや直に軍醫學舍即ち今の陸軍々醫學校の教官となり十一月二十二日に陸軍大學校教官に兼補せられ、衛生學の講座を受持つた。

それから二十二年の七月五日兵食試驗委員を命ぜられ、此より十二月二十二日に至る迄、日本兵の食物檢査をし、その成績は二十五年に至りて公にせられた、二十三年には二等軍醫正(少佐相當官)二十六年には軍醫學校長心得、その十一月に一等軍醫正(中佐相當官)同時に校長に累進した、更に同年十二月に中央衛生會委員となつた、その後は日清戰爭の折に從軍し、二十八年五月二十二日に凱旋して更に臺灣行を命ぜられ、その年に軍醫監(大佐相當官)となり、九月に同職を免ぜられ軍醫學校長事務取扱となり、十月四日に內地へ戾つて更に軍醫學校長となつた。三十一年には近衛師團軍醫部長、兼軍醫學校長となり、三十二年に再び軍醫となり、第十二師團軍醫部長に補せられて小倉へ行つた、それから三十五年三月十四日第一師團部長となつて東京へ歸つた。

三十七年の三月から例の日露戰役に從軍し、三十九年一月七日戰地より宇品へ還り、十二日東京へ入つた、四十年十一月十三日遂に軍醫總監に進み、陸軍省醫務局長となり茲に初めて中將相當官となつたのである、其後鷗外氏關係した事業を次に列擧すると。

第一、腸窒扶斯豫防法を根底から改正したこと

第二、脚氣調査會の會長となりてその事務を處理

したこと、その時委員をバタビヤに派遣し、「べりべり」病と脚氣との全然同一なるを確認するに至つた。

第三、軍隊衞生に關する諸般の教科書を改定した事。

第四、陸軍看護卒制度立ちて義務兵の看護者を使ふ事とした事。

第五、陸軍に於て常設轉地療養所の實施に着手した爲、將來に於ては倍舊の恢復期患者をして氣候療養を受けしめ得る事。

等である。今試みに現今鷗外氏の位階官等を言つて見ると頗る長い、即ち左の通りである。

陸軍省醫務局長、陸軍軍醫總監、從四位勳二等、功三級、醫學博士。文學博士、森林太郎

兼務としては更に中央衞生會委員、日本藥局方調査會委員、臨時脚氣調査會委員、美術審査委員、教科用圖書審査委員、大したものである。

要するに鷗外といふ人は、その醫學上の論文及びその調査したもの等を調べて見ると、非常に綿密である、筆達者であるからでもあらうが一事をも漏らさず書くといふ方である。無論鷗外氏の論文が皆一代のエポッマッヘンドと推すべき大發見的論著のみとは思はぬけれども、陸軍兵士の食物調査成績の如きは日本の醫化學上に貢献する所甚だ大なるものであらう。現にそれは帝國大學の講義に資せられ、その表は教室にも掲げられて居る程であるに見ても、有益なる研究の一つである事は想像される。

兎に角醫學者として醫學上に於ける鷗外氏、杏林太郎氏は、十分醫學上に於ける功績を現はして居る、平凡な者にはとても出來ぬものである、して見れば氏は一面文學上に彼程の名を發揮する頭を有すると同時に、又一面醫學上に同樣の功績を擧げ得る能力ある人である、然るに文名餘りに高きが爲に、醫學上の事は唯一部少數の醫學社會の人にのみ認識されて、廣く世間に漏れぬのは遺憾と思ふ、私は鷗外氏に何等緣故ある者でないけれども、氏の經歷及功績を隱れたるより現さんが爲に敢て此處に縷陳した譯である。(談話筆記校閲濟)

△森林太郎君に付て

男爵　石黒忠悳

鷗外氏の文名餘りに一方に高きが爲かは知らず、兎に角餘所目には官等の進級頗る早く、今はその至るべき極に至れるにも拘らず、世間尚ほ醫學上の實際の造詣を往々にして疑ふものなきに非ず、男爵は最初の森氏推薦者とも洩れ聞く、就いて親しく其批評を承りたしとの問に對し、男爵の答へらるゝ所のもの即ち下の如し。

森君を最初陸軍に取つたのは余だ。それだから余の處へ批評を聞きに來るなどは間違つて居る、誰が惡いと思ふものを取るものか、それに對して批評を求めれば只善良と褒めるより外有りはせぬ、それでは本當の批評にはならぬ、だから此批評は一切堅く御斷りをする、斷はる方が無理じやなく聞きに來る方が無理なのぢや」。

うむ、左樣か、それならば言はざるを得ない、私が兎に角何人にせよ推擧し進級さしめたものに對して、その智識能力を疑ふとあつては、兎もすれば石黒がその能にあらざるものを引いたといふ事にもなる、すれば上下に對して職責上相濟まぬ事になる、それ故世間の疑惑に對して自ら辯解者となる責任があるから話さう。

私の職任上抱いた大主意は斯うである、我國の兵制は壯兵でなくて賦兵である、平等に割り當てゝ銘々の愛重する獨子獨孫をも徴募するのだから、その病み傷く等の場合には一層心を用ひて身體を保護してやらなくてはならぬ、それにはその國の最高教育を受けたものを擧げて衞生醫務に當らせなければならぬ、て行く〳〵は盡く帝國大學の卒業生を以てその任に就け度いといふ考て居た、だから當時は他の方よりも、實際予の所に最も多く大學卒業生を採用したものだ、衞生部丈で七十人も居た。其頃は官省でも一省で如此多くの學士を置いてる省はなかつた、況や一局部に於ておやであつた、が陸軍には嚴重な規定が有つて、初めて採用するものは少尉相當以上にはせぬ事になつて居る、少尉相當では月給が僅々二十餘圓位の俸給で無いか、處がその頃大學の卒業生といへば、何處かの病院長にでもなれば直に百五十圓位は取れるものだから、誰と

て望んで割の惡い陸軍へ來るものはない、據なく其處て大學へ依托生なるものを送つた。その第一期の依托生中には菊池(常三郎)谷口(謙)、江口(襄)、小池(正直)などいふ面々が居つた、孰れも頭の拗ねくれた手におへぬ連中であつたが、それだけに見所あつて採用したら皆立身した。然るに森は依托生でない、それであるのに此割の惡い陸軍へ來たいとて自分で志望した、それが第一、一風變つて居て面白いと思つたし、二つには森は二十歳で大學を卒業したからね、之も珍しい、三つには彼は當時或る外國教授に憎にせがまれて居たので、點を惡く付けられたものだが、それにも拘らず、矢張り他のものよりは成績點が優つて居る、仲々有數の秀才だ、加之私の樣な斯う言ふ入釜し屋の居る處へ來たいといふのだから、旁々見込む處あつて推薦したのである。

が重に役所に居て隊には附かなかつたよ、頗る役所ては勉强して居つた、て遂に衞生學專攻の爲に洋行を命ぜられた特にその中でも營養の事に骨々折つたのだ、洋行して戾つた頃には文學が非常に好きて色々なものを書く、文名が次第に高くなるに連れて著述も亦段々世に出た、文學上の作物には軍人に不向のものが多い、て今日とても軍人と文學とにはその間の思想上に甚だ超ゆべからざる鴻溝が劃せられて居るのだが、當時に在つては更に今如きては無い、周圍のものの考は森君等の考とは非常の懸隔がある。て色々の事を聞いたものだ、彼の樣なものを書く者を官途に置いては如何の斯樣のと、世間でも言へば、陸軍樞要に當る人もいふ、特にその上長迄も言ふといふ次第であつたが、併し私は動かされない、勤務さへ滿足にすればその他の事は干渉する限りで無い、人の趣味に迄立入つて一々指圖する必要はない、畵を描くも書を書くも、又碁を打つも、皆銘々の趣味である、孰れが善くて孰れが惡いのと言ふべき譯はない、畢竟一事に勢力を集注するものは他方に又娛樂を取つて欝を散ずる必要がある、此と彼とは相妨げざるのみならず、後者は却つて前者の養を成すものである、碁の爲に勤務を疎かにした、病氣と稱して欠勤したから行つて見たら何くんぞ知らん頻に棋局に對して烏鷺を戰はして居たとかいふ事ならばこれは問題だが、左も無き限りは構はぬもよい、文學將た一種の趣味である、森君が之を嗜むからといつて、一方職務に精勵して居る以上は何等の不都合無いては無いか、石黒は職務の外に、著述(尤も階

てはあるが）を好み、茶儀を好み書畫を好みつゝあるてはないか、斯ういふ意見で以て他人の言ふ事は一切聞入れなかつた、實際森君は勤務に於て非難を受くべき餘地を作らなかつた。

一時森君が擔任されたのは日本兵卒の食料の研究であつた、當時は兵の食物は、一人一日に米六合金六錢と定められてあつたが、學問上果して之で適するか不適か、根柢ある研究が必要である。此調査研究を彼に命ぜられたのであつた、一寸聞けば何でも無い樣だが如何して左樣でない、英は斯樣だ、佛は斯樣だと唯外國のものに縋り、それを飜譯する丈なら朝飯前の茶漬でたわいも無い事だがそれでは濟まぬ、我國は歐米と民の常食が違ふ、それで今日迄人口は增し知識は進み來て居る、すれば、從來の食物か決して不良ではない、不良でないとしても學問上の確かなる研究に依る一大理由が無ければならぬから、其研究をせねばいかぬ、森君は獨逸留學中特に其の研究方を學習し來たのでその任に當つが、實際如何樣な勞苦をしたかといふに、仲々尋常の事ではない、或る步兵聯隊の各中隊から兵を選び出して軍醫學校に居らしめ、軍隊所定の食物を食はし所定の軍務に服させ、そして一滴の小便、一度の大便をも殘る所なく悉く收めて定量分析を致し二年餘の歲月を要したのである、その結果が彼の第一回陸軍兵食檢査報告となつて現はれたのである。第一事でも森君は實學に勉めらるゝの證據である、一方に苦む所あれば一方に樂む所がなければならぬのは人間の常だ、森君が趣味嗜好を文學に有し、その方で樂むからとて何の構つた事があらう。だから私は頑として衆評には耳を假さなかつた、

だから余は森君が停年か來ればいつても、ドシ〳〵陞任をさせたのだ、余が森君に對する當時の意見は大凡如此である、何にしても森君は文學上に非凡の雄才を有して居るといふことは其學生たる間には同窓の諸氏、已に卒業してからは余輩如き其上長たる者、正に其著を世に公にされたる時は世間で稱贊して居るので今は身陸軍衞生部の首長となつて重き任務を荷ふて居らるゝが森君の才森君の嗜好といつたら其任務多忙の中で、文學界に時々大作を出さるゝ事が決して難事でも何でもなかろふ、石黑が茶を嗜むも同し事で、嗜好は年一年と深くなり又進むものたから、是から先きが、益々森君の雄作が世に現れ出るだろう

（座談筆記校閲濟）

登嶽記

黑頭巾

其一

●今年六月、吾輩歸省して、老母を迎へ、侍して東海道を過ぐ。

●天、好晴、富士山の姿、玲瓏として車窓に映ず。老母年六十九、此日始めて富士山を望む。

●老母喜、面に溢る。屈指すれば、此日、陰暦、母の誕辰に當れり。老母、更に喜んで、深く、幸福を感ずるものゝ如し。

●登岳は、吾輩の素願なりしも、機縁未だ合せず。今年に至る。

●老母と富士山を望むの日、油然として登嶽の志、磅礴して止む可らず。

●幸然。親友秦岳居士登岳を慫慂するあり。意を決して裝を促がす。

其二

●吾輩の登岳行を決するや、理裝は一に之を「おろら平」に謀る。而して人に逢ふ毎に、既に富士山に登るや否を以てす。

●古稀菴を訪ひ、公山縣に謁す。問ふて曰く、公嘗て富士山に登るや如何。公答ふ未だし。

●吾輩、則ち故博士伊東圭介の事を引て曰ふ、博士九十を過ぎて登山す、恐らくは登岳の高齡者中、前古未曾有なるべし、且つ近ごろ八十有餘の老媼登山の報あり。公の登岳、尙ほ未だ晩しとせざるべし。

●公、暫らくして莞爾として曰ふ、伯芳川肥滿に苦しむ。山駕籠に乘りて、富士山の絕頂に達す。彼、五十二三歲の時の事也。又た前古稀有の登山者たるを失はざるべしと。

●其の翌日、公に隨つて石垣山に登り、小田原城を附瞰し、太閤の雄圖を懷ふ。

●石垣山は小田原海岸の最高處、之を旅順城に比すれば、勿論二百三高地に當るべし。海岸より登程廿町。而して山上、石垣を存し、本陣の舊蹟、歷々として徵すべし。

●此の要處を占め、臥して小田原城を眺めつゝ、歌舞以て日を涉らば、摺鉢底の强敵も、早晩屈伏せざるを得じ。

●公に侍して古稀菴に歸る。中將藤井茂太來る。彼、征露第一軍參謀長を以て名ある者。吾輩、石垣山の老

松を推點して、公、老健能く登攀に堪へたるを説く。

●藤井曰く、炎天の山戰尤も苦るし。然れとも、日本軍の到處、頗る奇景あり。三十七年、摩天嶺を占領するときの事、尚ほ眼前に在り。

●彼、語を繼ぎて曰く、時頗る炎暑、僕、楊子嶺頭に立ちて望む。日本軍摩天嶺上に漲るや、敵の砲火未だ全く滅せざるにも係らず、不取敢、扇を開きて涼を取るものらし。扇面皆な『日の丸』を畫く。扇面、一齊に、バサ〳〵と摩天嶺上に添ふて動く處、「紅の日の丸」一線天を劃して、一種、崇高の觀言ふ可らざるものありしと。

●何等痛快の光景ぞや。吾輩も亦た、石垣山を望んで、頓に涼氣の至るを覺ふ。

●公一洛畢つて、風簷、清話を試む。曰く、太閤、京都より此山に推し出し來るときは、奥州は既に「一睨」なりしならん。

●山上の口吟なりとて、公の示されたるは、『降らすは、また戰へと、石垣の、城はかなての、音はかりして』

●談、古今の戰術に入りて、興盡くる處を知らず。汽車の時刻近くを以て、辭して伊豆に向ふ。

●涼風袂を吹きて酒匂川を過ぐ。顧れば古稀菴は見えず。富士山の仙姿、天表に在り。

其　三

●汽車、御殿場を過ぐ。なつかしき富士の姿、面を壓して峙つ。觀瀾博士近ごろ此地に避暑す。今日、相見るを得ず、悄然として獨り伊豆に入る。

●伊豆は富士を觀るに尤も宜し。韮山の富士、戸田の富士、殊に畫趣饒し。

●此日、富士山、つねに思を馳せ、吾を送りて情盡きず。山影依々として客窓に滿つ。

●伊豆の江川坦菴は、富士山に得ること多き偉人なりき。彼の句に、

　　里は、まだ夜深し富士の朝日影

朝霧尚ほ深くして、處々、村燈、船燈の如し。早く見る富士の山肩紅を呈するを。

●此句、伊豆平原の實景を盡くすと雖も、蓋し坦菴、心中、又深く自重するところを寓するもの無くんばあらざるべし。

●吾輩、昨夏、觀瀾博士と共に、登山して、『朝日影』を觀んと欲す。事を以て果さず。

●不圖、思ふに、富士山は觀るべき山にして、登るべき山にはあらず。富士の感化は、遠望に依て得べく、

登峯に依て失ふの虞無き乎と。

●遮莫、登岳は吾輩、別に期する處在り。一萬二千尺の天界に上りて、神來に接せんこと、十年の素願也。

●村田清風の歌に、

来て見れば聞くより低くし富士の山、
釋迦も孔子もかくやあるらん。

また是れ、望岳に依て得たる一大感化ならずんばあらず。

●また清風の句にいふ、

治まれる、世は富士山の姿哉。

東湖が、『極天護二皇基一』と表裏相應ずるものにあらずや。

●知るべし、清風は望岳の感受者にして、登岳の感興を有せず。

●秋山玉山は、「帝擲二崙崑雪一、置二之芙蓉東一」の詩を作つて、山陽の痛罵を買得たるもの、而して彼は言ふ、吾に三志願あり、登岳其一なりと。

●崙崑雪一句、吾輩、富士を崇拜する者と、感懷雲泥の差あり、如此人にして登岳を素願とするは如何ぞや。

●大塩平八郎、其の著、洗心洞箚記を携へ、富士山の絕頂に登りて神明に告白す。吾輩は、彼の敬虔なる感懷を喜ぶ者也。

●嗚呼。富士山。吾輩も亦た不日、其の絕頂に登りて、『燃ゆる思』を神明に告白せんとする者也。

●日、漸く沒す。一天片雲無く、初涼漸く到り。蒼黛の富士山、ポッカリとして、一杯に、伊豆平原に浮び來る。

其四

●北齋の『富士百景』、第一頁に、一夜暗黑の大地震を畫く。江州陷沒し琵琶湖を生じ、東海、突として八朶芙蓉を現ずるの意を記する也。

●第二頁には、生靈仰て富士山を瞻るの、平和なる光景を畫く。

●傳へ言ふ、孝安天皇九十二、庚申の歲、雲霧快晴の日、國中の貴賤始めて奉拜せし故に、庚申の年を緣年と稱へて、大祭神事を行ひ、男女に限らず登山を許す事。富士山開闢以來、萬延元、庚申の歲に至るまで三十七度也。

●最近の緣年は、萬延元庚申の歲なれば、維新以來、未だ緣年無し。此次の緣年は、明治五十三年に當れり。

●すべて申の年には、『お山』は賑ふ。昨年、申の歲に當り登山者頗る多く、山上に於ける、種々文明的設備

も亦一新紀を劃するに至れり。

●吾輩は、申の歳の生なれば、登岳には因縁淺からず。申の歳に登山するを得ずとも、身、申の歳を具する者也。

●萬延元の縁年に登山せし老人に聞く。八合目以上の石室、極碗に一杯の水、價八文。岩間の雪を融せしものなれば。自から細塵あるを免れず。絶頂のあま酒、一杯十六文。

●此年の相場は、五合目以上止宿料。

一、四十八文	泊り料
一、百十六文	飯
一、八十文	[illegible]
一、六十四文	かゆ
一、二十四文	雑煮汁
一、十六文	辨當茶代
一、百四十八文	夜具損料
一、百　文	ふとん
一、二十四文	一膳めし
一、二十八文	赤飯
一、三十二文	大わらじ
一、二十四文	小わらじ

之を現代の登山に比するに、恍として數世紀を隔つるの思無くんばあらざるべし。

●萬延元は、櫻田門外の悲劇ありたる時也。今日、國運の發展を以て推せば、來るべき次の縁年は、果して如何。

●若し十二三にして、前の縁年に登山せし者は、老健ならば、善く次の縁年にも登山するを得ん。

●次の縁年には、吾輩思ふに、飛行器以て、絶頂に上下するの時ならん。花の如き人も亦た粉黛を凝らして登山するを得可く、而して「六根清淨」の聲は、空中に滿つるならん。

●「富士山道知るべ」の一書は、五雲亭貞秀の書に成り、富士山志の古書中、尤も見るべきもの、萬延元の庚申に出でたるもの。從來、富士山志の傑作無し。此次の縁年までには、一大傑作出でざる可らず。

●則ち最近、前後の縁年に登山するを得る者は、富士開闢以來、多年なる登山者たるを失はず。

●彼は、參覲交代、御維新、廢藩立縣、憲法發布、日露戰爭、自働車、飛行器等を含有する、世界未曾有の偉大なる六十年史を、山靈の前に披瀝するを得可ければ也。

●諸大名の槍の影、東海の波に映ずるも、廣軌鐵道の煤烟裾野の森に靉靆くも、富士山の仙姿は、綽灼とし

て變らず。朝々暮々、萬古秀づ。

●吾輩、伊豆に在ること三日、客窗の前庭に、老芭蕉十株あり。高さ三間、蒼翠の氣、滃々盎ふ。窓を開けば、富士の山光、「朝日影」と共に、芭蕉葉の陰より流れ入る。

其五

●吾輩は帝都より、同行者泰岳居士は遠州より、同日、富士山下に向ひ、御殿場在の青龍寺に會合せんことを約す。

●聞說、青龍寺の間宮英宗和尚は、戒行清潔、「六根淸淨」を口にして耻じからざるの善智識、須らく登岳の導師と賴むべき人也。

●吾輩先づ御殿場に著し、觀瀾博士を訪ふ。水田の中に路あり。曲がる四辻に、喬木聳ゑて、老農の碑など立てる邊、杉垣疎らなる家の竹屋根なるが。二階の卓上に、美しき舶來のランプの置かれたるに、博士の寓居は、此處ぞと頷かれぬ。

●少時、登岳の準備など話す。田間の風來りて自ら凉。博士と共に舊御殿場驛を過ぎ一里の村道を辿りて、青龍寺に至る。泰岳居士、其甥なる一青年を携へて、既に在り。

●寺は全く、塵寰の氣を絶つ。門を入り、枝垂櫻の老木のある、小高き庭に添ふて曲がれば、玄關の前に出づ。

●枝垂櫻の庭は、沓脱ぎより稍高し。空地に苅萱鷄頭花など植ゑて花壇を爲す。一水、厨の中より出で、花逕を穿ちて來り、玄關の前方に落ちて潺湲の響を爲す手を洗へば淸冷、玉の如し。

●境内廣濶にして、杉檜自から牆を爲し、中に水田あり。寺は茅葺也。

●堂に上りて英宗和尚に謁す。吾輩を和尚に紹介する者は、千山萬水樓主人也。而して泰岳居士は、主人を和尚に紹介するの人也。

●和尚は、竹を割つたる如き人也。初見の人をも親信せしむべし。

●和尚言ふ、駿河風土記にいふ、役小角、龍を化して佛體と爲し、其處に一寺を立つ。青龍寺の起源也。

●芙蓉山下の青龍既に化して佛となる。後世、畫工、富士越しの龍を畫くものあるは、抑も杜撰なるべし。

●僧堂は、淸風つねに吹き生ずるなるべし。北には三逕の水田あり。東には心字の小池を穿ち、水溢る丶計りなるが、折から萩花うねくく繚亂して岸を蔽ひ、尺

餘の鯉魚群游自得す。

◉觀瀾博士語る。去夏登岳の砌、日既に傾きて山を下る。須山口に至つて馬に乘る。一行十餘人。夜を衝きて進む。

◉大野ヶ原を過ぐるのとき、既に十一時、月未だ昇らず。篠薄は馬よりも高し。須山の有志者一行の遲きを氣遣ひ、炬火を照らして、打連れて出て迎ふ。

◉一行の前に、ツト差したる松明の光に見れば、村人等は笠を戴き、簔は稲にて編みたるが、森々として針を植ゑたらん如く、サト炬火振りかざしたる有樣、十郎五郎の討入も、かくやありけんと、想ひやられて、登岳の感興、殆んど『裾野の薄原』に留めを刺したるの思ありきと。

◉話頭盡きず、暮色蒼然として至る。杉檜の缺くる處、富士山の肩見ゆ。

其六

◉晩雲忽ち起つて富士山を隠くし。微雨も亦た時に來り、陰晴測られず。明日の天氣甚だ氣遣はし。

◉寺僕富藏夫妻、戇直なり。屡外に出入し、空を眺めて、明日の事、御心配に及ばずといふ。

◉和尚、吾等を案内して、寺内を逍遙す。西側の庭、郊外の景趣を作りなして頗る味あり。萩花咲き亂れ、水細々として流る。王朝の公達、袂を翳して立ち居玉ふべき心地す。

◉垣の外に、老梅一株、霧藻垂る。柏樹あり、古雅也。和尚曰く、此地方、柏樹を重んず。庭園といへば必らず柏樹あり。瀧口某の園にあるもの、老幹亭々、維新前、官三人扶持を賜ふ處のものと。

◉柏樹の、あなたの畑の中に、弦の音す。和尚曰く、昨日男山澤東京より來る。日出、弓を執て出て、日没尙ほ此の如しと。

◉風呂に入りて東京の塵を洗ひ、精進料理に一杯の酒を添へて、徐ろに清話を試む。

◉英宗和尚數度登山す。嘗て劍ヶ峰の絶頂に立ちて、萬歳を絶叫す。刹那、天風蕭然來りて、覺えず地に伏す。

◉男山澤は、驅幹豐滿の偉丈夫也。山を下るとき、馬を雇ひて、片目で跛の牝馬に乘り當て、頗る閉口す。

◉此行、登岳の嚮導は、和尚に豫定す。和尚法用あり、行くを得ず。一行落膽甚だし。和尚、先達を紹介し、且つ警察署に山中の保護を依囑す。

◉聞く、御殿場の田中署長は基督教徒にして、敬虔な

な信者也。快く囑に應じて、且つ速に電話を以て山上に交渉し、一々報告し來る。一行頗る意を強くす。

●先達來り、强力來り、村長も亦た來る。談娓々として盡きず。山より海に飛び、和尙と吾輩と、交々、風濤を壓して未だ嘗て海に醉はざるの奇事を語りて、頗る氣を吐く。

●吾輩嘗て水雷艇に便乘して、伊豆大島に航す。十月の天、秋色一碧拭ふが如く、而かも西風健かに、雪濤舷に當つて、碎けて、濆水の如く。騰ること丈餘飛んで富士山を越ゆ。

●雪濤の濆水、崩るゝこと瀑布の如く、烈日之に映して彩光煥發し、絢爛言ふ可らず。恰も、烟火の垂柳の發して下り消ゆるが如く、而して瀑布の沈みゆく跡に、眞白の富士せり上がる。

●海上より望む富士は、崇高潔白の仙姿、海洋の濕潤せる空氣を透して、一種、不可言の艶美を添ふるもの也。

●時に、雨雲頗る歛まり、空漸く明らか也。池中に鯉魚の躍る音す。

●和尙茶を供す。談端無く宇治に飛び、黃檗山に到り、修養、努力の事に及ぶ、和尙頻りに鐵牛禪師の忍耐努力を說き、一切經版勸化は、逢阪の關路にて、乞食の文久一文を乞ひ得て、奉加帳の劈頭に掲げたる事など詳に說かる。

●吾輩は三年前、黃檗山に到り、一切經版を、納葉書に捺し來りて、家寶とせり。之を日本第一の富士山の絕頂に齎らして、其捺印を得んが爲に、持來れりとて、出して示す。

●此行、吾輩、富士山頂のスタンプを押さん爲め、齎らせる納葉書、百枚を過ぐ。而して、一切經版の納葉書は、最も珍重すべきものに屬す。

●泰岳居士、絕頂にて發信すべき紀念葉書を今より豫め認む。書していふ、『只今、富士山上の絕頂にあり』。

●吾輩一見して、大笑絕倒す。遂に居士に尊號を上りて『絕頂主義』といふ。

●蓋し居士、足未だ下界を離れず。而して神魂早く旣に一萬二千尺の絕頂に飛騰する也。

●居士、吾輩に馬背の經驗を問ふ。吾輩答へ、『間接』に乘れることあるのみ。直接には未だ乘らず。間接とは馬車也。

●和尙哄笑一番していふ。「絕頂主義」と「間接主義」と提携して、明日登山の途、必らず幾多の喜劇あらん。同行を得ざるを憾むのみ。

●浬装畢りて庭外に逍遙す。雲霧全く散じ盡して、大空の藍地に染め拔きたる絞の青紋とも見ゆるは富士山にして、天に星斗爛たり。

其七

●雨かと疑ひ、枕を欹てゝ聽けば、巨鯉の池中に躍りて、潑溂として音する也。

●和尚に先だち戸を開きて、中庭に出づれば、人間夢尚ほ殘れるに、朝氣既に六合に新たに、萬仞の碧玉筍、天半に峥嵘たり。

●花間の清泉に嗽ひつゝ、飽くまで秋曉の氣に醉ふ。牽牛花の『香怀』白露を湛へつゝ、幽人を待つに似たり。

●草木は皆、幽清の艶を帶びて輝き、天地再生の情あり

●山門は、境内の秋曉を管領して峙つ。樓上、風、冷々として吹き渡る處、三箇黒羅漢の端坐して東天を睨睥するものあり。

●和尚、指していふ、是、海軍少壯士官、「神燈之處」を覺めて、來て坐禪するもの也。

●入相の鐘より始めて、朝の鐘に至るまで、夜を徹して、山門に靜坐せしむ。而して和尚は、之に告げていふ、須らく自己の本分と思ひて、出來るだけ、遣つて見よ。

●彼等、此の如く坐禪すること既に三夜、單衣に袴を著け、端坐拱手して、心を丹田に沈め、夜深くして星も移れども、彫める黒羅漢は、少しだも動かず。

●吾輩は、此の敬虔なる態度に感憤し、秋風三子の爲に特地に涼しきの思を爲せり。

●他時、三子と手を分つの時、「安禪制毒龍」の古句を錄して贈れり。

●吾輩は、三子心泉活水の存するを喜び、帝國海軍の爲に祝福す、茲に三子の名を錄して、他年一頭地を放出せんことを期待す。曰く、少尉岩下礫、少尉中川清流、機關學校生徒有門清。

●和尚、吾輩を導きて、山門脇の小潭に至る。潭は秋草の叢にあり、題して神泉といふ。

●潭、淺けれども清冷骨に徹す。昔、役小角の時、小龍の窟宅する處にあらずや。

●潭邊に立ちて仰げば、曉光、山門を射て、羅漢の紅顏を照らし來る。

●山門を出づれば、茫々邱原、遙かに箱根足柄に連る。少し右なるは乙女峠にして、眞向に見ゆるは金時山、山姥が金時を育てし處也。

●足柄山背、次第に明かに、眞紅、尺大の旭日、曈々として峯を離るれば、遠近の草木燒くが如し。

●日出、低くして、未だ富士山の絶巓に照らし到らず。唯見る紅旭、探海燈の如くに裾野を放射するを。

●好し／＼。吾等、明朝、彼の絶巓に立ちて、大紅輪の宇宙を燒照するを見んものを。意氣頗る振ふ。

●僧堂に歸れば、和尚、吾等の爲に、登山安全の讀經を爲す。僕富藏、梅干入りの大握飯二十餘を運び來る。先達來り、剛力來る。

●和尚は、袈裟を朝風に飄かへしつゝ吾等を送つて、寺境盡きて、富士山を縦觀する處に到つて別る。

●曰く、泰岳居士、曰く、仲氏、曰く、黑頭巾三人、心もイツ／＼、草鞋確かり給ひて足も輕く、背笠を戴き、ゴザを被り、直ちに富士山を望んで行く。

●和尚、背笠に題す。筆勢飛揚す。曰く、「同行八萬四千人、絶頂界」

其八

●嗚呼、なづかしき富士山。仙姿、天半に朗かに、サーツと引きたる裳の裾野の極めて麗はしきよ。

●纎雲時に搖曳して、峯にまつはるは、天人の胸に懸れる羅衣とも見ゆるよ。

●吾等は、唯だ「お山」を、なつかしみ、足自ら前みて、不知不識、「お山」に引き付けられつゝあり。

●仰げば、霽顏、愛を含んで、吾等を手招きしつゝあるの思するよ。

●吾輩は、美しく尊き富士山を眺めつゝ、悲母觀音に逢ふの感無くんばあらざるなり。

●實に、吾輩は、山頂を望む毎に、三十二相圓滿具足せる一大靈物たるを感ぜずんばあらず。

●而して吾等は、彼の清く愛ある目に見られ、美しく力ある手に引かれつゝある稚兒なるべし。

●彼の美しく力ある手もて、憧がるゝ稚兒に、「六根清淨」の妙諦を注ぎかけ玉へり。

●吾等は、今「六根清淨」の功德に賴りて、天上界に辿りつゝあり。

●吾輩は、遠くして、白く美しき富士山を望んで、つねになつかしき思を爲せしが、今日、足一歩づゝ山に近づきつゝ、其の力ある手に觸るゝに及んでは、其の『靈』を感ぜずんばあらざる也。

●「白扇倒懸」は、形を見て靈を識らず、富士山を望んで、未だ嘗て『神來（インスピレーション）』を感ぜざるの言のみ。

●吾輩、富士山をなづかしく思ふは、半生之に對して享受せる『神來』にあり。

●野の百合は小さけれども、『神』の「美」の權現也。

三國一の富士山は、地上に於ける「一大美」として、『神』之を人間に下し給へり。

●富士山の麓は、人間界に立ちつゝ。其頂は、尚ほ天上界に接して、神の妙音を人間に傳へつゝある也。

其九

●天人の裳の裾野は、フーワリと廣がりたる、見渡す限り青々として艶に富める絨氈にて造られたるごと、草鞋はスリッパー穿つ心地して、絶頂を眺めつゝ行くこそ樂しけれ。

●電車に乘る。昨夜豫報ありし如く、護衛の査公二君院に在り。種々、富士の話を聞く。

●富士の駿河管内に駐在所の設置されしは一昨年にして、其以來、白衣帯劍、嶺に往來すること既に十度に及ぶといふ。

●電車は勾配の緩處を縫ふて。盤旋して進む。或は一溪の峯を殆んど一周することあり。富士山は、或は左窓に見へ、或は右窓に見ゆ。

●裾野は、秋花亂開し、喬木疎也。或は見知らぬ草なんど咲く。

●馬は瘠せて車の進むこと遲く、窓を漏るゝ煙草の煙は凝つて散ぜず。

●車内の談柄は、登山の方法を以て充たさる。吾輩、査公に問ふ、能く騎して絶頂に到れる者ありや。

●彼答ふ、無し／＼。或は四合半にして回り、或は六合に至つて挫折す。胸突八丁は屏風の如く、駿馬も進み難し。

●御殿場の淺間社に奉納せる神馬、小馬也。現存す。此の納主、馬術に於ける希代の達人也、惜哉今其名を逸す。

●大井川の漲りしとき、彼、此小馬に乘つて渡る。後、騎して、富士山の絶頂に達す。

●蓋し、人と馬と、兩心一體、颯爽として天風に嘶くの英姿、想見するに餘あり。聖徳太子以來第一人と謂ふ可し。

●車中、甲州の客あり、頻りに甲州口の絶景を説く。またいふ、甲州の名物、若尾逸平、八十の老軀を提げ去年、能く歩して絶頂に到ると。

●由來、甲州の人、富士山の駿河を以て著聞するを遺憾とす。機に觸れて、つねに、富士山の大部分甲州に屬することを主張す。

●徂徠の峽中紀行は富士山宜しく甲斐を以て標榜すべきことをいふ。甲州人以て痛快と爲す。

◉抑も、富士山の三國に跨るといふは美稱のみ。其の實は甲駿に分屬す。八合目は甲州の最高處にして、絕頂は駿河に屬す。
◉山の東海に面するを表とし、甲州を裏とす。表の景は正大にして、裏は奇偉也。
◉山の餘脈、足柄に及ぶ故に相州にも屬すといふ。恐らくは緣引に過ぐ。
◉或は、三島に續くとして、山は甲駿豆に跨るといふ說あり。
◉富士の雪、融けて流れて三島女郞衆の化粧の水となるといふもの、富士山を伊豆に引くもの也。
◉三島大明神の後より湧く水、所謂「化粧の水」と稱す。鄕人いふ、此水、富士に通ずと。
◉此水、湧く處、邱を負ひ森あり。茅屋あり、大なる水車架す。川は狹けれども、水渾々として溢る。隨處、渦流を捲き、磅礴して流る。
◉水の美にして且つ多き、此の如きは、世上、未だ見ず。これを山靈の力に寄托するもの、亦故無くんばあらず。
◉水湧處、風景も亦た淡雅。昔し、詩人大窪詩佛此に別莊を築きて、春秋往來、想を練りし處といふ。

◉富士山中、到處、淺間神社あり。而して絕頂に淺間神社あり、奥の院也。本社は駿河の大宮にあり。官幣大社也。
◉富士山は日本の富士山也。八朶芙蓉東海に面して立ち、高明正大の氣、八荒の儀表となる。
◉御殿場より二時間にして、電車、須走口に達す。須走口は百五六十家の驛、景物淸らげ也。來夏、數日の閑を得ば、筆硯を携へて來り度しなど、思ふ。
◉電車は、此驛より甲州街道に向ふ。吾等は車を下り短亭に休息して馬を僦ふ。
◉椽に腰掛けて、繪葉書など書く。庭に夏櫻草、紅白、堆く咲きて、籬の外に、富士山見ゆ。

其十

◉須走驛の外に、縣社淺間神社あり。境内の森を出づれば、精進河なり。此より馬に乘る。富士山は、樹影溪聲の中に在り。
◉馬は皆牝馬、綏かに打たす。路は灰砂にして、歩々馬蹄を沒す。
◉裾野は雜木の山也。脚下は熱すれども、頭は冷に、富士を望んで、風に吹かれつゝ進む。
◉泰岳居士の馬の口取りは十四五の乙女也。居士は長

幹、五尺七寸を踰ゆ。鞍を頼りに、豐かに打たせつゝ絶頂にて試むべき淨琉璃を豫習しつゝあり。
●吾輩先頭に、次は仲氏、居士殿たり。顧れば、口取りの乙女は、前なる馬の尾を手に卷いたり引たりす。居士の眼鏡、菅笠の中に光る。
●須走より半里にして、有名なる逆柳あり。或は大柳ともいふ。非常の老樹、枝幹横生、途を蔽ふ。裾野の一奇景とす。
●逆柳といふは、枝葉上に向つて生ずればなり。今は枝葉共に頗る枯衰す。遠き時は、柳の中に富士見え、近づけば、枝の陰より富士見ゆ。
●古人、文章を造る三上ありといふ。枕上、厠上固より好しと雖も、馬上尤も妙。裾野の馬上に至つては、蓋し古人未だ其の妙味を夢想せざるところならずんばあらず。
●一里松は枯れて、伐られて根のみ殘れり。是より、富士山の頂を見る處無し。唯だ茫大なる山腹を仰ぎ見るのみ。
●須走より二里、阪路茂林の中に入る。是を「馬返し」とす。是より始めて富士の山中にかゝる。

其十一

●軒に提灯を懸け連らねたる廣き板屋根の小屋が、茂樹の間に見え、次に無數の奉納手拭やら、數十の卓と腰掛やら見え、サテハ馬返しぞと見る間に、下段の廣地に、數多の馬と馬車と見ゆ。
●是より上は、喬木叢生、地濕ひ苔密なり。下山者續々來る。
●巡査部長迎て、一揖していふ、僕山を下りて、諸君子を待つこと久しと。いてたち山馴れたる態度也。
●時既に正午を過ぐ。一行の紀念スタンプ運動は早や此より始まる。是より到處、スタンプを漁さりて忙はし
●天梯第一階、清涼自ら下界と別つ。胸を廣げて裾野を指點しつゝ、大握飯を食ふ。頻りに風鈴の音す。
●是より、一行三人、査公も三人、先達剛力と合せて八人、力足踏んで阪路に掛る。
●登山の途、表裏四口あり、甲州よりするを吉田口、表よりするを須走口、御殿場口、大宮口とす。吉と須とは八合目にて會す。
●大宮口は植物帶の研究に宜し。然れども程長くして殊に降山の路、興味少し。
●御殿場口は程尤も長く、且つ草木少し。甲州口は途尤も峻、程尤短し。外に須山口あり。今殆んど廢道に屬す。
●程短からずと雖も、草木尤も多くして、興味あるは

須走口なり。吾等は此口を擇べり。
●喬木天を蔽ひ、此日風涼。居士先頭に立ち、一行を麾きて進む。
●途、存外に急に、大歩に歩まざる可らず。諸君皆長徑。足新たに勢尤も健。矮脚漢は吾輩一人のみ、最初の一里、追隨頗る艱む。
●太郎坊に至つて、金剛杖を求め、「六根清淨」を唱へつゝ、氣分頓に振ふ。足も亦漸く馴る。
●太郎坊を通りて、暫時にして、喬木帶を脱をして、灌木帶に出づ。此に至つて、山景全面裸出し、富士岩の赭黑色なる小石碌々として山腹を蔽へり。
●太陽、頭上を直射し、風茫々として遠くより來り、身は六合環視の中に立ちて、天梯を攀づる也。
●濱梨、石楠木なんど石礫の道に生じて、姿なつかし。各其數本を採集す。
●石楠木は花落ち、濱梨も亦實れり。濱梨は富士の名草也。吾輩思ふに、須らく『破魔梨』と改むべき也。

其十二

●山に入て山を見ず、限り無き豐滿なる、山腹を登りゆけば、半生なつかしみし富士の仙姿は見えず。
●「破魔梨」を見れば、神聖なる宮居に參つて、知人に逢へる心地す。
●「破魔梨」は、苔さへ乏しき礫を力に、咲き出てゝ、低く天風に香ひつゝ、靜かに榮を爲すこそ、憐れなれ。
●稚兒が慈母の懷に入て、慈顏を見ざるが如く、唯だ「破魔梨」を乳豆とも思ひ倣しつゝ、『悲母觀音』の神々しき姿を夢みつゝ登る也。
●圓看すれば、「太郎坊」の森を超えて、裾野の青色、限無く展開し、駿相の山低く、東海の波見ゆ。
●二合目に「室」あり。「室」を營むは母子なるべし、母は四十許、娘は十五六と見ゆ。
●娘は、木綿飛白の單衣を着け、牡丹色の繻子の新たらしき帶を結ぶ。山中の紅一點。
●若し山中雨來りて、『簑は』と尋ねなば、「山吹の花」を差出しそうなる乙女也。

其十三

●足、次第に空に向ひて、二合目より三合目と進む。未だなつかしき絶頂を見ざれども、登岳の『油』漸く乘り來る。
●「六根清淨」の聲、折々列中に響く。呼吸尙ほ逼促せず、警句互に口を衝て出づ。
●山に沿ひて、霧起り、風、下より吹上ぐ。遠景漠々として、浴槽より湯氣を隔てて、山色を望むが如し。
●午前の快晴、山に入つて、雲煙開闔、身は、芭蕉の、「雲霧の、しはし萬景を盡しけり」の中に入る。
●雲霧の屢去來するが爲に、毛髮濕ひ甚だ酷熱を

ず。而して、微雨さへ時に來り、明日の天氣憂慮に堪へず。先達曰ふ、大丈夫……「六根淸淨、お山は晴天」

◉四合半に至る。台あり。中休と決し、須走にて求めしめ來れるパンを喰つて空腹を補ふ。

◉初め、觀瀾博士、吾輩に勸めて、眞綿を豫備せしめ夫人はパンを勸む。昨日、博士携へし、ジャムと牛肉の鑵詰を贈る。

◉此時、パンの袋を開くに及んで、吾等三人手を拍つて驚く。此パンや實に吾輩未だ嘗て見ざるところ、カチ〳〵に乾きて、吾輩の面よりも黑し。

◉此の如きパンをば、吾等一氣に平げて舌を打ちたるは、一にジャムと山靈とに感謝す。

◉此室の横一丁にして、胎内潛りあり。部長の君案内す

◉二十間許の岩洞、奥に水祠あり、安産の神也。各蠟燭を燃やし、匍匐して僅かに進む。

◉部長の君は、敬神家也。頻りに安産神の靈驗を說く。曰く、此の燃殘りの蠟燭を持ち歸りて貯へ置き難産の婦ある時、火を點じて神に禱れば、燃え畢らんまでに必らず身二つになること疑無きもの也と。

◉彼同僚の美髯公、頻りに之に反抗して辯を弄す。部長の君、怒つて、君は人面獸心なりといふ。

◉或はいふ、此の洞内を潛らしむるは、出生の苦を人に知らしめ、以て孝道を訓ふるの意に出づと。

◉洞内、岩片圭角多く、或は誤つて觸れば痛し。天井垂下の一角、吾輩、脊中を打つ。居士後より來て、クス〳〵と笑ふ。續いて、忽ち聞く。居士絶叫す、痛々。

◉初め山に入るとき、吾輩の短軀豐平なるを見て、諸君皆之を侮る意あり。而して吾輩少壯鐵脚以て許せし者、高山に登らざる既に十有五年に及ぶと雖も、亦た心竊かに期するところ無くんばあらず。

◉吾輩心を沈め息を養ひ、徐ろに踵を下して、歩々地に接せしめ、焦せらず、急がず。而して、四合半に至る頃、吾輩既に先頭に在り。

◉雲烟開闔、時々刻々、變化を逞しくし、雨雲沛然として集り、五合目を過ぐる頃、吾等は、全く雲の上人となり了せり。

◉雲は皆白雲、而して下界に在て、未だ此の如き白雲を見ず。神が白綿をヤヶに千切て六合に投げ散らし、投げ散らし、亂れ合ひ、重なり合ひて、互に堆かくミ出し、高低起伏、自ら千萬疊の波瀾を爲すものなるべし。

◉雲海の語は、此に至つて始めて適切なるを見る。富士山より見る雲海は『綿の海』也。山中、古より雲をワタといふ。

◉金剛杖を停むる毎に、吾等は、坐ろに「綿の海」を愛看し、殊に、その濃厚堆凸なる、踏んて渡るべきの感を爲す也。（未完）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學講義錄

各科第壹號
十月初旬發行

新學年開始

法律科講義
政治經濟科講義
文學科講義

各學課義及內容見本付詳細規則申込次第送呈

一年半卒業

本大學ハ時世ノ趨勢ニ鑑ミ華ヲ去リ實ニ就キ全然學課ノ組織ヲ改メテ學年ヲ短縮シ修業期間ヲ一年半ト爲シ講義文ヲ平易明快ト爲シ質問ニハ特別ノ設備ヲ整ヘテ懇切ニ應答シ以テ校外生ヲシテ講究上些ノ遺憾ナカラシム

東京牛込早稻田
振替東京一一二三
電話番町三七四
早稻田大學出版部

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

故綱島梁川著　肖像筆蹟（コロタイプ寫眞版數葉）　箱入布綴新裝定價壹圓貳拾錢　小包料金八錢

梁川遺稿　我觀錄

人生は薄明也、この深大なる嘆きを抱き神を仰いて虛性の修養に心血を注ぎたる著者が宗敎的生活は第一步の足跡を本書にとゞめたり。著者が內生活の眞消息を闡明し、人生の奧祕に靈燈を點せんとする者、本書を措いて又他に求むべからざる也。

故綱島梁川著　紙數菊版四百余頁舶來ラフ紙刷布綴金壹圓五拾錢　小包料金拾貳錢

歐洲倫理思想史

煩鎖なる倫理史冗漫なる倫理學はあり然れど卓拔なる識見精細なる觀察を以て批評的に倫理思想史を說述せるものに至りては世に其適著なし。本書は簡潔雅馴の筆要を摘み冗を省きて其欠陷絕好なるのみならず、世の道義頽敗に心ある者の必讀すべき大著也。

文學博士　重野成齋先生序文　天囚西村時彥著

日本宋學史

菊版總布綴
コロタイプ版
十八葉入
箱入四百五十頁
定價金貳圓
郵稅金拾貳錢

考證的確、文辭精美、天下有益之著

我が國民道德の基礎を尋ねて、儒教の明致を論じ、宋學の神髓たる學論庸孟の四書が、士道教育の普通讀本たりし淵源に遡りて、鎌倉室町二期に於ける傳來流布の事蹟を考究し、儒と禪と武士道との關係より、德川時代に於ける學說勃興宋學一統の狀態に敍し到り、維新の鴻業、明治の文化、並に此に根底するを說きて、以て將來の德育研究に資する所あらんとするは蓋し本書の目的なり、成齋重野博士之を稱し考證的確、文辭精美、天下有益之著と云はれしに徵して其內容を知るべし、曩に「宋學の首倡」と題して「本紙上」に連載されしが、今や著者に請ふて增補訂正を加へ、關係文書を附載し且つ今の名に改めて以て有心者の前に提供す插む所の木像畫像及び古書畫數十種は皆名山の秘、舊家の藏、天下希有の物たるを以て特に精巧なるコロタイプ版となし、以て闡幽顯微の意を致せり、請ふ、風教維持に心ある諸君子、一本を備へて以て研究資料に供せられんことを。

發行所　東京京橋區中橋廣小路（電話本局五七七番）　大阪東區北渡邊町（振替二八二三番）　杉本梁江堂

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼一冊 定價五拾錢郵稅金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ、教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に擬し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一航英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部** (電話下谷九百十九番)(振替東京三十四番)

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

丸善新着案内

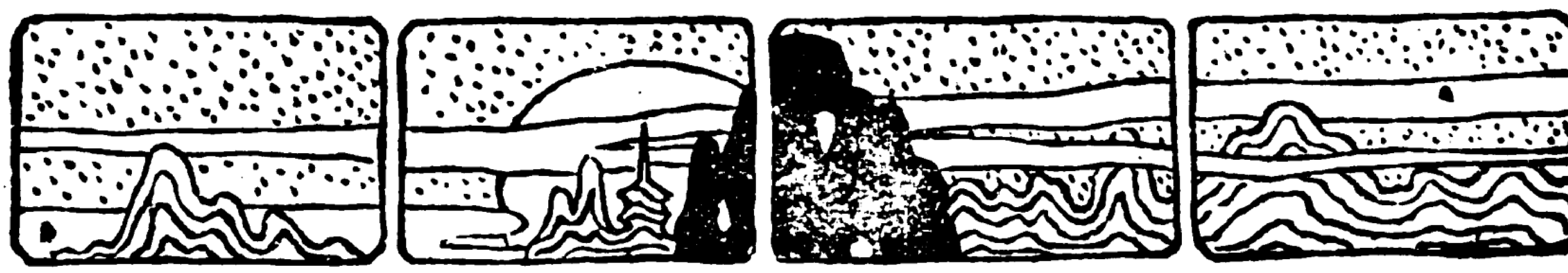
	Price.	Postage.
Fitzmaurice-Kelly, J.—Chapters on Spanish Literature...	4.15	.12
Wilkinson, M. C.—Some New Literary Valuations	3.00	.18
Saintsbury, G.—Essays on French Novelists	3.00	.18
Symons, A.—Spiritual Adventures..............................	3.75	.18
Courtney, W. L.—The Literary Men's Bible....	5.75	.18
Morison, M.—The Correspondence of Henrik Ibsen.........	6.50	.18
Bruckner, A.—A Literary History of Russia	6.85	.18
Faguet, E.—A Literary History of France	6.25	.18
Stanton, T.—A Manual of American Literature	3.50	.18
Courtney, W. P. The Secrets of Our National Literature.	4.15	.18
Eliot, C.—University Administration......	3.00	.12
Bruh, L. L.—Ethics and Moral Science........................	3.00	.12
Kruger, G.—The Papacy..	2.50	.12
Victoria.—Queen Victoria. Her Life and Reign. 4 Vols.	25.00	.48
Maartens, M.—Brothers All.	3.00	.12
Dickinson, H. N.—Sir Guy and Lady Rannard...........	3.00	.12
Norton, R.—The Toll of The Sea	3.00	.12
Bradley, A. C.—Oxford Lectures on Poetry	5.00	.18
Kouprinn, A.—Olessia A Novel	1.75	.12
Watson, C. M.—The Life of Sir C. W. Wilson	7.50	.18
Conant, M. P.—The Oriental Tale in England in the Eighteenth Century	5.75	.12
Neumann, A.—Parsonal Recollections of Wagner...........	5.50	.18
Blackwood, A.—Jimbo A Fantasy	1.20	.12
Herrick, R.—Together..	3.00	.18
Selincourt, H. De.—The High Adventurer	3.00	.12
Stephens, W.—French Novelists of To-Day	2.75	.12
Tolstoy, L.—Plays	1.35	.12
——— —The Teaching of Jesus...............................	1.25	.12
Cannan, G.—Peter Homunculus	3.00	.12
Maude, A.—The Life of Tolstoy................................	5.75	.18
Wenley, R. M.—Modern Thought and the Crisis in Belief.	3.00	.18
Strindberg, A. Swanwhite..	2.00	.12
Lodge, Sir O.—Science and Immortality	4.00	.18
Gordon, H. L.—The Modern Mother	3.25	.08
Dye, J. T.—Ideals of Democracy........................	1.85	.12
Wagner, C.—The Home of the Soul	2.35	.12
Rogers, J. E. T.—The Economic Interpretation of History	1.25	.12
Williams, W. M. J.—The King Revenue.....................	3.00	.12
Balbour, A. J.—The Case Againt Socialism.	2.50	.12
Emerson, E. F.—The History of the English Language ...	3.00	.12

大阪市心齋橋筋
丸善大阪支店
(電話[illegible]七四番)

東京市日本橋通
丸善株式會社
(電話[illegible])

京都市三條通リ
丸善京都支店
(電話[illegible]一七三番)

信用[illegible]撰擇する[illegible]品の廣告掲載は謝絶す



髪

徳田秋聲

僕等夫婦が村へ着いたのは、彼此午後四時の比であつた。

五月の半過であつたが、明い高原地の眞晝は暑さが可成烈しかつた。黒ッぽい間服の肩には、埃が目立つて、石高な道をガタ〳〵と行く腕車の音が、懈い耳に騒々しく響いた。立樹の陰もない廣場から町を横つて、柳井を先に立てた一行は、そろ〳〵町垠から、在の方へと入つて行つた。兩側から軟かい小枝を戰がせてゐる、美しい柳の林を通るとき、一行は眠むさうな目を瞬つて、幌のなかゝら、左手の清い川の流を見遣つた。道端には暑苦しい夏草が茂つてゐるかと思ふと、優しい蒲公英などが咲いてゐた。體の弱い妻は、此の邊まで挽かれて來ると、もう窪んだ目のあたりに疲勞の色が見えた。

柳井氏の家は、村の人家から少し離れた場所に在つた。二方を小川が流れて、大きな黑

門が、丁度瀬の曲り目に架つた橋と向合つてゐた。川縁の空地に枝を差交した胡桃や榛などの繁みが、此の家達にいくらか幽靜の趣を添えてゐると云ふ風の位置であつた。

棟は此の山國に特殊な形で、入ると直ぐ廣い式臺があつた。入口は患者の溜で、大い杉戸に花鳥の極彩色は、さほど古い物ではなかつた。

この部屋から、暗い中の間を通ると、そこが即て客間で、ツル〱した栂の椽に、庭木の青い蔭が冷々と映つてゐた。私が其處へ導かれて餉臺の前に坐ると、少時してから妻も子供も、ぞろ〱と押されるやうに茶の室の方から入つて來た。

柳井氏の老母が、それと同時に、ニコ〱した顏をして現れた。この老母は、今年も、つい此の月の初に、東京へ出て來たばかりで、僕等とは、長いあひだの昵みである。――此處から十里ばかり西の方の人で其の次男の柳井氏は、故あつて出て、此の家を繼いだのである。

「かう云ふ淋しい處で……」と柳井氏はモーニングを、いつかネルの單衣に着かへてゐた。昨日柳井氏は町の溫泉に僕等を訪ねて、今日は僕等が此處へ導かれて來たのである。

「何處を見ても山ばかりで、見るものも聽くものも有りませんねえ」。老母も恁う云つて、東京で聽いて來た義太夫の面白い事などを話出した。

茶を飮みながら、話してゐる人々の顏は、庭木の翠で蒼く見えた。庭には矗々と、ひよろ長い槇や松の立樹が、隙間から紅い躑躅の花などを見せて、遠い垣根の外の、高い田圃路には、をり〱荷馬が通

つて行つた。僕等は、いくらか濕々した此處の空氣に、胸がスツとして來た。二週間の餘も稚い子供を多勢引連れて、あちこち歩廻つた、遣瀬ない思も、左に右此處では落着くとが出來た。

僕等は間もなく、柳井氏の細君に逢つた。細君は老母の横に愼ましげに坐つて、初對面の口誼を述べた。年は二十六七であらう、質素な身裝をして、丸髷の髮なども引詰めてゐた。角いやうな輪廓の顏で、睫毛の長い目が凊しかつた。

「兄さんの御案內て、到頭多勢で出てまゐりまして……」と、妻は、此處なら、自分の村と同じに、氣兼なしに子供を手放しておけると云ふやうな心持で、狎々しい調子で、心ばかりの土產物などを、隅の方へ押遣つた。

細君は、少時すると「さあ、萬望お召替へなさいまし。お心持わるいでせうけれど、わざと惡い物を出して來ましたから」と、メレンスの襦袢に黄味かゝつた茶縞の綿入、帶に背負揚まで添えて持つて來てくれた。宿に荷物を措いて來たとを、柳井氏から聞いたのである。

妻は、次の部屋の隅の方へ入つて、着替をして了ふと、ぎごちないやうな樣子をして、出て來た。

「眞實にしやれた帶だこと」と、此處らには、些と見なれぬ柄合の帶の胸を叩いた。

「お冬は茶縞が所好でね。――でも着物は幾許でも持つてゐるて」と云つて、老母は溦笑をした。

「然てすてね」と、妻も淋しい笑方をした。「でも田舍ぢや着るともないてすつてね。」

「一生簞笥に仕舞つておくだわね。東京のやうな、流行ものは着られやしねいわの。」

女連はもう恁云ふ話を初めてゐた。柳井氏はニヤ〳〵笑ひながら、「養父なんぞも、莫迦に着物を拵へ込んだものだね。手を通さないやうな品が、いくら有るか知れやしない。それで死んで行く時は、矢張經帷子一枚なんだから……。」

子供は、老母が連れて來てゐる柳井氏の姪と一緒に、もう裏庭へ出て遊んでゐた。其處からコッコッコッと云ふ鷄の聲が聞えた。子供にお愛相を言つてゐる細君の聲もした。

庭にはもう日が蔭つて、晝間と打つて變つた薄寒い、荒い風が吹いて來た。

灯のつく時分に、餉臺のうへに、大きな廣蓋が運ばれて、賑かな夕飯が初まつた。

酒が二銚子も替へられた頃、妻は小い猪口をうけて、「姉さんは眞實に如何なすつて。ちつと此方へも出ておいでなすつたら如何ですね。」と聲かけた。

「いゝえ、あの人はまあ……」と老母は口のうちで言つた。

「おい、冬……。」柳井氏は呼んだ。

細君は私と入つて來て、一トわたりお酌をすると、自分にも少しばかり嘗めて、又何時の間にか引込んで行つた。然した引込思案の質とも見えぬのであつた。浮いた一座の話を聞くときの目の色は冴々してゐた。

自分等が、此處の二階に床を延べてもらつたのは、もう十時であつた。

翌朝目がさめると、白い窓帷から目眩いやうな日光が、部屋一杯に漂ふてゐた。

妻や子供の脱棄が、衣桁に一杯かゝつて、其處らには、口を開けた鞄や、化粧品のやうな物が散かつてゐた。金具の嚴めしい簞笥のうへには、被布のかゝつた大振の鏡臺が据つてゐるだけである。押入には、夜具や行李――差當り用のなささうな調度が、うんと詰込まれて、此處は滅多に人の上つて來ぬ處らしい。

自分はマッチを摺つて、莨を喫しはじめた。血管には、今朝はすが〳〵しい血が充ちてゐるやうてある。莨の味も、何時にない辛くはなかつた。僕は思ふさま手足の節々を伸して、少時マシ〳〵してゐた。子供は悉皆疲れてゐたと見えて、まだ深い眠に陥ちたまゝである。呼吸道も健かであつた。恁して靜と寢てゐる朝間の裕かな心持は、然し長くは續かない。子供は間もなくムク〳〵蠢めき出した。續いて、妻もウト〳〵してゐた目を懈さうに睜いて片端の方から、子供の顏を見比べてゐた。子供は不思議さうに四下を見廻してゐる。

「こんな部屋の眞中に、暢々と一月も寢て暮したら可いだらう、」と自分は高い天井を瞶めながら、呟いた。

「然うしたら又、どんなに苦しんでも、東京の方が好いと思ふやうになるでせう。私はあの蛙の聲を聞くだけても、厭な氣がしますよ。姉さん達は、よくこんな寂しい處に辛抱して居られることね……どんなにお金が有つたつて腐るほど着物があつたつて、一生それを着る時がないと云ふのも詰らないもんて

せうね。」

妻はそれから此處の細君が、白粉一つ塗つても、彼此村の批判が煩いといふことから、朝、顏を洗ふのに石鹸一つ迂濶り使へないほど、近所の口の喧しい處だと云ふことを話出した。

「晩方二人て、ちよつと其處いらを散歩てもしやうものなら、もうそれこそ大變なんてすつて……。」

子供は昨日の鷄のことでも憶出したか、此時急に體窟さうな體を、むつくと起出した。

楊子を啣へて、階下へ降りると、何處に誰が居るか、ちよつと解らなかつた。自分は庭下駄を突かけて椽先から庭へ降りて、靜な木立の中へ入つた。木の下枝や苔は、まだ日に照されぬほどて、小禽の聲などが聞えた。そこから診察臺の中を窺ふと顏の蒼い、若い書生が、椅子に腰かけて書見をしてゐた。傍に、ギヤマンの金魚鉢に、青い藻が涼しさうに透けて見えた。書生の落着のある目が、をり／＼其中の金魚に注がれる。如何にも靜かな心持てある。この壯丁の然した姿は、村醫者として、十里四方に德望のあつた、先代の靜かな生涯を思はしめる。

客間の奥が、納戸めいた長い部屋てある。こゝが主夫婦の寢室てある。押入と、壁際には十棹ばかりの箪笥が駢んでゐる。妻の話によると、こゝて先代の老夫婦は、亡つた。老夫婦は、極めて質素な生活を營んでゐた。此處に開業してから、四十年の長いあひだ、倦まず撓まず、多くの患者の脈を取つてゐた。中には町を一つ越えた山の奥から通つて來る患者もあつた。十五里も隔つた僻村から、虚弱い子供を負つて來る、老實な百姓もあつた。それだけに、財產も亦殖えた。建物も廣くなれば、山林や田畑も

年々に買擴げられた。この寢室には、貴重な書類や、古金や、衣類などが仕舞ひ込んであつた。それて老人夫婦は、こゝを空けるのを酷く嫌つた。人の入るのも厭がつた。先代は、こゝて出來るだけ老いた妻の看護もすれば、先途も見屆けてやつた。此老夫婦には子と云ふものがなかつたので、年老つてからの生活は寂しかつた。それて、近郷から養嗣子を迎へると、間もなく老婦人は病氣に罹つた。老人は今一度、その生命を取留めやうとして骨を折つた。患者を見る旁ら始終愁はしげに老いた妻の枕頭に坐り、暗い寢室で、出來るだけの看護を怠らなかつた。それて婆さんが死んて了ふと、間もなく自分も同じやうに病氣をした。

或朝老人は、古金を夥しく仕舞込んだ函を枕頭へ持つて來さして、柳井氏に錠を開けさせた。函は其時まて、秘めておかれたのてある。中には老人が丹念に溜めておいた昔の金が幾千圓か、粒々に光つてゐた。老人は、それを讓つて了ふと、これも其日のうちに此處で目を瞑つた。醫術にかけては素性の好かつた老人の生涯は、それほど一般の世のなかと懸隔つてゐた。

この部屋の横手に枝折戸がある。自分はそこから外庭を通つて、裏門から廣い川緣の空地へ出た。川の向には、桑畑が續いて、若い葉が、ツル／＼と日に光つてゐるが、此處は木立の陰が寒いくらゐてあつた。柳井氏は、むく／＼肥つた體を、肌脫になつて、川岸の井戸で、冷水摩擦をやつてゐた。

「朝起きると、これが僕の樂みてす。」と、柳井氏は皮膚の紅くなるほど、擦つてゐた。

「井戸の底には、充分濾過の裝置がしてあるんてす」など、説明した。

自分は其處で洗手を使ふと、ぶら〳〵其處らを歩いた。こゝらは、何處を見ても、單調な高原である。原野の果には、山がどつしりと重なり合つてゐる。雪のある峰も見えた。旭を受けた山の美しい斷雲には、如何にも高原の趣がつた。歩いてゐるうちに、自分は町にゐると同じやうな脣や咽喉の乾燥を覺えたので、急いで家へ入つた。

家では朝茶の用意が出來てゐる。細君や妻が飼臺に向つて、蓋物の梅干で茶を飲んでゐた。柳井氏は、強い日の照りはじめた外庭で、頻に雛鷄の世話をしてゐた。餌を撒いたり、戸惑をしてゐる親鷄を、雛鳥の傍へ連れて行きなどしてゐる。子供は鷄と一緒になつて、ワイ〳〵言つて、其處らを騷ぎまはつてゐた。柳井氏の、爾して動いてゐる樣子には、いくらか田舍馴のして來た處が見えた。

「あの、患者が……」と、看護婦が言つて來たので、柳井氏は上つて行つた。

「よく動きますよ。あれて多少紛れてゐるんですの。」

細君は呟いた。

「能くまあ、あんなに澤山の鷄の面倒が見れますこと」と妻はお愛相を言つた。

朝飯が濟んでから、自分は二階へあがつて、東京へ出す手紙を書く心算で机に向つた。が、何となく心が落着かなかつた。友人に通信を書かうとしたが、矢張駄目であつた。暫く旅をしてゐるので、頭腦がひどく散漫になつたやうな氣もした。机の上には莨の函や、時計や吸取紙や葉書のやうなものが、ごちや〳〵と散かつて、廣い窓から入つて來る光線が弱い目にはパッとし過ぎるほどであつた。自分は横に

なつて、額に手を當てながら、少時頭腦を落着けやうと力めた。町の湯に行くとき、東京から金の來るまでと言つて、柳井氏から借りた金のとなども氣に懸つた。多勢の家族を引連れて、愿うしてドカ〳〵入つて來たとなども氣懸の一つであつた。財産や職業上の事で、色々に事情の混亂したまゝに見棄てゝ來た、東京の留守宅を振顧ると、それも何だか不安の念を唆るやうであつた。

少時すると、妻があかつて來た。五歳になる女の子を上へ私と抱あげて、何やら小言を言ひながら入つて來た。子供は鼻を鳴しながら、もぞ〳〵と從いて來た。暑くなつて來たので、袷をネルに着替へさせに來たのである。

着替をすまして、子供を階下へ降して了ふと、彼の女はペッタリ其處に坐つて、これも落着のない目色をして、低い溜息を吐いた。

「今日はもう廿五日ですね。あちこち歩いてゐると、日の經つのが莫迦に迅うございますね。」

「けど、如何せもう愿うして乘出したんだもの、月を跨いでから、寛りして歸るとしやう。」

「それは孰れ爾ですけれど……加之こゝなら勉强も出來るでせうから。」

自分は十五六町先の村の郵便局まで、手紙を出しに行つてから、附近に散歩を試みた。が、何處も同じやうな平一面の田圃ばかりである。鎮守の深い森のなかへ入ると、森はシーンとして、古色を帶びた祠には人氣もなかつた。濕ッぽいやうな木蔭の芝生に坐つてゐると寒いやうな風が頸筋を吹いて、長くじつとしてゐられぬ程であつた。そこを出て、水の黄色く濁つた川縁の、埃つぽい小逕を歩いて來ると、

穢い人家が二三軒目についた。垣根には草が這ひかゝつて、白い埃を浴びてゐた。野茨が蔓つてゐるかと思ふと、鐵扇花などが一杯に咲いてゐた。をり〳〵村の人に行逢つたが、其樣子が、いかにも精悍に見えた。目の光も强いやうに思へた。と、子供をつれた妻の姿が前途に見えたので、自分は其方へと行いた。

妻は板戸の白つぽく吹晒されたやうな人家を眺めて、「係うして、こんな處に一生住んでゐるんですねこの居周が、冬になつて皆悉雪に埋れたら、如何でせう」と、妻は哀ッぽいやうな聲で言つた。

「姉さんが、此處へ來たのが、丁度十一月だつたてんすつて。周の木の葉がもう落ちて了つて、あの山には皆な雪が積つてゐたんですつて。寒い風が吹いて、川の水がさアッと云つて流れてゐるもんですから、裏口に立つて其處いらを見てゐると、もう前途がないやうな氣がして――それも爾でせうよ、あの方は繁華な町に育つた人ですから……。」

歩いてゐるうち、子供は其方へ駈登り、此方へ走降りなどして、菜花や色の薄い菫を夢中になつて摘んでゐた。するうち、大きい方が溝のなかへ蹈込んで、體中泥塗れになつて、オイ〳〵啼出した。妻は溝際へ手をかけて引揚げると、片側の小川の流の中へ立たせて、脛や手を洗はしめた。子供は涕汁を垂らしながら、冷たさうに體を悚めた。妻は顏を顰めて、グイ〳〵手を引張つて行つた。

漠々とした廣い田圃面には、何處か肌にイヲつくやうな、氣懈い風が緩く吹廻してゐた。

晝飯の頃まで、自分は柳井氏に導かれて、新達の方へ書畵を見に行つた。刀劍なども少しはあつた。

先代が公共事業や、縣の教育費に寄附した、其賞狀などもあつた。柳井氏が、凱旋の時の祝詞の卷物なども見えた。

「養父は、こんな子供のやうな物まで仕舞つておいたです」と、柳井氏は、赤い木杯の入つた小箱を手に取あげて笑つた。

午後に、自分は二階で一時間半ばかり晝寢をした。目がさめて見ると、そこらが如何となく、だらけたやうであつた。餘り日差が强かつた故か、手足が懈く、頭が重かつた。息苦しさをさへ感じた。階下へ降りて座敷に入へると、座敷には誰もゐなかつた。椽の黝い板敷には、白い砂埃が置いて、子供に飽かれた花束が萎びてゐた。

自分は臺のうへの貰を取つて、一本火をつけた。風が較々庭の木立に騒いでゐる。奥の方に、雛鷄が一羽、うろ〳〵してゐるのが、目に入つた。

椽先を、柳井氏がバタヽヽ走つて、診察室の方へ行つた。手に何やら持つてゐる。近いつてみると、其が雛鷄である。

雛鷄は柳井氏の掌に載せられたまゝ、黄色い貧弱な翅をバタ〳〵させて、充血したやうな目を、空さまに睜るかと思ふと、白い膜で閉ぢられて了ふ。口を開いて、苦しさうな息遣をしてゐる。

「坊てせう。」自分は訊いた。

柳井氏は、メートルグラスの口から水を、其喙へ垂しては、熱心に哀れな動物の氣息を窺つてゐた。

「何に……先生八重と一緒になつて、大きな籠を持つて、追かけて歩いてるうちに、ひよいと伏せ損つて……。」

「迚も助からんでせう。」

「いや、如何か解らんです。」柳井氏は氣遣しさうな目を小い患者から離さなかつた。「尤も、あれだけの籠の縁でもつて、此の纎細い體を壓されたんだから……我々が、どしんと來る電柱を擔いだくらゐの事はあるかも知らんね」と負傷の經過などを說明した。

「飛んでもないお客が來て、鷄も驚いたらう。」自分も笑つた。

十分ばかり、柳井氏は熱心に介抱した。それから庭へ降りて、地面に立たしなどして見た。雛は前へ踣つたまゝ、口を開いて、セイ〳〵云つて、苦しさうに呼吸をしてゐる。柳井氏は私と取あげて、鷄舍の隅の方へ寐かしてやつた。子供の姿は、もう其處らには見えなかつた。

川縁の葦原へ出て見ると、下の方に、子供は何やら取卷いて見てゐた。丁度洗場のあるところで、大きな橘の樹が、蓊鬱した其の枝葉を繁らせてゐた。其の蒼々した木の下蔭に、女は青味がゝつた縞の綿ネルの腰卷を剝出しに、蹲坐んで、俎板のうへで、バタ〳〵草を叩いてゐた。

「何だつて、こんな處で其樣ものを叩くね。」と自分は怯氣ついて、小さくなつてゐる子供の背後から訊いた。

飯炊は感の惡さうな、豬脹れの顏を擧げて、些と自分を見た限てゐる。然して又擢木て、氣のなささうに、鈍く二三度叩いて、
「矢張御隱居さまが、干渉ふもんだでね奧さまが煩いづらね。」
「それで隱れて爲るんか。」
「隱れて爲ると云ふてもねえけれどね……」と、飯炊は、靑い汁に染つた擢木と手とて、草を捏ましはして居た。
柳井氏が、後からひよッこり出て來た。
「女は女連て、こんな事ばかりして日を暮してゐるです。恁云ふ事が、何處が面白いのか、老人は老人て、氣にかゝつて放任つてはおけず、家內は家內て、彼此喙を出されるのが煩いと云つた風て、𡵅所ぢや始終苦情が絕えない。總てが、それなんだから遣切れない」と言つて柳井氏は笑つた。
その草餠が出來る頃まで、自分等は、叢て、子供を相手に戲れてゐた。切株の上へ乘つて、飛び競をした。幹のザラ〳〵する胡桃の木へも登つた。枝に垂下つて、機械體操をやつたり、逆立をやつたりした。大きな聲て號令もかけた。胡桃の大きい枝がメリ〳〵と裂けて、ゆさりと水に流された。自分の脈管には、熱い血が一時に漲つて、腋下が汗ばんだやうになつた。
「この人達あ何よ莫迦するだえ。」母親がニタヽヽ笑ひながら、裏門から出て來た。
「餘よ生らかいて、好い加減に巫山戲ておかッし。村の衆が見ると可笑しいで」と、苦々しさうに言つ

て、手をお尻の處へ當がひながら、枝の折れた胡桃の木に目をつけた。

お八ツの時、八重子──柳井氏の姪──が背後の唐金の長ッ細い火鉢にかゝつてゐた鐵瓶を顛覆して、熱湯で踵に熱傷をした。子供は飛あがつて、體に火のつくやうな啼聲を立てた。

細君は周章て、「早く着物を……早く着物を脱じて……」と立騒いだが、些とは誰も手を着けかねてゐた。

湯のかゝつた處は、極僅かである。じつと見てゐた柳井氏は、「騒いだつて爲方がない」と顔に落着を見せてゐた。

「やれ早く藥を塗つておくれやれ。」母親は孫娘の投出した足を取あげながら、眉根に皺を寄せた。

「お冬が、こんな處に火鉢を置くもんだて……。」

「え、それは私が惡かつたんですけれど……」と、細君は子供にも、老母にも同情のなさゝうな顔を、ポッと紅くした。「私は傍に附いてゐて、始終氣をつけてゐたんですけれどね。折あしく、些と立つた間に出來たとなんてすから……。」

「それだつてお前、子供の直く側に、こんな物をおいてくれるちふとがあるかえ。

「まあ可い。」柳井氏は叱るやうに言つて、「着物を脱せろと、手出もしないで騒いでる奴があるもんか」と細君を窘めた。

細君は、「私が惡うございました」と、矢張り顔を赧らめながら、謝罪つた。

薬局へ連れて行つて、薬を塗つてから、衆は又草餅でお茶を飲はじめた。

少時すると、柳井氏は鷄を見に、庭へ出て行つた。子供もぞろ〳〵尾いて出た。それと同時に、臺所の疊敷の處で、寄つて茶を飲んでゐた、書生や車夫などの組も散つて行つた。

此方に殘つた四人の間には、怪我した鷄の事や、今の熱傷の話などが出てゐた。晩飯の馳走の相談などもあつた。

老母は何かの話の序に、「こゝの家には、好い箪笥がどつさり有るだが、片身配をして了や、そんなにも要らんて、家へ二棹も持つて行かすか。」と言出した。この老母の家は、舊は問屋本陣であつた。が、今總領が張つてゐる醫院の玄關は、然ほど立派なものではなかつた。

「えゝ、切望おもちなすつて‥‥。」嫁は然ほど惜しくもないと云ふ顔色であつた。而して褄楊枝で齒を内輪に弄りながら、「でも阿母さん、十六里もある處を、持運びが大變ですね。」

「なあに馬に積んで行けァ譯ァないて‥‥。」と、此も汚い齒に楊枝を遣つてゐた。

妻と細君は笑ひたさうな目を互にマシヽヽして居た。

この時柳井氏は、先刻の雛が死んだと云つて、小い死骸を掌に載せながら、上口から見せた。

「おやゝゝ、到頭死んだかえ。折角孵したものを、坊などに弄らせなけァ好いに」と、老母は苦笑した。

「こいつ水葬禮にしてやらう。」

柳井氏は、川縁へ出て行つた。

自分と妻は、腹ごなしに又裏へ出て見た。柳井氏夫妻も一緒に其處いらを彷徨いた。新建の一ト構に續いた大きな納屋、古い駕籠が二挺、屋根板用の木材や薪、黝んだ桑の刈株などが夥多枯してあつた。作りかけの花園なども有つた。柳井氏は、今の生活狀態や、色々の新計畫に就いて話しなどした。

「考へると、これて田舍もなかく仕事があるんだね」と、柳井氏は垣根際の栗の根に蹲坐んで、莨を喫してゐた。

「女は滿りませんよ。あのだゝッ廣い臺所に、年中燻されてゐるんですもの……」と、細君は言出した。

「薪と炭が貴方、これだけて夏一杯も有りやしませんよ。色が黝くもなるぢやありませんか。唯さへ黑い處を……加之白粉をつければ、もう何だ彼だと傍の口が煩いてせう。誰しも稚い時分から、着けつけてあるんてすものね。」

「眞實てすね。」

「貴方の髷形などを見て、私事實に此處へ來る前の自分が、可懷しくなつて來ましたわ。」

「髷形くらゐはお送りしますよ。」

「でもダメてすよ。髪結を呼べるにしても、形を潰してしまひますもの。」

「おい、お冬や、西洋皿は何處にあるえ」と云つて、此時老母が座敷の椽側の方から聲をかけた。

「あれ、阿母さんが洋食をお拵へなさるんてせうか」と、細君は憂てさうに、返辭をしながら、急いて入つて行つた。

日が落ちかゝつて來た。何か知ら、綿屑に似通つた木の花が、黄色い西日の光にちら〳〵と散つて、イラ〳〵するやうな夕風が、田圃面から吹いて來た。鷄が心淋しげに首をあげて、二三羽其處らを彷徨いてゐた。

自分は寒氣を感じて來たので、急いで家へ入つた。

茶の室の入口のところで、老母は箱のなかから白い皿を出して、其を拭いてゐた。

ランプの點きかゝる比に、一同は晩餐の膳に向つた。

柳井氏は、愛嬌のある口髯を捻りながら、丸い目をして、「今日は、冬が、フライの手並をお目にかけやうと思つた處、ヘットが切れて居たのに氣が着かなかつたさうです。何處かへ紛れ込んでゐるかも知れんが、偶然すると、下女が放心棄てたんか解らない。」

それを悟かしさうに聞いてゐた老母は、「人に皿まで拭して、冬は可厭だぞえ……」と、ぶつ〳〵言出した。

「まあ、そんな事を言つたつて爲方がない。」柳井氏は應えた。

「だつてお前、冬は何時までもあゝだぞえ――」

「まあ可いです。」

老母は飯が濟んで了ふと、按摩が來てゐるとかて、其晩は早く退いた。何時も臺所にばかり引込んでゐる細君が、間もなく銚子を持つて來て、餉臺の一方に落着いた。

細君は、少しは酒の行ける口である。美しい唇を、慎しやげに猪口につけて、二杯三杯と重ねた。するうち目の縁が紅くなつて、顔に光澤を有つて來た。調子も浮々して來た。

「今晩だけ可いでせう。少しは燥いでも……」と細君は笑ひながら、良人の顔を見た。

柳井氏は默つて、莨を喫してゐる。目が大分ちらついて居た。

細君は、自分や妻に酌をしながら、此處へ來てからの、自分の心持を話さうとした。

「私、眞實に今晩は嬉しいんですよ。」猪口を洗ひながら妻に差した。

「私、かうしてお座敷へ出て、お酒の一口も飲むなぞと云ふ事は、此が始めてゞすよ。此處は眞實に難しい處でしてね……加之、家の家風が恁なんでせう。先の阿父さんと云ふのが、それは能く物の解つた方でしたけれど、其代り、隨分嚴しうございましたよ。——私な……」と細君の言には時々、恁云ふ西の方の訛の出ることがあつた。

「私、稚い時分から、少し絲道を開けてもらひましてな、オルガンかヴヰオリンなら、それは可いかも知りませんけど、私は三味線を習つたもんですからね……。こゝへ來てから三月四月の間と云ふものは、それは實に寂しうございましたよ。加之、其頃は今のやうに用事がありませんでツしやらう。もう一日笑談一つ言ふことも出來ないで、じつとしてゐるもんですさかえな、如何かすると、氣が塞つて〳〵、體の工合が惡うなることがあるんでございますよ。私、さう云ふとき、其三味線が彈きたうて〳〵ならんものですから、私と二階へあがつて、抑入の隅から出して、見てゐるんですの。」

細君は、然云ふ派手な町家に育つた女であつた。

「それて、別に彈く氣はありませんの。あの堅苦しい御父さんや阿母さんに、極が惡うて彈けやしませんの。尤も、絲の音色など近所へ聞えては濟まんてな、御父さんから止められてあつたものですから……するとな、棹をついて弄つてゐるうちに、つい彈きたくなつて、眞の爪彈て……觸つたんてせう。」細君は手眞似をして、仇氣ない顏容をした。

「さあ、後て御父さんに呼つけられましてね、三十分ばかりも、傍に坐らせられて、私あんな困つた事はありませんてしたよ。」細君は、話しながら、不知不識酒を過した。

「私、今夜のやうな嬉しいとは有りませんぜ。切望、お介意ひしませんから、氣樂に、長く遊んで行て下さいね。眞實に……」

「貴方も兄さんと御一緒に、お溫泉へ入らつしやいよ。」

細君は浮かぬ顏をした。

「阿母さんが、近いうち山邊へ行くから、然ふ云ふ譯に行かん。」柳井氏は、寢轉んてゐながら言つた。

然して話が興んてゐるところへ、細君を女中が呼びに來た。

杯盤を引いてから、柳井氏は按摩に肩を揉ませ初めた。

自分も眠氣がさして來たので、二階へ引取つて、其まゝ蒲團の上に寢轉んだ。

十一時頃に咽喉が粘着くやうな渇を覺えて、目がさめると、妻が漸く火を細めにしたランプを持つて、

寢に上つて來た。

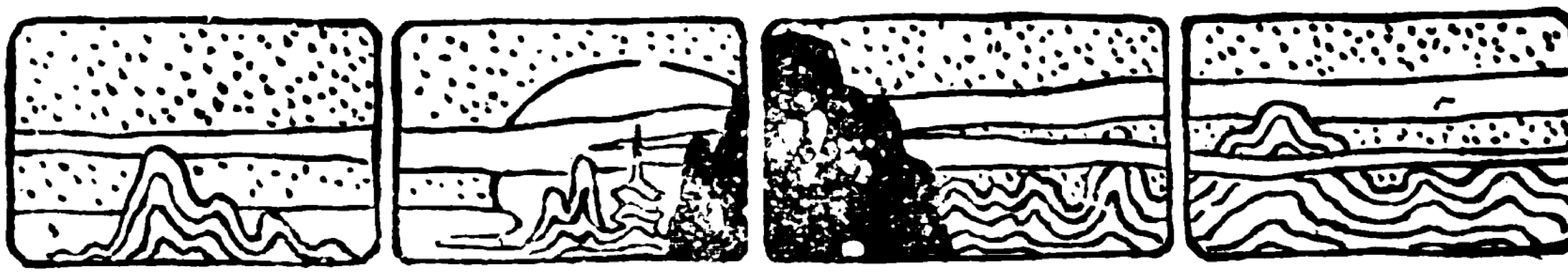
「大層お婆さんに叱かれてゐますよ。座敷へ出て、お酒なんぞ飲んだのが惡いと云ふんでせう。あの納戸で、まだ遣つてゐるやうですよ。」

妻は恁う言つて、術なげに溜息を吐いた。

翌朝八時頃に下へ行くと、塞いた炬燵の側で、老母は昨夜から泊りがけの按摩に、體を揉ませてゐた。

細君は、けろりとした顏をして、臺所を働いてゐた。

（をはり）



憎

水野葉舟

一

自分は今、室の中に坐つて居る。今は深夜である。

瞑目して、深くものの底に沈んで行くやうに或る事を思つて居る。すると、あゝ又、例のものが自分に襲ひかゝつて來る。それは、自分を取り圍んで、ぢつと自分を瞰んで居る、千百の目だ。自分はその目に取り圍まれて居るのを感ずる。

耳にはその目が囁き合ふ聲が聞える。闇の世界は無際限の廣さに廣がつて、自分の身體はその中にたゞ一つ、あるか無きかの點よりも小さい。その小さい自分をも、その目は無くさう、消し去らうとするのか、間斷なく、餓えたやうな冷い光を見せて瞰んで居る。

自分がこの世界に生きて居ての戰爭は、この目との戰爭だ。自分は生きる爲めには、これ等の蝟集して來る目の光の中に立つて、自分の身體が肥え、生長して行かねばならぬ。

それだのに、自分の姿ははかなく痩せて居る。存在の油が、刻一刻と薄く、その目に吸ひ取られて行くではないか、……少くとも自分の頭は疲れた。心に湧いて居た水は、刻々に枯れて行く。今に自分の腦裡は木乃伊になつてしまふのだ。

昔、自分からは、水々した幾本とも知れぬ若芽が、ずん〱伸びて出た。その先にはどんな花が咲くのか、と自分は無際限の希望があつた……然るに今、その枝は皮が堅くなつた。そして案外、細い枯々したものになつてしまつた。

おれの一生も、大方見えてしまつた！。自分は遂に戰に負けた。

自分は一體弱い。自分にはその蝟集して居る目の一をでも、喰つて、自分が肥える事が出來ない男だ。おれは人間の如何な人とでも交れば、必ず自分の心が痩せる。

自分の心は、人の心に吸ひ取られて行く。そしてもう三十幾年かを過して來た。これまでは、自分は敵を咀ふ事が出來なかつた。

憐れむ可き心は、もう干乾びやうとして居るのだ。昔、神はカインに「汝何をなしたるや、汝の弟の血の聲地より我に叫べり。」と言つた。アベルの血は地に吸ひ込まれても、聲を發して、神に訴へた。自分の心からこぼれた血は、如何なる人の、如何なる胸に生き殘つて居るだらう。

隣の室では皆寢しづまつて居る。自分は何故に生れて來たか、如何しても分らぬ。生れて來たものは神に咀はれたのでは無いと言ふ事が分らぬ。自分は今日まで、昔て自分が存在して居らねばならないと

思つた事がない。この稀薄にして、光りのない靈魂が何故に、生れて來たか自分はそれを疑ふ。
聖人が如何に恵深い言葉で生れて來たものの價値を說いても、自分には何の心を飜す力もない。……
…自分ははてしなく、自分が憐れになつて來る。それも知らずに、隣の室には家族のものが、靜かに眠つて居る。
不意とものに襲はれたやうに子供が泣き出した。上の女の子の方だ。私の家族は六つになるこの子と、下に男の子が二人と、妻との五人である。
「お露！」
私は狂人のやうな聲を出して怒鳴つた。
「ハイ、ハイ」
お露は寢ぼけた聲を出して居る。子供は續けて泣く。
私は立つて行つて、その子の枕元で、
「こら〳〵、何を泣く」と言つた。すると、子供は尙ほ泣き立てた。
自分は上から、ぢつとその顏を見下した。目を閉つて、眠つた顏の儘で、高い銳い聲を出して泣いて居る。何物かに、襲はれて居るやうに、顏を、あちら、此方に向けて、その恐しいものから遁けようとする。手も足も縛られたやうに動かさない。
自分は膝をついて、その肩を抱くと、

「はま！、如何した、如何した。」と呼んだ。けれど子供は泣くばかりで目を開かぬ。やがて、
「はまちやん、はまちやん」と、妻が目を覺まして呼んだ。
「いやな兒だ。寢ぼけたのよ。」
「早く如何かしてやれ。」と言つたが、此時に自分はひしと胸に響いた。この子にも自分のこの弱い心が傳はつて居る！
この小さい、抵抗する力のない子供の時から、敵に襲はれて逃げようとあがいて居る。自分はもとの坐にもどつて考へた。この子の運命は何だらう？……自分に似たものだらうか、若々しく、水々しい心が伸びる伸びると思つて居る中に、堅く縮まつてしまつた、天分の薄い、憐れな自分に似たものだらうか。面白味の消え去つた日を送るのだらうか。
この面白味も、珍らしさもない自分に似た生涯を、も一度この子が繰り返すのだらうか。もう一人でも存在の必要があるか、如何か分らないやうな、こんな靈魂が、又一つ生長するのか。
自分は坐つた儘、はてしも無く三人の子供の事を思つた。
今にして見ると、自分の仕た事、思つた事が悉く後悔される。自分は何故に結婚したらう。自分が結婚したのは戀愛の爲めに過ぎなかつた。戀愛は人間のする大きい藝術だ。しかし自分のやうな天分の薄い人間でも、この藝術はなし得た。たゞその時に當つて自分は一點も、自分の子と言ふものに心が及ば

なかつた。

否、自分と言ふものが心に明かてなかつた。何故、自分はこのやうなはかないものである事に心づかなかつたらう‥‥‥‥

二

汝に敵ある事を感謝せよ。自分の爲めには敵は生存する上に於て唯一の保證だ。

あゝ、まだ、自分はT――を憎み得る。自分は一人、室の中に坐つて居ながら、彼の顔を思ひ出した。その力を量つた。彼も自分も等しく思想界に生きて居るものだ。自分は彼――Tが仕た事業を計算した。彼の學問を計算した。彼の愛情を計算した。彼の幸福を計算した。が、終りには自分でこのやうな事を思つた。

彼も自分を敵として居る!‥‥‥これが、自分には何よりも嬉しかつた。

「畜生!」

自分は滿身の勇氣と、憎惡の念とを含ませて、彼を罵つた。

だが、彼と自分とは、如何して敵になつたらう。二人とも同じやうに藝術界に籍を置いて居るものだ。そして年も、地位も、似た境涯に居る。それならば嫉妬からか‥‥‥藝術に携はつて居るもの同志の嫉妬からか、と思ふだらうが、さうではない。ならば何事か事件があつて、その結果か、否、さうでもない。二人は不知不知の間に敵になつた。

恐らく、二人の間に、何事でも事件があつたのなら、爭つたらうが敵にはならなかつたらう。たゞ、不知不測の間に截積した、影も形も分らぬ感情——彼は強く直線的、自分は鋭く細く慄えた心、この兩(ふたつ)の心が表はす表情が、不知不識の中に、双方の心に憎みの情を植えた。さて心付いた時には既に繇す事の出來ない敵意が蟠つて居た。

よし、自分は自分の敵を尊敬する。何時までも彼れは自分の敵なる事を思つて居よう。彼は植物で言つたならば、芋のやうなものだ。地の中に深く根を張つて、その養分を吸つて、自ら肥えて居る。冬が來ても、彼の生存は太く安かた。自分は細い根ばかりの草に過ぎない。自分は花を咲かせる爲めに、地から水を吸つたが、花と一所にこの根は枯れて行く。

しかし、何はともかくも、彼が自分の敵であると言ふ事は、自分にとつて、この上もなく喜ぶ可き事だ。自分は、今はたゞ彼と敵となつて居ると思ふ爲めに全身に勇氣が生ずる。自分を取り圍んで瞰めて居る例の目にも打勝つて、更らに一つの目的に向つて、全身の力が集注する。自分の姿をさへ忘れられてしまふ。

今日は朝から、妻は子供を連れて、實家(さと)に行つた。家の中が寂然(しん)として、自分は野の中にでも居るやうに思はれる。

自分は今何もかも灰色に見えるのだつた。自分が何を持つて居るか、如何かは分らぬが、何しろT——とは飽まで敵になる。彼の血が枯れるまで、自分の唯一の敵と思ふ……胸を踊らせながら、この

思ひに耽けつて居ると、妻の一行はどや〳〵と歸つて來た。

「お父ちやん、あのね」と四つになる二番目の男の兒が、玄關から書齋に馳け込んで來た。いきなり自分にからみ付いた。自分は目を据ゑて、默つて居た。

續いて

「只今……」と妻も、二人の子も入つて來た。自分が默つて見据ゑて居るので、首に搦み付いた子もしよげて離れた。

「母からも宜敷つて申しました。」と自分の顏を見たが「如何なさいまして？」と聞く、

「……」自分は首を振つた。すると、

「あのね、お父ちやん。」と上の子がふと口を挾む。「あの……私、赤い傘が欲いの。」

「まあ、お待ちなさい」と妻が遮つた。自分は默つたまゝてその顏を睨んだ。すると、上の方は身體をくねくねさせて、怨めしさうな、憎々しく口を曲げた。

自分はかつと憎みの心が燃えた。

「その口は！……」と怒鳴つた。するともう泣き顏を出す。

あゝ、卑怯な、醜惡な人間の泣き顏！。自分は夢中になつて、手を振つた。そして皆を外の室にやつてしまつた。人が居なくなると、自分の頭の中は蒸氣が立つたやうに、なつて居る。わつと蟲が鳴き立てるやうだ。

それ！、例の目が自分を瞰んで居る！。あゝ……自分の身體はもう幾何も經たない中に、干乾びてしまふのだらう。

自分の血の一滴から生れた子供達は、刻々に成長する。そして成長する爲めに自分の身體から肉を殺ぎ去る。新しく生れた生命が、伸びる爲めに、その親は枯れねばならぬのだ。自然界の下等な生物は大方さうだ。しかし自分はそんな事は嫌だ！。自分は何處までも自分の身が水々しくあつて欲しい。

獨りていらくして居ると、突然T――が入つて來た。自分はびつくらして立つて迎へた。一生懸命になつて笑顏をした。が、その顏がひよつと狂人が笑つたやうな顏に見えはせなんだらうか。

T――はさも平穩な調子で、

「君に借りた書を返しに來た」と言つた。

「さうか」自分はT――の顏をしつかりと見詰めた。それを見て、T――は憐むやうに笑つた。自分は水をかけられたやうにぞつとした。

彼は自分の事をもう思つて居ない！。如何にも平安に自分と敵となつて居る事を忘れて居る。自分はがつかりしてしまつた。

T――はそれからさも樂々と世間話をし出した。自分は遂に媚びるやうに彼と話を合せた。

何の事はない、手もなくT――に蹂躙されてしまつた。しかも彼はもう自分の事を樂に忘れ去つて居る………

自分はもう生きて居るかひが無い。

三

もう、今日てこんなにうろつき出してから半月以上になる……如何も何故だか分らない。その半月ばかり以前に自分はふと何處かて、又一人自分の子が生れる……生れようとして居る、と思はれ始めた。

何處か知らぬが、東京の中て一人自分の子を孕んだ女がある。自分は驚いた。自分は嘗てそんな女と通じた覺えが無い。しかし、子が孕まれて居る事は事實だ。

自分はそれを事實だと斷言せぬ譯には行かないのだ。女の乳が色づいて、膨れ上つて居るのが自分に見える。その女の顏も見える。小作りの、髮の濃い房々と長いのを、何時も亂れた儘束にして居る。色の青白い、思ひ上つた、プラウドな目付をして居る女だ。

けれど、自分は一度もそんな女に逢つた事が無い。たゞその女が何處かて自分の子を孕んだ。自分はそれを搜し出さねばならない。と思つて居るのだ。それて、來る日も、來る日も、その女を搜しに出るのだが、まだ似た顏も見ない。

あゝ疲れた！、今日は如何してもその女が何處か裏長屋のやうな處に居るだらうと思はれるので、場末の路地の中を散々出たり入つたりした。しかし、その……自分の胸にはつきりと刻み付けられたやうに、映つて居る、その女の目は何處に行つても無かつた。

疲れて、歸つて來て見ると、自分の胸にははつきりとその女の目が見える。小作りの女だが、身體は

油ぎつて、少し汗ばんだ、その肌の香が何となく自分の身體について居るやうだ。

あゝ、又例の目が二つふゑた。このまだ顔も見ない女と、その子とはやはりこの枯木のやうな私から、血を絞らうとするのだ。自分に何故こんな事實が起つたらう。

ともかくも自分はその女を如何かして捜し出さねばならない。捜し出して如何するかと言ふに、自分はその女と生れやうとして居る子とに復讐をせねばならぬ。

考へて見ると自分には何時の間にか友人も一人も無くなつた。敵もなくなつた。たゞ群つて來るその目が、ひし〳〵と自分を取り圍んで居る………

女の居處は如何しても分らない。自分が捜して居るのに感付いて、隠れたのだらうか。斯うして、日一日と經つ儘にして居ると、その子は次第に安全に生れて來る。そして生長する。自分は一つでもこの恐ろしい目が生長するのを、その儘にして置くわけにゆかぬ。

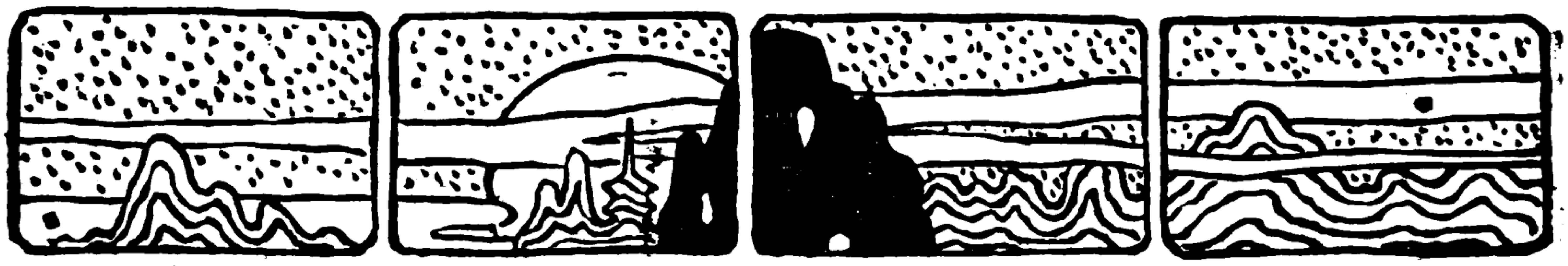
如何しても、その女が子を生まない中に、見付け出して、自分は何等かの方法て、その女を畏縮させてしまはう。さうすれば子供は腹の中て死んでしまふだらう。

如何してもその女が見付からぬ。…………

四

小説家大島碧海は突然家を捨てゝ何處かに行つてしまつた。彼の妻は夫が何て、そのやうな事をしたか、心付かないと言つて泣いて居た。

(をはり)



親戚

眞山青果

一

昨夜遅く、何八幡へ送つた客は未だ立たないけれど、その方のことは、出物のことまで細かくお俊に頼み、おさとは暇を貰つて朝の間の涼しいうちに出掛けることにした。冷たい御飯はお茶漬てすました。それと云ふのは昨日の夕方、急に小日向の親類から端書を寄來して、そこの年寄が大病と知らせてあつた。おさとに血のつゞく身寄はこゝが唯一軒、今でこそ遠々しくして居るが、云つて來た病人は五年前に死んだ母に取つては一人の姉にあたる。小日向の親類〳〵とおさとは好く他人にも話して居た。

水泳に來る男兒のやうで、なんぼ有り布でも繻絆の襟に水淺黄は可笑しいと、お俊が笑つて止めるのを、なに關ふものかとおさとは自分でもクス〳〵笑ひながらそれを着て、暖簾わきの三疊に寢轉んで居るお神さんへ挨拶に行つた。お神さんは自分の新しいのを出し

てそれを着換えさせやうとしても、面倒くさいとておさとは平氣て出る積りて居る。お神さんはいつもの我殺を笑ひながら、脚氣々味て腫のある蹠を引いて帳場口まで送り出した。

「全く、世間が靜かてすね。」

新しい後齒下駄のきつい鼻緒を穿きかけながら、おさとは今偶と氣が付いたもののやうに、町を距てた向ふの側を見て居た。

「段々斯うなつて行くのかしら。」と、お神さんも店の柱を背中にして、一所になつて眺めた。

柳の樹を兩側に植つけた幅の廣い街をば、浦から吹上げる風が秋風のやうに吹いて過ぎた。朝の日は向側に立ならぶ物々しい破風づくりの、その癖人氣の無さうな大きな建物の欄干をすべり込んだ。どの家も〳〵その駄々廣い石敷の入り口を一杯にあけひろげて、其閾の外には馬鹿〳〵しく大きな瀬戸皿や小鉢の類を、用捨無く放下してあつた。朝日はその器の中の食殘しにまて、明らさまに射し付けて居た。

そこを背後から、おさとの肩を叩いて、「飛んだお人柄だよ、おさと。欲にはもう二つ三つ……。」とお俊は誰かお客の假氣を使つて、勝手へバタ〳〵と遁げ込んだ。お神さんも眉の青い顏を頽して笑つた。

「年のことならもう眞ッ平だ。」とおさとは大きな前齒て男のやうに笑つて家を出た。

外は流石に暑い。夏の朝日はクル〳〵と大きく眩めき上つて、頬や額に眩しい熱さを照り付けた。その癖、その熱さの底には夏を別れのうそ冷かな氣が何所とも無く漲つて居て、白いものが白く光つた。

おさとは軒並につゝいて、同じ行燈をかけた紺暖簾の茶屋〳〵へ、一軒〳〵挨拶しながら其軒下を歩い

た。漬物屋、煮しめ屋、納豆屋、この廓の遅い朝飯を見當の物賣は、鈴を鳴らしてラッパを吹いて、もうゾロ／＼と門を入つて來る。中には鉢卷を取つておさとへ挨拶して行くものもあつた。

門の外には辻待の車が揃つて居たが、心持好く乘れさうな車は一臺も無かつた。

公園から不動樣の境内を拔けて、かの名高い河豚汁屋まで來た頃には、汗かきのおさとは肌に着けたものがビッショリ汗になつて居た。舊るい深川の繁昌を思はせる、今は立腐れ同樣に屋根も壁も一面埃にまぶれて、木柱の木目が曝れ立つた大きな家の下に立つて、電車の來るのをやゝ暫らく待つて居た。日に光る電車線路の兩側には、高い低い屋並びの思切つて不同な町が續いた。小兒の多い町だ。煙草屋でもあつたら、卷煙草を一本吸いたいと思つて居る時分に、電車は風を切つて來た。茅場町までは知つて居るが、その先きは昨夜お俊に敎へられた通り江戸川の切符を買つた。

前から年寄への土產は、與兵衛のすしと決めてあるから、兩國の乘換えにそれを求めやうとすると、車掌は乘換切符を九段と入れてあるとて許さなかつた。

「これさへ無駄にしたら好いんでせう。」と、人に顏を見られるので、おさとは最う眞赤になつて、江戸川までの切符を突出した。そして、それでも氣が濟まないから、

「私は田舍者だから、何も知りません。」とまで毒づいてやつた。

二

万世橋から神田を廻つて、九段下まで來た時には、ツク／＼と路程の遠さを感じた。降りて歩いた方

が好いとさへ思つた。自分等の若い時には見も聞きもしなかつた、色の明るい、濃い、そして思切つて眞直な大きい縞柄の娘風俗も最う目に飽きて來た。話には聞いて居たが、自轉車を走らす女學生も今日初めて電車の窓から見た。

それも好いが、山の手の町々の變つた事には猶ほ驚いた。三四年前までは些く〳〵來ても、その時は何とも氣が付かなかつたが、今度と云ふ今度はひどく變つたのに氣が付く。町並び見世の飾り、スッカり變つて、自分が娘時代に知つて居る面影は些つとも無い。寂しい原地で追剝が出ると噂のあつた原ッぱには大きな堀割が割つて、その緣は賑かな屋並びとなつた。小兒の時に知つて居る椎の木、甘酒屋、唐子人形を看板に出してあつた賣藥屋、そんなものはどこへ行つたか形も無つた。おさとは別なところを通るやうな氣になつた。

電車を江戸川の終點で降りて、大日樣の坂を上ると、然う親類の家も、昔ながらの鬱陶しい、森のやうな木立の中にあつた。昔の侍門を今のやうに取換えたのはおさとが知つてから後の事である。坂田元、おさとに從兄にあたる、控訴院判事の大きな標札が出て居る。玄關口には濡色の美しい俥が二臺供待ちして居た。おさとはその陰を廻つて、脇玄關の潛り戸を明けた。

「鶴吉て御在ます。」

おさとは幼名を名乘つた。

小間遣の女が又出て來て、おさとを玄關脇の部屋へ案内した。暗いほど涼しい間である。長押には古

い横額がかゝつて居た。

「伯母樣の御病氣はどんなんて御在ます。突然の端書て本當にビックリ致したのですよ。」

茶を持つて來た小間遣に斯う云つて見たが、小間遣はロクに口を利かないで立つて行つた。

三

起居に不自由なほど肥つた從兄嫁のおきぬが、顏の汗を拭き〳〵入つて來た。

「毎日〳〵、お暑いぢやありませんか。」と何よりも先づ團扇に手をかける。從姉とは云ふものゝ、おさとゝは年の十二三も違つて居る。娘の時分こゝの厄介になつて居る時分からこの人を小母さん〳〵と呼んで居た。

何よりも先づ病症を尋ねると、おきぬは投出したと云ふ調子て、「坂田家の系なんだから爲方ありません。」と斯う云つた。

強いて系と云へば胃癌である。おさとの母もこの難病て死んだ。

「寢て被在いますか、お目にかゝりたいものですが。」

「御病人には貴方が第一大切な人ぢやありませんか。」とおきぬは括れた顎で笑ひながら、黒く冷い緣側を通つて病間へ案内した。

今醫者が歸つたところと見えて、病間には種々の人が居た。臺灣の樟腦會社に居る伯母の次男の源吾も來て居た。出入の重助も居た。おいわと云ふもと居た下女。親戚の高橋、今では忘れて居た舊るい顏

の人々が揃つて居る。外に知らない人も居た。中に際立つて好い容色の十七八なが、思ふさま贅澤な今風の姿をして居た。おさとは些いと取つ付き端が無くて、間の鬮際に小さく無つて居た。

「おばさん、鶴吉が來ましたよ。」

枕元に坐つて病人の顳を支いて居た從兄の元が耳に近く呼んだ。その美しい娘も美しい聲て、

「お祖母さん。」と呼んだ。

然う云はれると氣が付く。小さい從兄の源吾に女の兒があつた。

病人は目を上げたけれど、その人と判つたか何うか判らない。おさとが近々と顔を寄せると、見て居る事は凝つと見て居た。その顔が、五年前に死んだ母の顔と酷似違はぬ。おさとは目に涙を溜めた。せめて一言。自分に口を利いて貰ひたいと、病人に話さうとすると、從兄は手を振つてとゞめた。おさとはもとの席へ戻つた。

大きな片口を持つて、看護婦が滋養灌腸の用意にかゝつたので、居るぐらいの人はその座敷を外した。おさともその人々と共に北口の小座敷へ來た。

從兄の元はおさとを呼んだ。「鶴吉、お前丁度好いから、中二階へ行つて曾祖母樣のお相手してくれないか、話し相手なくて寂しさうだから。」と云つて又、

「たゞ、何も喰べるものを上げちや不可ないよ。餘程腸を害してお出なさるやうだから。」と付加へた。

四

この家には病氣の人の姑にあたる年寄が未だ達者で居た。坂田の曾祖母樣といへば近所に長命を知られて居た。今年は九十六になつても未だ耳が達者、目も達者だが、昨年あたりから少しく老耄の氣味があつて、暑中のこの頃でも袖無しを着て、行火に凭れて居る。離屋の中二階を居所として、小女を一人付けて置いた。

家中氣をつけて病人のことは聞かせなかつた。

「誰方だつけな。」もうおさとの顏なぞ忘れて居た。

「未だ獨りで居なさる。それは惡い事つた。女子が一人で居ては末始終好い事はありません。私は遠うにお嫁にお出でたことゝばかり思つて居りました。」やつと思ひ出して、來る度にする同じ意見を初めた。

「駄目ですよ、曾祖母樣。私のやうな我儘ものは、一生獨りで暮した方がようござんすのさ。」

「然うでない、然うでない。」と年寄は顫える首を振つて居る。

「もう男には懲々」と高々といつておさとも笑つた。

「それなア、お前さん熊谷へ遁げた事があんなすつた。私は伯母さんが憤るのをなだめて二度も迎へに行つた。そしたら、意地になつてお前さんは御飯を喰べない。困り切つたことがありましたつけ」と年寄は舊るい事をハッキリ思出した。

「本當によく御世話をかけました。その罰で今以て有達が上らずに居りますよ。」とおさとも娘時代の

熱した記憶を呼び出した。
「そして、あの市吉は何うなりましたな。」
「さア、何うなりましたてせう。」
「お前さんその後は一度も會ひなすつた事はないかね。あれも道樂はあつたが惡るい男ぢやなかつた。」
「一度會ひました。何ても芝あたりて何うにかやつて居るのてせう。小ザッパリした羽織ぐらゐ引掛けて居りましたから。」
「女房は持ちましたらうな。」
「何うで持つたに決つて居ます。」とおさとは外の事を考へて居た。
「お前さんも、あれとても好いから一所になんなされば好かつたにな。子の無い人はあとて苦勞なさるよ。」
「もう曾祖母樣止しませう。昔の事を云はれると、顏から火が出ます。」とおさとは乾いた笑方をして、年寄の傍を距れて風の通す窓際に腰掛けた。
屋根の上には栗の大木が、一杯に被覆さつて、日を透かす黄色い葉の所々に、もう薊の花ぐらひ青毬を着けて居た。
「好くなる木てしたね。」とおさとは葉裏を窺いて見て居た。風の吹く朝は、提灯を點けてこの木の下に栗を拾つたものてある。一升二升と溜めて、半襟や丈長と取換へて貰ふのが樂てあつた。

その頃から芋畑にして居た畑には今年も里芋を植えてある。葉も莖も可也に伸びて黒い土が黒く濕つた。

もう秋だ、こゝまで秋は來て居る。夏の心持は年々短かくなつて行く。小兒の時は夏も冬も、も少し長かつたと覺えて居る。

「曾祖母様、もう秋ですね。」

「然うなりますかね。」と年寄には夏も秋も無いやうに見えた。

玄關に俥が止まつた。駈出して行く人の足音が聞える。病人の事が氣になつて行つて見ると、それは何所かに出掛けた從兄の源吾が何所からか戻つて來たのだ。

「外は暑い〳〵。臺灣よりも暑い。」と云ひながら玄關から上衣を脱いで入つて來た。おさとを見つけて、「どうだ鶴吉、面白いところに居るでおやないか。俺も一度行つて見るぞ」小兒の時からの大きな聲である。

病間を窺いて見ると、看護婦の外唯も居なかつた。そつと枕元へ寄つて見ると、病人は小さな鼾を搔いてクン〳〵睡つて居る。もう一度自分へも話して貰ひたかつた。

「何うなんでせう、睡つて居ますか。」おさとは傍の看護婦に聞いて見た。

「何分灌腸が持ちませんのでね。」と看護婦は自分の風俗を見ながら、勿體ぶつた小聲である。

「灌腸て何うするのです。」おさとは全く灌腸を知らなかつた。

「まあ貴方。」と看護婦は噴出したい笑ひを眞赤になつに怺へた。

おさとは腹が立つて又中二階の隠居所へもどつた。年寄は又思出し思出しおさとも知らない昔の話を話出してはおさとにたづねた。おさとは夕方まで我慢して年寄の話相手になつた。

五

醫者の云ふところても、病症は思はしくない。何うて今夜は泊りになる。兎に角、家へその旨を電話かけると、それは承知したとあつて、代つて電話口に男の聲が聞えた。大鋸町の旦那とは直ぐ知れた。

「いゝえ、そんなぢやないんです。何うして〳〵。」おさとはクス〳〵笑つて居た。

「それからね、何時か御注文の唐辛は鼠入らずの蓋物へ入れて置きました。對州のですつて。お俊さんに然う云つて出してお上りなさい。」と電話を切つた。

「さア、斯う決れば好いんてず。私もお手傳へしますよ。」とおさとは小間遣の前掛を借りて、迷惑がる下女の仕事を奪つてセッセと働き出した。

「私が叱られますから。」と却つて下女の方が困つて居る。

「なァに好いんですよ。これが私の性分なんだから、貴方だちは默つて休んてお出て、臺所は私一人て受取ります。」と流し元の掃除から洗ひもの、平常手のとゞかぬところまてスッカリ奇麗にした。

「何うてす、サッパリしたてせう。」とおさとは自慢して濡れ手を拭いた。

「おかげさまて大變奇麗になりました。」下女と小間遣とは手を付いて禮を云つた。下水口に這つて居

た蝸牛は虚な曲物を見付けてそつとその中へ入れた。そしてそれを荒神樣の棚の隅へ乘せた。

さきの美しい娘が出て來て、「貴方あのこちらへ被來いッて。」とおさとを茶の間から呼んだ。

「はい、あの何か御用なんてすか。」と云ふ聲は少し調子が外れて居た。顏もまた赤かつた。

「祖母樣が大變好いてす。話をなすつて被在るわ。てすから被來いつて。」と一つ二つ句切つた言葉て、俯向いて云つた。

「私に。」おさとは襷をかなぐり捨てゝ病室へ入つた。ても、枕元には家内中がグルリと坐つて居て、おさとは病人の傍へ寄ることも出來なかつた。

「鶴吉、此方だ。此方へ來い。」と從兄の源吾は自分の席を半分外らせてそこへおさとを坐らせた。おさとは遠慮もなくその傍へ坐つた。

「伯母樣、鶴吉て御在ますよ。」

「貴方(あんた)のお母さんと同じ病氣にかゝつてな……。達者て御暮しなさいよ。」

病人とは思はれないほど確りした聲てあつた。その聲の調子まて死んだ母と些つとも變らない。五十幾日かの絶食に、母は犬の病と他に嫌はれる病にかゝつて或る貧しい裏長屋に貧しく死んだ。自分はその頃横須賀のある料理屋に遊んて居た。母危篤の電報を見ても差詰め着て歸るべき着物の才覺からして付かなかつた。

夏の夜の事てある。母は死ぬその晩に、茗荷の味噌汁を喰べたいと望んだ。

病人は廻りに居る人へ、下女の端までへ丁寧に言葉を掛けた。そして靜かに目を閉じて時の來るのを待つて居る樣子が見えた。

「皆あつちへ行つて。」從兄は目で相圖して、看護婦と自分夫婦の外は總て部屋の外へ出した。源吾でさへそこを外した。

ランプの火が持たないぐらゐ、それは風の立つ夏の晩であつた。皆は銘々に緣側や臺所や、窓に腰掛けるやら、銘々思ひ〳〵のところに退いて、靜かに來るべきものを待設けて居た。待つて居る心もまた悩しいものであつた。

おさとはそこに出て居るデセールを一つかみつかんで、中二階の隱居所へ來た。付けてある小女は晝一日の疲れにグッスリ寢て居るが、白い寢間着に着換えた九十六の老人は蚊帳の中にションボリ坐つて居た。風に灯を取られて、蚊帳の中には岐阜提灯の靑い光が射し込んで居た。

「鶴吉さん、下では何を騷いで居るのでせう。先刻から人の足音が耳に付いて睡られませんがの。」

「何んと云ふ事はありますまい。何か聞えますか。」

「嫁の病氣は何うですかな。誰に聞いても皆好い〳〵と云ふが、私は何うも氣になつて耐りませんて。男が無いのに、あれと二人でこれほどまでに爲上げた身上だが、あれに今弱くなられるやうな事では何うしませう。逆さまな不幸は見たくない。私些いと行つて嫁に會つて見ませうか。」とよろめいても立ちかねない樣子であつた。

「そんな事は御在いません、それはもう安心して被在い。誰が貴方にかくしだて致すものですか。」と袖の下にかくして來た喰物を年寄の手に握らせた。年寄はそれをボツ〳〵喰べながらも切りと下を氣にしてその話しをして居た。

おさとも横になつて夜の更けるまで話して居た。

「貴方。貴方。」と小間遣に足の裏をつゝかれた時には、おさとも疲れ切つてトロ〳〵と睡つて居た。舊い昔が夢に見えて居た。

病人は夜の拂曉ごろ目を瞑した。世間で好く眠つたやうな姿とはこれを云ふのだらうと思つた。

一人死ねば十七人の腕とか云ふ譬の通り、後始末やら葬式やら急がしい事が初つた。取分けて女どもには落付いて泣いて居る暇さへ無つた。下女は仕立下しの紺くさい浴衣を下して、汗になつて臺所に働いた。忌のかゝつて居る人の中でも重い血統のおさとは洲崎の事が氣になりながらもそんな事には換えられなかつた。

「鶴吉さんには飛んだ御迷惑てしたね。また此方の方へお出てゞしたら、些く〳〵寄つて佛樣のことをしてあげて下さい。」

從兄の嫁は形見分けの帷子に鷹の羽の紋の付いた銀の煙管とをおさとへ出した。

「曾祖母樣に萬一の事がおありのやうてしたら、今度は早く知らせて下さいまし。私參つて本當のお世話を致したう御在ます。」とおさとはこの時ばかりは心から涙がこぼれて口が利けなくなつた。

三日四日をわがもの丶やうに振舞つて暮した舊い馴染の家とおさとは分れた。又二度とこの家を自由に見ることは出來まいと思ふやうな弱い氣も湧いた。

俥を急がせて、洲崎の門をくゞる時には、暮がたい夏の夕暮が沈んで暮れる頃であつた。家々には最う灯が入つて居た。果して家イは大紛雜、客が三組一緒になつたのにお俊一人て何うすることも出來ないと云ふところであつた。

病人も死人も語つて居る暇も聞いて居る暇も無つた。

「好し來た、大丈夫。」とおさとは包物を投出してサラリと着物を着換えた。何よりも腹拵へるのだとて、臺所へ駈込んでお茶漬を三杯詰め込んだ。（完）



三題吟

繞石

水飲や夕凪ぎ癖も月出れば
師の掟一汁一菜やひやし飯
水飯や百の雲水常に在る
水飯や紀文眼さめて日の高き
水飯や授戒會式の照りつゞき
竹夫人寄する身につと轉げ去る
枕頭の李白全集竹奴かな
抱籠や衣鉢つがすに若き僧
閨怨の一詩夜毎や竹夫人
閉さぬに夜凉眼さめぬ竹夫人
河身遠く移す工事や旱り雲
代官をそしる俚謠も旱かな
最澄を空海を召さる旱り年
瀬に乘りし儘の筏や旱り雲
棟上の棟のくるひも旱かな



梶原重雄

月光は青き木立にひろごれり獨をれどもさびしまぬ宵

ほしいまゝに一人もゆるかあなさびし大海原の上の夏の日

水の神いねもかねたる夜と思ふかぜわたる江に月は隅なし

夏の日に一葉たりともしをれざる杜の大樹によりて歌へらく

月青くしづかにかゝる今にしてはじめて知りしうれひの狀態(かたち)

野の石のおもてさびしき日となりぬ今初秋の風やふくらむ

三浦曉村

さびしとて涙ぐむ子をあざ笑ふそのさびしさを知る人や有る

うれひはて倦みはて人は昏々と眠りに入れり夜半の鐘鳴る

夏はきぬたゞなにとなくなつかしき心地おぼえて大海を見る

かぎりなくかなしきことを思ひ出てひとりむかへるふけし灯のまへ

つかれたる心はかなし一刻もはやく眠りをのぞみてやまず

かへりみてわがこしかたのあまりにもさびしとなげく日の多きかな

あるときはわれを忘れてもとめたるものを故なくすてゝいとはず

青き月てる夜は思ふふるさとの渚をあゆみ泣きしてとゞも

○　橋口暮山

われ今日も歌をうたへり悲しみを悲しみとして今日もうたへり

わが性を悲しむよりもわが性によく似し友をいたく悲しむ

いさかひをいさかひとしてうち笑ひ別るゝまでになりにけるかな

○　本間五丈原

にほやかにかはたれどきの花の數淡きが程を月は照るかな

わが小女秋をさびしと口ぐせに語りて雨のとほ山を見る

われはいふ只いとけなし我はいふこの少年のわびしてふこと

今日も亦おもへり空の一點に我なる人をさながらに見ん

關孤帆

風そよぐ若葉の月に佇めば癒えし痛手の亦よみかへる

とろ／＼とされども消えぬ野火の如疲れて今日をまたも暮らしつ

いつしかに眠りぬひとり夕ぐれの疲れし海の音をきゝつゝ

ひたすらに青き月光青き海そが中に我れひとり呼吸す

○　脇屋富子

天地に一人の知己を得しこゝろとばかりまでに止むべかりしを

○　本間五丈原

夕小雨落くるが如きしづけさを思ふばかりの我なりしかな

○　橋口暮山

くろがねの太きくさりを解かれたるごとく夕の工場を出づ

君まさぬかなしきよひと空見れば月もうるみて森の上にあり

男性のほこるに足れるものなるやかくわが胸にわがひとり問ふ

○　善波白裝

今日も亦人を僞りいつはられ何等なやみもなげに暮らしぬ

「かの手紙今頃いかに見てあらむ」冷えたる卓に肱枕きておもふ

天地にわれも生ける子天地の響の中にわれも謳ふ子

日は白う空にうるめり無邊際靑きうれひに今日もとらはれ

○　本間清

しづかなり只しづかなりちひさなる水に點うつ藍いろの影

ふかみどり靜かなること安きことなみだの如き海を見るかな

あざやかに眞夏みどりの光おちておつる所のしづけさに倚る

○　鈴木武男

やう／＼にして葬りし一日の暮つくねんと灯に對ひゐぬ

「今日も暮れぬ」と暮れし空を見つ何の思はむこともあらぬ夕よ

心をば君にさゝげて水無月の光の中にわれのうたへる

○　小川眞清

病む人のおとづれをきく心地してともしかゝげぬ山ほとゝぎす

靑すすき中に眞白う百合さきぬわれ見る君がみ瞳のごと

撫子の花を折りつつ砂山を下りて君と船にいこひぬ

すかんぽの莖のあかきぞなつかしき小さき昔の目に浮び來て

すらび生

遠き道人はたふるればいくたりもあえぎ／＼て
そのうえをゆく

ふた心君はもたぬといふ刹那野火より早く君を
うたがふ

つかれたるわが眼(め)にうつる夏草のしげみなつか
し撫子の花

○ 日下天智

あたらしき生にかはりし後の日の喜びに滿つ今
日の天地

長き夜はわびしきものよ君もだしわれも語らず
嵐のみする

鬼の來てわれをばはむとふと思ひ淋しくなりぬ
嵐する宵

われは世を世はわれ容れずとも／＼ににらみて
立てる如きこゝちす

○ 關本梁付

世の常の人の如くにわれもまた生きべくといふ
かなしみを知る

僞りもほほゑみて聞きかなしびもほほゑみて聞
く母なりしかな

生きざるを得ざる人等も生く人も皆急がしく午
後の街ゆく

われとわがちいさき性をあきたらずあきたらず
して過ぎし幾年

悲しとも思ふことなくうれしとも思ふ事なく日
は過ぎてゆく

かなしさ嘆く日あれどうれしさに喜ぶといふ日
は未だ來ず

▲應募和歌原稿は必ず小石川原町百三十三尾上柴舟宛たるべき事



殘暑

燒け跡の古井戸洒す殘暑かな　へき
舟虫の褌に殘る暑さかな　同
くり〳〵と再び剃りぬ秋暑き　同
猶ほ蚤に猶ほ蚊に殘る暑さかな　同
溢取りの裸男も殘暑かな　鶯溪
辻に賣る氣拔けラムネや秋暑し　雨萍
物忌のあせし簾に殘暑かな　呼灯子
水際まで藻しげる沼や秋暑し　萍月
餘り溫泉に浸す刈麻や秋暑し　キ山
臺灣の風土を夜話や秋暑し　水竹
藥草壁に干からぶ殘暑かな　東窓
心せねば戾る寢癖や秋暑き　南陽
盛葬の車馬の埃や秋暑し　櫻圃
日ねもすの五日並べや秋暑し　二葉子

秋暑や借家がへして鐵氣井戸　雨村
道くづれに下りる磧や秋暑し　棋葉
避暑名所見飽く殘暑の徒然哉　三錢子
公園を限る鐵鎖も殘暑かな　榴炳子
句の事に寄りて殘暑の瓜を割く　外峰
村芝居の夜每稽古や秋暑き　樵子
秋暑き河原相撲の土俵かな　步風
泥じみの馬の腹掛や秋暑し　野鳥
賣らぬに豆畑の草や秋暑し　芦人
瓜店の多き夜祭殘暑かな　十八春
庭十步隣は倉の殘暑かな　菉童
道普請吏の權柄も殘暑かな　胥山
風呂水も汐汲む浦の殘暑かな　竈馬
色褪めし繪日傘の花鳥秋暑し　糸水
表札の瀨戶に日ざしも殘暑哉　烏城
秋暑や紙魚住む護符を日に晒す　明兮
笠にこてと生國氏名秋暑し　あきちの
腹稿を筆の溢りも殘暑哉　天仙果
魚洗ひし水を植木に秋暑し　南鳳
秋暑う繕の仕替も庫の蔭　寒山老
馬洗ふに川まで乘るも殘暑哉　玄々郎

秋暑や高飛ぶ鳥のおとす糞　慘冬

つきべりの臼の手入や秋暑し　四絃郎

不漁語る蜑が裸身殘暑かな　人生

天井の龍の爪牙に殘暑かな　耳山

秋もまだ染屋暑げに蛬砧　暮雨

溫泉を去にぬ殘暑の一句止めけり　痩脚

五右衛門の百日鬘秋暑き　青海波

朝の冷云ふ山宿も殘暑かな　瓜鯖

陋巷の殘暑に市隱訪ねけり　鬼洗

留守を使ふ住持裸や秋暑し　梁村

釣糸に網に虫つく殘暑かな　飛槎史

羅市の秋まだ暑き叫びかな　洛燕居

明石潟に寄れば殘暑や淡路舟　四水

炎帝の馬かへすげに秋暑し　同

兀山を望む殘暑の市井かな　芳榔

みな尻の曲る胡瓜や秋暑し　同

秋暑し舷を這ふ船虫も　不騒

銀泥のはげし殘暑の扇かな　同

高盛りの糠くさき飯秋あつし　馬皷洞

鼻につく線香粘る粉も殘暑哉　同

脂をふく桃老木や秋暑き　翠星

朝曇り夕晴のして殘暑かな　同

澁三度色づきし網殘暑かな　五得

秋暑し島司が門の黑きにも　同

天險に糧道絕へて秋暑し　猨子

連まつと軒に吊る笠秋暑し　同

修繕見込なき楊舟や秋暑し　燕石

凪濱に沿ふ幕舟や秋暑し　同

殘部曝す萬卷樓や秋暑し　桃紅

出る雲に風雨の論も殘暑哉　同

秋暑や壁土踏みの脛の泥　尺水

秋暑き樟脳の香や藏書庫　同

泥炭を干す燃す里の殘暑哉　石鐘

心枯れて立つ大桐や秋暑き　同

耳近く兒が吹く笛も殘暑かな　ふせつ

鞍ずれの瘡がての馬や秋暑し　同

鈍刀に不如意の像や秋暑し　月舟

用ひぬに錆湧く釜や秋暑し　同

秋暑きコップの垢や琉球酒　同

脾の病膏肓に入る殘暑かな　不寝庵

水炙の跡こそばゆき殘暑かな　同

から鳴りの雷遠き殘暑かな　同

豆篩ふて嵩ある塵や秋暑し　健川
秋暑う土手に打上げ芥かな　同
又伸びし狹庭の草も殘暑哉　同
鉋屑かさばり踏むや秋暑き　小々
覇王樹の子に子の秋の暑さかな　同
草の戶の厠かくさぬ殘暑がな　同
秋暑や葛籠の底の紙魚はたく　春溪
縄に吊りて烏賊干す漁家や秋暑し　同
松に絡む糸瓜の蔓や秋暑し　同
甕の出來も序でに殘暑見舞かな　太郎
草湯する蚊まけ蚋まけ秋暑し　同
茄子汁にすます遠忌も殘暑哉　同
秋暑も山に木樵りて達者哉　總子
秋暑し芭蕉敗蝬す幾夜經し　同
化粧糠殘暑の虫の巣くひけり　同
鋸の歯の利かぬ朽木も殘暑かな　麥門冬
溝板に荷車押すや秋暑き　同
秋暑し髭剃ればげに法師顏　同
壁懸の地圖に殘暑の日脚かな　雷音
泥かぶれする出水後や秋暑き　同
秋暑き糸瓜への字にくねりたり　同

漁家百戶干物の產地秋暑さ　同
溫泉迎ひも二三日居る秋暑し　半醉
秋暑や實る實らぬ田のはなし　同
村祭り差しとめられし殘暑哉　同
芭蕉植只換へんとぞ思ふ秋暑し　同
針さして毒血とる馬も殘暑哉　黑佛
虫熟れのして梨子落る殘暑哉　同
大根の肥焼け憂ふ殘暑哉　同
除虫菊二番生ひ咲く殘暑かな　同
箱の木香米にうつりし殘暑かな　荻風
畠にもならぬ痩れ鹽田秋あつし　同
鑛山町に宵の絃歌や秋あつし　同
苅りし秣また苅る程や秋暑し　同
秋暑き湖渡船無き宿りかな　夕蟬井
秋暑し舟に腐りし溜り水　同
浮草に泡たつ沼の殘暑かな　同
秋暑し刈り殘されの甘蔗畑　同
秋暑く小さき花咲くものの蔓　同
かなかなの鳴けど蟬鳴く猶殘暑　月仙
秋暑しさは急かてもの碑の工事　同
鐵道に沿ふ道底き殘暑かな　同

日に燒けし暖簾に暑さ殘りけり　月仙

天瓜粉遣ひ餘しも殘暑かな　同

船宿に思ふ水嵩や秋暑し　盛花

戸を閉てゝ家業疎みも殘暑哉　同

小豆粥藥に煮るや秋あつし　同

床ずれにたゝぬ足腰秋あつき　同

日に晒す馬の寢藁や秋暑し　同

藏普請壁片塗りに殘暑かな　同

藍壺の底湧く泡も殘暑かな　同

賣りし山思ふに里の殘暑かな　同

馬のこと消息にして殘暑かな　同

月旦の誹謗に終る殘暑かな　碧雲居

酒を酢になほす工夫も殘暑かな　同

門草に饐る米糠や秋暑し　同

キチ〳〵と夜を啼く蟲や秋暑し　同

串の鮎殘暑の軒にからびけり　同

童寢癖ふつに止みしが殘暑哉　同

末の子の蟲封じして殘暑かな　同

酒にがき恙に殘〻わびにけり　同

牛の産見に村こぞる殘暑かな　同

墓掘りを見れば鬼とも秋暑し　同

本號應募者九十八名、句數總て千九百四句

募集課題

綿摘　九月十日締切

小鳥網　十月十日締切

定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事

句數は一人十句以上三十句以下の事



隱立(かくしたて)する國民

野逸道人

どうせ人間は人間である。神樣のやうな人間も、惡魔のやうな人間も、さうあるものでない。若しあつても千人に一人、萬人に一人であらう。お互同志はよい事をしたり、わるい事をしたり。出來(でか)したり、しくじつたり。起きたり、倒れたりして世の中を渡つて行くのである。「屁(へ)を放つたり沈香を焚いたり」するのが普通の人間である。如何に鹿爪らしい顏をして居ても、別嬪と向き合つては眼尻も下らうし、如何にお膝に手をついて瘦我慢をしても、御馳走を鼻先に突き附けられては口に唾も溜らう。然し其れは些つとも耻づべき事でない。お互がみんな、さうなのであるからして、寧ろ當り前の事である。それを「拙者は女は嫌ひで御坐る」。「食物(たべもの)は一向欲しう御坐らぬ」といふ風を裝うてい、したり顏をする連中、それを欲めそやす連中。人間を正面(まとも)に見て居るものから見れば、可愛相でもあり、又滑稽でもある。何故(なぜ)人間はさう隱立をせねばならぬのか。今少し打明けて、サラケ出して、物事を手取早く極まりをつけた方がお互の利益(ため)である樣に思はれる。

僕は歐米人と交際(つきあひ)をした事がないからよく知らぬが、交際つた人の話を聞くと歐米人は、日本人よりも遙かにオープンで面白く思はれるといふ事に意見が一致するらしい。さうであらう。吾々日本人には「交際(つきあひ)」といふことは「愉快」「歡樂」などといふ言葉と同意義ではなくして「苦痛」「義務」などいふ觀念と相似寄つたものと思はれて居る。そんな馬鹿げた事が少し物の分つた國民にあるべき筈のものでない。何故「交際(つきあひ)」といふことが「苦痛」となり「義務」となるかといふと其主もなる理

由は、僕にいはせると、日本人は餘り物事を隱立するからと思ふ。滑つても轉んでも隱す。可笑しい事があつても笑はず、悲しい事があつても泣かぬのを得意とする。天眞の流露などいふ事は滅多に見られない。それでも其爲めに人が高く買て呉れるならそれもよからうが、お互同志皆隱立する連中であるから、對手の腹の底は大抵讀んでゐる「アレはあんな旨い事をいつてゐるが、ナアにこの位の處だらう」といふ風に高を括つてゐる。多くの場合は實際よりも低く値踏みをして居る。だから實際はイヤに曲りくねつた道を歩きながら近道を歩るいたと思うて居るやうな愚な事をして居るのである。

日本人が何故、さう隱立をする國民になつたか、それにはいろ／＼原因もあらう。先天的原因もあらうし後天的原因もあらう。僕は原因については考へて見た事がないから知らぬが、極く手近い處でいへば、日本人は人を容るゝの雅量なく、よく人のアラを探すことを好む人種だといふ事も一原因をなして居ると思ふ。

例へば或人が小學校の先生になつたとする。村の人が先生の一擧一動に注意する。そして何かアラを拾つて惡口をする。道傍に唾をした事まで尤め立てし兼ねない。それを氣にも留めずに居ると、村の問題になつて、先生も勤まらぬ事になる。だから、嫌でも應でも聖人顏をしてゐねばならぬ事になる。さういふやうな事も確かにある。然しお互に傍の事を氣にして、思ふ事もせずに居つては、只お互に損をする許りである。一つ思ひ切つて、足を投げ出して「君、失敬する」と膝を崩せば、同じ痺れに苦しめられてゐた連中は、ホッと息を吐いて皆座を寛げるかも知れない。新奇な事をやる時には、人のするのを待てゐては駄目である。先づ自ら進んで手本を示すべきである。虚禮虚飾の時代は既に去らんとする。腹藏（レサーヴドネス）といふ字は辭書から削りたい。それには銘々が心懸けて成るべく物事を打明けるに限る。打明けるやうにするには人間はどうせ人間である、といふ事を悟るのが一番の近道であると僕は思ふ。



噂の種

醉美生

○田山花袋氏を訪うて「世界で一番エラカッた小說家は誰でせう」と聞くと、「さア、返答に困るな」といふ。「そんなら、ツルゲネフとフローベルとモーパサンでは誰が一番エラインんです。ツルゲネフが一番ですか」といふと、「何うも何ともいへないが、ツルゲネフが一番駄目だらう」といふ。「そんならフローベルですか」「さうでもない」「それぢや、モーパツサンでせう」「まア、さうだらう。少くとも僕はモーパッサンから一番恩惠を受けたやうだ」といはれた。

○此話を島崎藤村氏の處でして、「あなたは何と思ひます」と訊くと、ゲーテあたりまでは誰が一番エライかといふやうな事が言へた。私などもゲーテを非常に崇拜した時代がある。然し其後は誰が一番といふやうな事はいへない。銘々異つた特徵があつて、獨りで總ての天分を兼れ備へく居るといふ事は出來ぬものらしい。ツルゲネフなどは大變に面白いがあの人のを讀めばもう行くべき處に行つて了つたやうな氣がする。又トルストイなども非常にエライ作家だ。書いた丈けでいへばあの位の事を書けた人は外にないかも知れない。けれども、どうもトルストイは或所まで人を連れて行て其れて投げ出して了ふやうな氣がする。あの人から得る所は極めて少い。そこになるとモーパッサンなどはいろ〳〵な事を思はせて、これから先がまだ〳〵あるやうな氣をさせる。私はどうもさういふ作家の方がエライやうな氣がする。然し大體からいふと、佛蘭西の小說は人間の一方面を鋭く見せるが、全體を見渡すことになると露西亞の作家の方がエライやうだ。どつか田舍者といふ趣はあるが全體としての人生といふものゝ臭ひは露西亞の作に强い。」といはれた。

○小村外相がポーツマスから歸つた時に「お土產は何にもありません只滿洲の鐵道丈けです」といつた相だが、今度の安奉線一件で所謂懷柔政策を捨てたらしく見えたのも、全く其の秘藏子の鐵道――殊に小村の最も目をつけた安奉線――に關した事であるからだ相だ。あの一件が納まれば、他の方は今迄通り成るべく支那に讓つて行くだらうとの噂だ。

○「支那人は棒の先でなければ動かぬし、支那の國は劍の尖でなければ動かない」といふのは大間違ひて、支那人は笑顔でなければ動かぬ國民だ。英佛が莫大な金をかけて、戰爭をして僅かに英租界などいふ町を建てたに過ぎぬ。露西亞のイグナチエウスは只ニッコリ笑つて見せて、滿洲をペロリと一嘗めにした。日淸戰後、殊に北淸事件以後日本の

評判よかつたのも、日本がおとなしくして居た爲めて、日露戰爭までの支那の外交は悉く日本て支配して居たやうなものだ。露西亞に勝つたのも其爲めだ。それはみんな力づくの事てなくして笑つてゐた爲めだ。小村は安奉線てはムキになつたが、これからは笑つてゐやう。どうせ世間て評判のよくない小村だから今少し辛棒して、國民が如何に惡口しても、支那に對しては笑つてゐなくてはいかん。」といふのは某論客の說。

○「モーパッサンが初めて文名を知られたのは卅歲の時て、其れ迄七年の間フローベルの弟子となり、書いても書いてもフロベールは之を公けにさせなかつた相だ。フロベールの弟子となる時には已に可なり書けるのであつたらうが、それから七年といふのは、待たせる人も待たせる人、待つた人も待つた人だ」と島崎藤村氏がいつてゐた。早く名を出したいとアセリにアセル少年文士の考ふべき敎訓であらう。

○「時事」に出てゐる「內外百書選定」を見ると、自分の趣味や鑑識て選んだものは極めて少なく、多くは在來の有名な本を漫然擧げたやうに見える。中には未だ一頁も讀んだ事のない本を擧げたらしいのもある。問を發した人の人選に就ても僕には異存があるが、あの答を見ると酷く失望せざるを得ぬ。ナゼ今少し大膽に又自信深く、トラヂシヨンに依らずに自己の趣味に從て選ばれぬであらうか。

新刊批評

▲春汀全集（第二卷）
鳥谷部春汀著　博文館發行

故鳥谷部春汀氏は極めて人格高き好人物として又穩健周匝なる人物評論家として一代に喧傳せり。第二卷收むる所「外交家月旦」「軍人月旦」「文士記者月旦」「敎學界月旦」「實業家月旦」にして、材料の豐富なる、論斷の穩當なる、文章の暢達なる皆斯界の珍品たり。讀書子の机上必ず此書なかるべからず（定價一圓九拾錢）

▲額の男
長谷川如是閑作　政敎社發行

「?」といふ標題を以て「大阪朝日」に連載せられたる小說也。諸種の人物を藉りて著者の人生觀めいたものを披瀝したものらしく、文章などの古臭くして幼稚なるより推せば、著者は恐く文壇の現狀について極めて疎き人なるべし。露伴博士の序文も亦博士の小說界の新傾向についての智識の淺きことを示したりといふべし。（定價九十錢）

▲永日
尾上柴舟著　弘道館發行

柴舟氏の詠、皆穩やかにして優し。天才的靈火の胸底より閃くが如きもの少けれども、修養ある紳士の雅懷亦捨て難き趣なきにあらず。製本用紙極めて上品にして數多き挿畫も一方ならぬ美觀を添へたり。（定價八十錢）

▲乞食

長谷川二葉亭譯
彩雲閣發行

ゴルキーの「乞食」、ゴーゴルの「狂人日記」の二篇を收めたる袖珍本也、一昨年頃雜誌「趣味」に掲げられたるものなるが、譯者の故人となれる今日、又別種の感慨を以て讀まる(定價卅八錢)

▲花つみ日記

姉崎嘲風著
博文館發販

歐洲漫遊中日々の見聞所感等を仔細に書き止めた日記の中、之はその南歐は伊太利に於けるもののみである、普通一遍の觀光客とは違ひ、至る處交友を尋ねて互に親しく往來し睦まじく胸襟を開き、其處に何等の國家的境域なき家庭的の溫情に浴して來たのだから、別に巧まず飾らざる素直なる文章の中に自づとそれが現はれて、自然と人間との醇化しあつた渾然たる情趣が流露して居る、明窓淨机靜に讀みもて行けば當に異鄕の新事物に接して新智識を得るの快のみならず、何となく四海同胞の四字の空文字ならぬ感じ起り、世界平和の最終の理想に向つて急ぎたき心地を促すのは特に此著の賜と思ふ、幾多の寫眞版特に當時彼地より發したる繪葉書の多く挿まれたるは甚だ趣多きものである、吾人は更に斯日記の伊太利以外に於けるものを續刊されんことを望む(定價金壹圓參拾錢)

▲源頼朝

山路愛山著
玄黄社發行

著者の史を書くや先づその地理を見、その風俗を察しその制度を調べその勢の推移に鑒みその時の事情に照し、然る後に斷々乎として自己の意見を吐く、往々新說の人の耳目を動かすものが有るけれども、用意周到一々根據の確なるものあり、強ちに聞心地よき獨斷の見とのみ見るべからざるものがある、本書の如き實にそれである、最後の處に賴朝の性格を一括して論じ、世間往々にして賴朝を以て猜忌心の權化と見るの妄を破し、幾多の例證を用ひて況して當時の地平線以上に傑く見らるべからざるの人物となして居る、それには未だ容易に首肯き難き節も有るものから、猶ほ吾人は著者の此史的態度を喜ぶものである、(正價金九拾五錢)

▲深草の元政

青山霞村著
東亞堂發行

深草の元政といつば大分流行役者で能く人口に膾炙されるのだが、それ丈多くの誤謬が絡んで居る、第一に上人の前身を以て仙臺侯に殺された高尾の情人とする事、第二に所謂元政の壁書なるもののある事等だが、此書は一々確實なる論證を以て一切の謬說を蕩し去つた上、著者は元政に關係ある事とて更に知られぬ新しき材料を多く包有して居る、一讀の値あるものだ(正價七拾錢)

▲青年諸君

和田垣謙三著
至誠堂發行

嚴格なる敎訓をユーモアの中に融化して聞かすもの、僻見も澤山あるが、強ち然らざるもので、他人よりせば欠伸を禁ぜざる如き尋常の說法ても、一度び著者の舌頭より落つれば忽ち一種の快感を覺ゆる妙味があ

る。（定價金壹圓）

▲基督教窮す　加藤弘之著　同文館發行

窮せるか窮せざるか、吾人は之を知らぬ、否眞の基督教なるものが加藤博士の一撃の下に怯むべきものか吾人は暫く玆に言はぬ、吾人が加藤氏の説に慊らぬ事は已に幾度も本誌に於て示した事だ、が此著を讀むに及んで吾人は著者の引用句により初めて四五の基督教徒の駁撃の愚にして力なく誠に博士の一撃を値するもの多きを慨嘆した。吾人は博士の老骨稜々益々屈せざるの意氣を愛すると共に、その意氣に報ふべく今少しシッカリした學者の力ある批評の出づる事を望む（金四拾五錢）

▲英語正確使用法　高橋五郎著　實業の日本社發行

一般英學者の誤用し易き幾多の字句や語法やに就き緻密なる解釋を與へたもの英學に志すもの座右に備ふべき良書である。（定價金六拾錢）

▲釋尊物語　本田無外譯著　文明堂發行

アルペルズ女史の原著佛陀法を譯したもの、坊門に行はるゝ多くの釋迦一代記の如き詰屈なる文字怪詭なる法說なき上に譯文又甚だお伽草紙體に今樣の語に碎けたる處普及の力あるものと信ずる。（定價三十三錢）

▲天文地學講話　橫山又次郎著　早稻田大學出版部發行

天文地學は、「地球を天文學者の見地より見て論ずる地學の一部分」てあつて、斯界のオーソリチーを以て目せらるゝ橫山理學博士の此著初學者には固より又斯界を益することも蓋し尠少にあらざるべし。插畫百貳拾餘個あり。（定價一圓三十錢）

▲地史學講話　橫山又次郎著　早稻田大學出版部

地史學は「地球と、其上に生息した生物との歴史を講ずる學問」であつて、前著と同じく橫山理學博士の著也。所謂平坦にして、論證該博、何人にも興味ある書也。木版三百五十餘個を挿む。（定價一圓七十錢）

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 日本橋呉服町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋鎗屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

本號限定價金廿貳錢(郵稅一錢五厘)

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘(外國郵稅八錢)

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵稅共

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增の事
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年八月廿六日印刷
明治四十二年九月一日發行 (禁轉載)

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 (電話下谷九一九) 反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

